

192
55

故實
叢書
武家名目抄

居處部

卷十六



武家名目抄稿十六目次



第百二册居處部廿五

殿注 一七〇七
 九重殿主 一七〇八
 七重殿主 一七〇八
 五重殿主 一七〇九
 三重殿主 一七〇九
 矢倉 一七一一
 櫓楯楯 一七一一
 高櫓 一七一一
 二階矢倉 一七一二
 三階矢倉 一七一二
 渡櫓 一七二二
 門矢倉 一七二二
 隅矢倉 一七二三
 向櫓 一七二三
 走矢倉 一七二三
 出矢倉 一七二三
 着到矢倉 一七二三

一七〇七
 一七〇八
 一七〇八
 一七〇九
 一七〇九
 一七一一
 一七一一
 一七一一
 一七一二
 一七一二
 一七二二
 一七二二
 一七二三
 一七二三
 一七二三
 一七二三

トカハノ矢倉 一七二四
 端矢倉 一七二四
 小矢倉 一七二四
 見七櫓 一七二四
 昇矢倉 一七二四
 土矢倉 一七二四
 井樓 一七二四
 矢倉井樓 一七二六
 釣井樓 今元 一七二六
 太鼓矢倉 今元 一七二六
 鐘撞堂 一七二六
 第百二册居處部廿六



一七二四
 一七二四
 一七二四
 一七二四
 一七二四
 一七二四
 一七二六
 一七二六
 一七二六
 一七二六
 一七二六
 一七二七
 一七二七
 一七二七
 一七二七
 一七二七
 一七二七
 一七二八
 一七二八
 一七二八

武家名目抄稿十六目次

出塚	一七二八
踏橋塚	一七二九
出張塚	一七二九
釣塚	一七二九
構塚	一七二九
第百三册居處部廿七	
狭間	一七二〇
矢狭間	一七二一
箭間	一七二二
鐵炮狭間	一七二二
土狭間	一七二二
横狭間	一七二二
足下狭間	一七二三
弓藏	一七二三
第百四册居處部廿八	
土居	一七二四
土手	一七二五
芝手	一七二五
長土手	一七二五
シトミノ土居	一七二五

カサシノ土居	一七二五
カサシノ土手	一七二五
ナカシノ土手	一七二五
武者走	一七二六
犬走	一七二六
馬防築地	一七二六
石築地	一七二六
石倉	一七二六
石垣	一七二七
鹿垣	一七二七
壘垣	一七二九
菜垣	一七二九
菜	一七二九
揚菜	一七二九
第百五册居處部廿九	
堀	一七三〇
總堀	一七三一
構堀	一七三一
外堀	一七三一
内堀	一七三一

二重堀	一七三一
大堀	一七三一
長堀	一七三二
タツ堀	一七三二
水堀	一七三二
泥田堀	一七三二
乾堀	一七三二
藥研堀	一七三三
堀切	一七三三
落穴	一七三三
落	一七三四
車橋	一七三四
引橋	一七三五
跳橋今元	一七三五
廊下橋	一七三六
造橋	一七三六
拾橋	一七三六
結橋	一七三六
舟橋	一七三六
浮橋	一七三六

關所	一七三七
關	一七三七
新關	一七三八
柵	一七三八
一柵	一七三九
二柵	一七三九
三柵	一七三九
二重柵	一七三九
三段柵	一七四〇
彫貫柵	一七四〇
柵木	一七四〇
柵網	一七四一
矢羅井	一七四一
矢切	一七四一
キテ	一七四一
亂杭	一七四二
逆木	一七四二
虎落	一七四二
大虎落	一七四四

第百六册居處部三十

内虎落 一七四四
 逆虎落 一七四四
 御所 一七四五
 廣御所 一七四六
 小御所 一七四六
 東御所 一七四六
 東小御所 一七四六
 上御所 一七四六
 常御所 一七四六
 三條御所 一七四六
 黒木御所 一七四七
 濱御所 一七四七
 二條御所 一七四七
 御殿 一七四七
 柳營幕下 一七四七
 殿中 一七四七
 政所 一七四七
 御屋形 一七四八

第一百七冊居處部附録一

屋形 一七四八
 御館 一七四八
 館 一七四八
 御守殿 一七四九
 支關 一七四九
 御對面所 一七四九
 御座之間 一七四九
 廣間 一七四九
 大廣間 一七四九
 寢殿 一七五〇
 御臺所 一七五〇
 御懸ノ南 一七五〇
 座敷 一七五〇
 客殿 一七五一
 渡殿 一七五一
 御所廊 一七五一
 廻廊 一七五一
 廊切妻 一七五一
 湯殿 一七五一
 染殿 一七五一

御薙ノ縁 一七五二
 大床 一七五二
 納殿 一七五二
 御厩納殿 一七五二
 御亭 一七五二
 八條亭 一七五二
 里亭 一七五二
 鎌倉御亭 一七五二
 御輿寄 一七五二
 車寄 一七五二
 車排 一七五三
 御下車所 一七五三
 御厩 一七五三
 馬立 一七五四
 倉廩甲倉圖 校倉 一七五四
 寶藏 一七五四
 額突 一七五四
 新府 一七五五
 評定所 一七五五
 奉行所 一七五五

第一百八冊居處部附録二

役所 一七五五
 記録所 一七五五
 公文所 一七五五
 シラス 一七五六
 代官所 一七五六
 御厨 一七五六
 臺所 一七五六
 絲所 一七五六
 御坪 一七五六
 鞠御壺 一七五七
 石壺 一七五七
 大庭 一七五七
 奥ノ殿 一七五八
 御帳臺 一七五八
 御くわんすのま 一七五八
 留守所 一七五八
 殿守 一七五八
 侍 一七五八
 侍ノ縁 一七五八

外侍	一七五九
小侍	一七五九
遠侍	一七五九
西侍	一七五九
厩侍	一七五九
御會所	一七五九
祈禱所	一七五九
新造御壇所	一七五九
對屋	一七六〇
御作事之間	一七六〇
弓場	一七六〇
庭の坐	一七六〇
馬場淺敷	一七六〇
馬サクリ	一七六〇
檜皮葺屋	一七六〇
萱屋	一七六一
萱葺屋	一七六一
蘆葺	一七六一
健兒所	一七六一
四阿 <small>東下屋</small>	一七六一

平屋	一七六一
母屋	一七六一
弘庇	一七六一
簀子	一七六一
竹のすのこ	一七六一
坊舎	一七六一
くすや	一七六一
妻戸	一七六一
切妻戸	一七六一
狐戸	一七六一
沓脱	一七六一
庄庫	一七六三
木屋	一七六三
廣簀	一七六三
居所	一七六三
道場	一七六三
第宅	一七六三
屋舖	一七六四
兵庫屋布	一七六四
假屋	一七六四

第百九冊居處部附録三

御旅館	一七六五
宿所	一七六五
小屋	一七六五
荒座 <small>小アカリノ坐</small>	一七六五
あらた	一七六六
番所	一七六六
遠見番所	一七六六
移宅	一七六七
土木之事	一七六七
護摩堂	一七六七
懺法堂	一七六七
紫宸殿	一七六七
公卿間 <small>天上間</small>	一七六七
天鏡間	一七六七
泉殿	一七六七
看雪亭	一七六七
本丸	一七六七
西ノ丸	一七六七
二ノ丸	一七六八

三ノ丸	一七六八
出丸	一七六九
城	一七六九
本城	一七七一
根城	一七七一
府ノ城	一七七一
附城	一七七一
向城	一七七一
館城	一七七三
子城	一七七三
外城	一七七三
端城	一七七三
ツメノ城	一七七三
斥候城	一七七三
支配城	一七七四
城郭	一七七四
總橋	一七七四
マトハ曲輪	一七七五
外曲輪	一七七五
町構	一七七五

第一百十册居處部附錄四

大手	一七七六
搦手	一七七七
大御門	一七七七
中門	一七七七
屏中門	一七七八
裏門	一七七八
屏重門	一七七八
四足門	一七七八
四足脇門	一七七八
平門	一七七九
棟門	一七七九
土門	一七七九
冠木門	一七七九
小門	一七七九
西ノ門	一七七九
東門	一七八〇
南門	一七八〇
西ノ大門	一七八〇
東ノ大門	一七八〇

軍門	一七八一
樓門	一七八一
柵門	一七八一
籠門	一七八一
惣門	一七八一
四方ノ門	一七八二
櫻ノ門	一七八二
門ノ扉	一七八二
木戸	一七八二
城戸口	一七八二
又キノ木戸	一七八四
東ノ木戸	一七八四
西ノ木戸	一七八四
一ノ木戸	一七八四
二ノ木戸	一七八四
上ノ木戸	一七八四
鼠戸	一七八五
唐居敷	一七八五
築地	一七八五
築地覆	一七八五

第一百十一册居處部附錄五

芝居	一七八六
釘貫	一七八六
天守天主	一七八六
矢倉 <small>檜櫓</small>	一七八七
城樓	一七八八
二重矢倉	一七八八
七間樓	一七八八
奥ノ矢倉	一七八八
外櫓	一七八八
高櫓	一七八九
出櫓	一七八九
月見ノ櫓	一七八九
矢狹間	一七八九
櫓扉ノ狹間	一七八九
垣	一七八九
三間ノ垣	一七八九
菱垣	一七八九
獅子垣	一七九〇
鹿垣	一七九〇

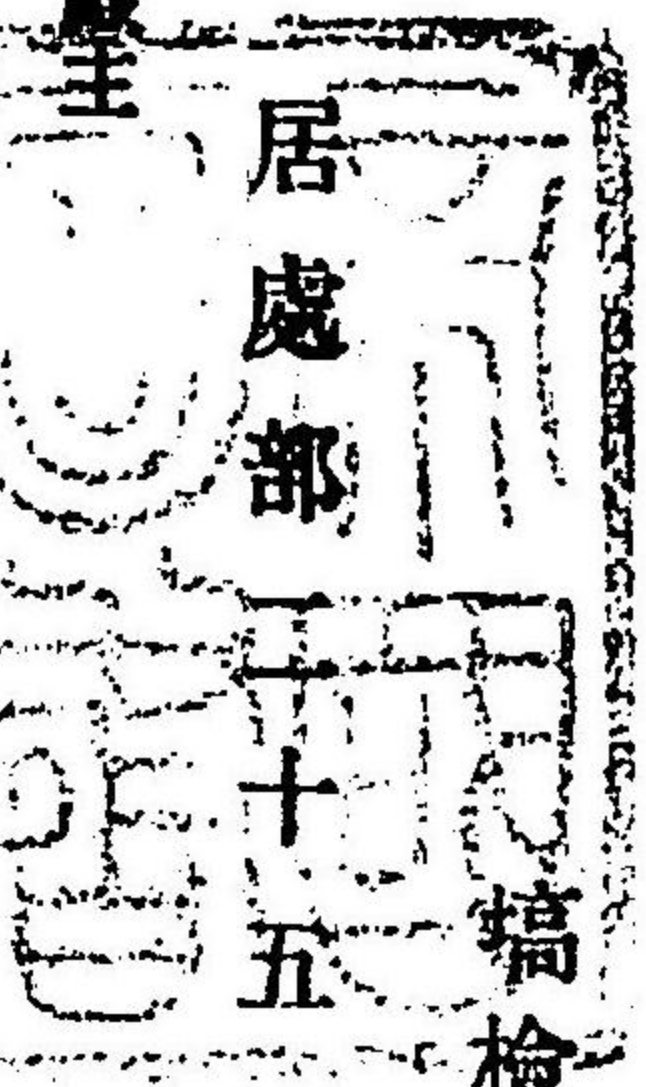
垣橋	一七九〇
石垣	一七九〇
屏	一七九一
出屏	一七九一
城壁	一七九一
柵	一七九一
柵ノ木戸	一七九二
城柵	一七九二
柵柵	一七九二
矢羅井	一七九二
取手 <small>櫓</small>	一七九二
岩城取手 <small>櫓</small>	一七九四
岩陣	一七九四
岩塚	一七九四
岩ノ番所	一七九四
征狄所	一七九四
御本所	一七九四
本陣	一七九五
陣屋	一七九五
七陣	一七九五

三ノ陣	一七九五
御野陣	一七九五
小路軍	一七九五
關	一七九六
堀切	一七九六
堤	一七九六
土手	一七九六
土井土居	一七九六
橋	一七九七
虎口	一七九七
要害用書	一七九八
逆木逆黄木	一七九八
亂杭	一七九八
式ノ座	一七九九
アツチ	一七九九
数塚	一七九九
疏近	一七九九
マルヒシヤクリ	一八〇〇
ツキシヤクリ	一八〇〇

武家名目抄稿第一百一册

稿檢校保己一編

居處部



○殿主
織田家譜云久秀者元京西國人也貧賤而經歷諸州得仕三好而威權日振秋善陣公張臂於洛中畿内始造殿守又作長屋及于三好家而遂屬信長

豐臣家譜云秀吉與大權現共登天守殿主奇貨雜珍委積之且使利休點茶既而告暇云々

大友與廢記云宗麟上種々御雜談御され事おほせ出され候非三面顔は難述事多しそのうち天主見物いたすへきよしおほせ出され候間御座敷退出仕候關白様御案内者被成御舍弟美濃守殿も半作之時分御らんし候て終に御見物なく候宗麟殿御見物のよし御申なされ候天主重々是又言説に不及事とも也下より三重目には杉之櫃十四五程あるに御小袖あるひは白あやあるひはくれなるなと、かきつけ有一階之下は皆御藏にて候その外いろいろの御道具ともおかれ候五重六重目は長刀有金銀の藏敷を盡し御教

居處部 二十五

へ被成候(中略)遠見の後天主より下御廣間にて被仰候は草臥候はんとて御ちやくなされる

安土日記云天正四年四月朔日より當山以大石御構之四方石垣ヲ被築又其内ニ御天守ヲ被仰付候云々

又云天正七年五月十一日吉日ニ付テ御殿主へ御移徙

豐鑑云天正九年の春播磨國姫路と云所を秀吉住へき城かまへ給ふ此所は小寺官兵衛久しく住しを國の中には爰なんよかるへき所なればとて小寺氏退き秀吉に奉れば頓て石をたみて山をつみ地をうちて水をたへやくらともあまた造りつ、け天主とかやとて家を組あけて高く登りかし門々のかまへきひしく瓦のいらか軒をならへり

増補家忠日記云天正十年五月廿日信長高雲寺ノ館ニテ大神君ヲ饗ス信長自ラ配膳シ梅雪及大神君ノ家臣數輩ニ至ル迄信長自手ヲ肴軟ヲ賜ル信長大神君ノ御手ヲ挽テ殿主ニ登リ是ヲ歴覽シテ本座ニ歸玉ヒ夜ニ入テ退出シ玉フ云

又云六月十四日光秀遂ニ安土之城ニ入テ金銀財寶ヲ殿主ヨリ出シテ從卒等ニ割與へ制法ヲ定テ明智左馬助ヲシテ安土ノ城ヲ守ラシム

駿府記云慶長十六年辛亥十月三日所々御代官爲ニ納米之

千七百七

價一金一萬九千兩松平右衛門佐納之殿守御庫

當代記云慶長十九年八月廿九日尾州名護屋本丸殿守ノ北

東石垣八十間餘崩是福島左衛門手前也

懷中記云寛文五年己巳正月二日大阪城天守雷火城中高樓名天守

諸天守護之義也去天正四年續田宿長樂江州安土城之日繼建天守以示武威又殿守

○九重殿主

蜂須賀家文書秀吉小早川左衛門佐江贈書狀云城中に矢藏

高く築天守ヲ九重揚之其に柴田貳百斗にて相籠候城中

區々故入込候て互に長道具にて手負死人可有之存

諸軍勢之中より究竟之兵共を撰出し天守之内へ打物斗裁

入せ候へは修理進も年來武備を任付候武者故七度迄切出

候といへ共相戰候事依不叶天守九重の上へ取揚諸卒に

詞を懸修理進か腹之切様を見置候て後學にせよと申候

柴田退治記云終攻詰甲九ニ中以大石積上磊其牆數

仍也比晉平公所造九層台天守上九重石柱鐵扉重

構精兵三百餘人楯籠禦之城内無閑地五歩一樓十歩一

閣廊下斜連天守高登以多勢欲攀之以弓鐵炮打之

以長道具貫之懸共具足被疵者多故秀吉下知而雜兵

除之選出六具差固勇士數百人一手鎗打物計攻入天守

之内勝家年來之武勇今於是乎相盡處也於異國者吳越

儒者達ヲカ、セラレ亦八テウ敷有東十二帖シキ次三テウ

シキ其次八テウシキ御膳ヲ拵申處也クモス八テウシキ是

亦御膳拵申處也六テウシキ御南戸亦六テウシキ何レモ御

繪所金也此ノ方御土藏アリ其次御座敷廿六テウシキ御南

戸也西六テウシキ次十テウシキ亦其次十テウシキ同十二

テウシキ御南戸ノ敷七ツアリ此下ニ金灯炬オカセラレ候

三重目十二疊敷花鳥ノ御繪アリ則花鳥ノ間ト申也別ニ一

段四テウシキ御座間アリ同花鳥ノ御繪有次南八テウ敷賢

人之間ニヒョウタンヨリ駒ノ出タル所有東廡香ノ間八疊

敷十二テウ敷御門上次八テウ敷呂調寶ト申仙人并傳説ノ

圖アリ北廿テウ敷駒ノ牧之御繪有次十二テウ敷西王母ノ

御繪アリ西御繪ハナシ御縁二段廣縁也廿四テウ敷ノ御物

置ノ御南戸有口ニ八テウ敷ノ御座敷在之柱數百四十六本

立也四重目西十二間ニ岩ニ色々ノ木ヲ被遊則岩ノ間ト

申ナリ次西八テウ敷ニ龍虎ノ戰アリ南十二間竹色々カ、

セラレ竹ノ間ト申也次十二間ニ松計ヲ色々被遊則松ノ

間ト申也東八テウシキ桐ニ風風書セラル、次八テウシキ

許由耳ヲ洗ヘハ巢父牛ヲ牽テ歸ル處兩人ノ出タル故郷ノ

體有次御小座敷七疊シキテ計ニテ御繪ハナシ北十二疊

シキ是ニ御繪ハナシ次十二テウシキ此内西二間ノ所ニ手

分兵於本朝者義經高館合戰不層内ニ甲兵已切息之間

引梯取上天守九重目詞戰云勝家只今切腹之條敵中有

心侍鎮前後見物可相傳名於九夷八蠻由高聲名乘

○七重殿主

氏郷記云會津ノ榮エ昌ユル事日ニ増シ時ニ益セリ美々シ

ク城ノ普請ヲセラレ七重ノ殿守月見矢倉ニ大鼓門其外ノ

殿々金銀ヲ縷メタリ

織田家譜公記云天正四年七月安土殿主成石垣二重高十二間南垣以上至殿主七重

安土日記云安土御天王之次第石藏ノ高サ十二間餘一重石

クラノ内ヲ土藏ニ用是ヨリ七重ナリ二重石藏ノ上廣サ北

南ニ廿間東西ニ十七間高サ十六間中アリ柱數貳百四本立

本柱長サ八間フトサ一尺五寸六分四方一尺三寸四方木御

座敷ノ内悉黒漆也西十二疊敷黒繪ニ梅之御繪ヲ狩野永徳

ニ被仰付何モ下ヨリ上マテ御座敷ノ内御繪所悉金ナリ

同間之内御書院アリ是ニハ遠寺晚鐘之景氣カニセラレ其

前ニ盆山ヲ置セラレ次四疊敷御棚ニ鳩ノ御繪ヲ書セラレ

亦十二疊シキ鶴ヲ書セラレ鶴ノ間ト申也亦其次八疊敷ノ

奥四テウシキニ雉ノ子ヲ愛スル處有南又十二疊シキ唐ノ

マリノ木被遊次八テウ敷庭子ノ景氣則御廊ノ間ト申也

柱數九十三本立五重シテ御繪ハナシ南北ノ破風口ニ四疊

ノ御座敷兩方ニアリ小屋之段ト申ナリ六重目八角四間程

アリ外柱トモ朱也内柱ハ皆金也釋門十代御弟子等釋尊成

道御說法ノ次第御縁輪ニハ俄鬼トモカ、セラレ御縁輪ハ

タ板ニハシヤチホコヒレウヲカ、セラレ高欄擬法珠ホリ

物アリ上七重目三間四方御座シキノ内皆金也外輪是又金

也四方ノ内柱ニハ上龍下龍天井ニハ天人御影向ノ處御座

敷ノ内ニハ三皇五帝孔門十哲商山四皓七賢等ヲ書セラレ

ヒウチホウチヤク敷十二ツラセラレ狭間戸鐵也敷六十餘

アリ其上皆黒漆也御座敷内外柱惣ニ漆ニテ布ヲ着セサセ

ラレ上一重ノ金具ハ後藤平四郎仕候也京田舎衆手ヲ盡シ

申也二重目ヨリ京ノタキ阿彌カタク也御大工棟梁岡部又

右衛門漆師首刑部白金屋御口工宮西遊左衛門瓦唐人之一

觀ニ被仰付奈良衆ニ燒セラル、御普請奉行木村次郎左

衛門

○五重殿主

當代記云慶長十七年九月二日夜前丑尅ヨリ大風今日至

未尅西返殊強則止(中略)伊賀國上野城古ノ殿主ヲ毀テ

新殿守ヲ立ケル日五重ノ上ノ重計背惣ハ未嘗塚不出來ニ右ノ西風ニ倒大工并手傳ノ者百八十人倒死云々

○三重殿主

會津陣物語云京大阪ノ悉劇ハ内府ノ伏見ニ被居其間隔ル故也只今ヨリ大阪西ノ丸ニ住居シテ秀頼ヲ守立給ヘシト有シカハ同十一日家康公西ノ丸へ入り給増田長束相談シ大座間并三重ノ殿守ヲ上テ内府へ進上シケル

○矢倉

倭名類聚抄云櫓唐韻云魯反今案舟具之櫓和名之船見舟具之讀一城上守禦夜久

續日本記云寶龜八年九月内寅内大臣從二位勳四等藤原朝臣良繼中略太師押勝起宅於楊梅宮南東西構樓高臨内裏南面之門便以爲櫓人士側目稍有不臣之譏于時押勝之男二人並仕參議良繼位在子姪之下益懷忿怨云々

奥州後三年記云家ひらか乳母千住といふもの屋くらの上に立て聲をはなちて將軍にいふやう云々

今昔物語平維茂尉藤原諸任語云十月ノ朔頃ノ程ニ丑時計ニ前ニ大キナル池ノ有ルニ居タル水鳥ノ俄ニ謀シク立ツ音ノシケレハ余五郎等共ヲ呼テ軍ノ來タルニコソ有

堀々逆木ヲ引キ二重三重ニ矢藏ヲ掻キ桓楯ヲ構ヘタリたかたち草紙云武藏坊へんけいはやくらのあゆみのいたをこほれよととうとうとふみならし

太平記云和州成沙頭路狹キニ浪打涯マテ逆木ヲ繁ク引懸テ澳四五町カ程ニ大船共ヲ並ヘテ矢倉ヲカキ横矢ニ射サセント構タリ

嘉吉物語云山名修理大夫殿の御内に村の助影口といへる兵五人はりの弓に矢をつかへてす、み出安積殿のあまりに人もなげにの、しり給ふにほそやつかに侍れとも矢一すしまいらせんとて十三そく三ふせよつひき兵とはなちけり安積かもちたるなきなたの石つきの上三寸ばかりをいとほしくあまる矢か矢倉のふせきいたに篋中すきてそいたてける

信長記云信長御清洲城弘治元年正月ノ比ヨリ清州ノ守護代阪井大膳内々思ケルヤウハ坂井甚助川尻左馬允織田三位ナト討死ノ上ハ我一人シテ織田彦九郎殿ハ守立奉ラン事モ叶ヒカタカルヘシ織田孫三郎殿ト和睦シ北ノ櫓ニハ我身スハリ南ノ櫓ニハ孫三郎殿ヲ居申兩人シテ彦五郎殿ヲ守立申ヘシト評定シ

板坂下齋慶長記云慶長四年正月十九日今夕家康公御屋敷

ヌレ鳥ノ痛ク騒クハ男共起テ調度負ヘ馬共ニ鞍置ケ櫓ニ人登レナト稱テ郎等一人ヲ馬乗セテ馳向テ見テ來トテ遣ッ

長門本平家物語云加賀國富樫太郎宗親林六郎光明一城にこもる件城のかまへやう前はふか田のほそなはて也うしろは大竹しけくして巖石なり上のたんに矢庫を築のふちの様にかきて下手にはところもなく石ゆみをはりて何萬騎の勢おそひきたる共一きものかるへからさるかまへにて云々

源平盛衰記云八牧夜時政南面ニ引退テヒカヘタリ景廉ヲ見テイカニ御邊ハ當時御勘當ニテオハスルニト問ヘハ俄ニ被召テ八牧カ首貫テ進ヨトテ御長カヲ給ハレリ是ヲ見給ヘトテ指出シ抑北條殿宵ヨリ寄給ヒタレハ城ノ案内知リタルラム有ノマ、ニ語リ給ヘ私ノ軍ニ非ス君ノ御大事ナリト云フ時政城ノ内ノ構ヘ様ヲハ知ヌ門ヨリ外ニ矢藏アリ兵共矢藏ヨリ下矢ニ射ル矢藏ノ前ハ大堀ナリ橋ヲ引タレハ入ル事叶ス互ニ堀ヲヘタテ、遠矢ニ射レハ宵ヨリ今マテ勝負ナシ

又云一谷城平家ハ設岐國屋島ヲハ構出テ、攝津國ト播磨トノ堺ヒ難波灣一ノ谷ニ籠リケル中略陸ニハ此彼ニ

へ治部少輔大將にて取カケ申之由沙汰候て俄の事なれば御屋敷のすみすみに材木石棒などにて繩からけの屋くらをあげ今や々と心かけ候

築城記云山城の事矢藏は塀のムネよりも二尺高くアカル也弓一張タツほと可然矢クラ數多候事は可然候大に上へからす

又云平城矢クラは塀ノ上二尺餘サマ面ノ方ニツ可然サマノ戸は前へ引ヒラキ候シトミノ如ク外へおし出もある也所によるへし矢藏は塀より二尺はかり内へ入てあくる事ははかいたてに射つけ候矢をかき落へいの内にて取へき爲なり又へいにか、はり候はて可然候ヤクラ板をは横に敷也スノコもよこ竹也たつはすへりてわろき也

○櫓楯楯

太平記云大渡山時等合戦榎參河遠江美濃尾張ノハヤリ雄ノ兵共千餘人馬ヲ乗放乗放我前ニカセキ合テ渡ルニ射落サレセキ落サレテ水ニ溺ル、者數ヲ知ス其ヲモ不願幾程モナキ橋ノ上ニ沓ノ子ヲ打タルカ如ク立雙テ重々ニ構タル櫓カイ楯ヲ引破ラント引ケル程ニ敵ヤ兼テ構ヲシタリケン橋桁四五間中ヨリ拆レテ落入ル

梅松論云京方宇治の討手の大將義貞橋の中二間引て楯楯

楯を上げて相支けり

○高櫓

平家物語云いこの櫓今井の四郎かねひらをしよせて見る
かれはせのをの太郎かねやすはしやうのおもてのたかや
くらにのほりあかりてたつたりける

源平盛衰記云源經範御曹司河ノ邊チカク高矢倉ヲ造セテ

此上ニ登テ四方ヲ下知シ給ヒケリ矢立ノ硯ヲ取り寄セテ

宇治川ノ先陣ト申ノ者トモテ次第明々ニ注テ鎌倉殿ノ見

參ニ入ヘシト被仰ケレハ軍兵各勇ミテ成テ忠ヲ抽ムト

ソ色メキケル

又云熊谷父子寄熊谷城ノ中ヲ睨マヘテ申ケルハ(中略)穴無

慙ノ人共ヤイツマテ命ヲ惜ラン出ヨ組マム出ヨ組ムト云

ヘトモ高櫓ノ上ヨリ城戸ヲヘタテ、雨ノフルカ如クニ射

ケル云々

太平記云義貞是國主兩統御爭トハ申ナカラ只義貞ト尊氏

卿トノ所ニアリ纒ニ一身ノ大功ヲ立ン爲ニ多クノ人ヲ苦

シメンヨリ獨身ニシテ戰ヲ決セント思故ニ義貞自此軍門

ニ罷向テ候也ソレカアラヌカ矢一受テ知給ヘトテ二人張

ニ十三束ニ臥飽マテ堅メテ引シホリ絃音高ク切テ放ツ其矢

二重ニ播タル高櫓ノ上ヲ越テ將軍ノ座シ給ル帷幕ノ中ヲ

中差取テ打番ヒ狭間ノ板八文字ニ排テ云々

信長記云六條合正月二日三好カ一黨五千餘騎ヒタヒタト

寄來ル城中ノ勢始ハ外橋ニテ相防シテ暫シテ戰ケルカ

寄手猛勢ニテ込入ケル間叶難ヤ思ケン諸ノ城ヘ引取門櫓

ヨリ指詰引詰散々ニ射ケレトモ寄手大勢ナレハ事トモセ

ス

新撰信長記云明レハ九月一日備前守殿百二十騎召連城

ヲ出玉ヘハ信長卿門櫓ニ上ラセ御覽シテアレ成ハ淺井ニ

テハ無カ年来ノ意趣ヲ忘レ今何ヲ面目ニ出ラレケルソト

大音聲ニ宣

○隅矢倉

細井日記云攝州野先陣ハ皆々木戸口ニツイテ候ノコル陣

陣ハ段々ニ備ヘテ入カヘ入カヘ攻ラレテ候此時ニ火矢ノ

衆多クアツメ大手搦手ヨリ雨ノフル如ク城中ニ射カケテ

候城中モコレニメイワクス大手ノ角ノ矢倉ヲハ焼ステ、

候

播州佐用軍記云寄手惣勢西川原表ニハ材木ヲ餘多寄番匠

ヲ集メ勢樓ヲ組立コト夥シ(中略)大手搦手門矢倉隅矢倉

ノ近クハ除キニケ所ツ、押立是ニ搦櫓ヲ搦矢間ヲ切テ蓋

ヲ招番シ是ヨリ城中ヘ鐵砲ヲ打入ントソ巧ミケル

本堂ノ良ノ柱ニユリテクツマキ過テソ立タリケル

賀越關諍記云江沼郡三松尾龍崎真先ニ懸テ戰ヒ木戸ワキニ

テ敵ト引組テ指違テソ死ニケル城中ニハ是ヲ見テ高矢倉

ヨリ指下シテ散々ニ射ケレトモ云々

○二階矢倉

○三階矢倉

太閤記云名護屋二之丸良角二階矢倉四間溝口伯耆守同三

階之矢倉九間伊藤長門守

又云因幡國取斯テ湊川には舟橋を掛亂杭をふり四方に堀を

堀鹿垣を結廻し十町十町に三階之矢くらを立

○渡櫓

太平記云山門爰ニテ敵ノ陣ヲ見渡セハ無動寺ノ麓ヨリ湖

ノ波打際マテカラ堀ニ丈餘ニ堀通シテ處々ニ橋ヲ懸岸ノ

上ニ屏ヲ塗關逆木ヲ密シクシテ渡櫓高櫓三百餘箇所播雙

ヘタリ

○門矢倉

太平記云頼貞同孫六内へ入テ六波羅ヨリ打手ノ向テ候ケ

ル此間ノ御謀叛早顯タリト覺候早面々太刀ノ目貫ノ堪ヘ

ン程ハ切合テ腹ヲ切レト呼テ腹巻取テ肩ニナケカケ二十

四差タル胡麻ト繁藤ノ弓トヲ提テ門ノ上ナル櫓へ走上リ

○向櫓

太平記云野中八寄手大勢也トイヘ共敵手痛ク防ケレハ攻

屈シテ只歸逆木引向櫓ヲ搦テ徒ニ矢軍計ニテソ日ヲ暮シ

ケル

佐伯文書云堅田小三郎經貞申軍忠口口年曆應十二月二日

奉レ屬子御手押ニ寄大高坂城ニ於西大手一搦ニ向矢倉連

日致ニ軍忠之番云々

○走矢倉

應永記云身方自四方ノ吾先ニ入ラント息ヲモ不次セ賣

ケレハ城中ノ四方ノ走り矢櫓ヨリ究竟ノ強弓勢兵刺詰變

詰散々ニコソ射タリケレ

築城記云ハシリ矢クラハ常の矢藏の如くこしらへ塚の中

ニ廣くあけてサマヲあまた切てはしり廻ているを云也

○出矢倉

太平記云將軍御進發大渡山崎ヘハ脇屋右衛門佐ヲ大將トシ

テ洞院ノ按察大納言文觀僧正大友千代松丸宇都宮美濃將

監藤藤海老名五郎左衛門尉長九郎左衛門以下七千餘騎ノ

勢ヲ向ラル寶寺ヨリ川端マテ塚ヲ塗リ堀ヲホリテ高櫓出

櫓三百餘ヶ所にカキ雙タリ

○着到矢倉

甲陽軍鑑云一辻の馬出しの事一着到矢倉の畢

○トカハノ矢藏

大友興廢記云新城御取立の條吉日良辰をえらんで城取あひはしまりぬ法印しは田にのたまはくものよりのほりよくなはかさしの土手なかしの土手角馬いたしとかはの矢藏屏同横矢の分別しかるへきやうにみはからはれ候へ云々

○端矢倉

大友興廢記云藤原目落城條薩州勢白坂石見守六百餘の勢を以て天正十四年十二月廿四日の日篠原目の城に寄來たる折ふし城中無勢にして終に百餘人の勢にて石見守か先勢に出むかひ阿南目鏡を合するされとも敵多勢なれば打負て引しりそく石見守もひきとりて人馬を休めさる阿南武略の功者なれば一まつ降參して後日にはからふへき行ありと組の侍ともにしめしあはせ石見守へ使者をつかはし一通の書を送る略右の趣被開召分於御同心之御返事者速退城渡端矢倉之番等被仰付候者生々世々可爲本意云々

○小矢倉

築城記云小ヤクラハ七尺四方はかり可然候也

○見七格

東亂記云結城條清方持朝千葉土岐等カ陣ノ前ニハ十餘丈ノ征樓ヲ二三重ニ組上タリ

信長記云紀伊國丹和へ本陣ヲヨセラレケレハ中野城ニ楯籠モノトモ降參シテ開渡ス間即信忠卿入替リ御座ス管屋九右衛門尉御使トシテ瀧河永岡惟住蜂屋筒井彼等六人ヲ大將トシテ鈴木孫一居城ヲ攻ヘキ旨被仰下ケレハ各手分シテ三月朔日卯刻ヨリ押寄セ竹々ハ付ケ榎樓ヲ上隙透間モナク喚叫テ攻ケレハ甲ヲヌイテ降人ニソ成ニケル

安土日記云毛利吉川中國表ノ御敵不ニ相働ニ請手ノ人數不レ入ニ付テ維住五郎左衛門若州衆神吉東ノ口ヲ請取先一番ニ城樓タカカタ組上大鐵炮ヲ以テ打入堀ヲ埋サセツキ山ヲ築被責候云々

見聞雜錄云信長は過つる姉川合戦之節武田上杉川中島五度目之合戦に海津の城にて武田勢最上山と川端へ二手に分けて夜中に出勢せし時二萬之軍兵之飯を焼たる煙を謙信の御謀に叶しとて御一代の軍の見切を被成しを繪圖にいたして常に御覽し如案姉川合戦に淺井と朝倉談合して夜の中に信長手先へ陣替するを飯焼く煙にて見付給信長の一生に無之見積りの當りし事之無御忘今曉も

甲陽軍鑑云つけ城ちん城是は大將の事見せやくら即口傳侍大將のつけ城是は少別なり一ツにしても不苦

○昇矢倉

築城記云クシ矢藏カキヤクラト云はかきてありく也土矢藏も此心得あり

○土矢倉

會津陣物語云西南ハ越後本庄出雲崎ノ山々見へ渡ル則チ背矢ノ峠ニ土矢倉ヲ立テ大筒野烽ヲ籠タリ

○井樓

應永記云大内此議ニ同ジツ、懸テ集材木ニ以テ數百人之番匠ニ盡種々之功一勢樓四十八箭櫓一千七百東西南北合テ十六丈ノ魚鱗鶴翼ノ陣取ナレハ云々

嘉吉物語記云城中に火をかけて腹をきらんとしたりしか何とかおもひけんこさくらおとしのよろひをきておなし毛の五まい甲の緒をしめ八尺あまりのしらえの長刀つゑにつき南むきの勢樓にあかり大音あけて申やう是は赤松との、御内に安積と申てかたしけなくも普廣院との、御くひをたまはりたるものにて候云々

文正記云爰義兼御方有豪物突騎朝倉彈正左衛門教景云者爲視諸軍勢勁高構井樓一目直下洛中邊土

御本陣の井樓に上り給少も目を放す朝倉勢の陣取たる田神山の方は守詰て居給云々

播州征伐記云野口長井四郎左衛門構城ニモ待備自ニ格上堀狹間一射出鐵鐵炮如雨如雹雖然少不引退或石俵或竹手把築土堤上井樓雜雜麥藁萬荷成堀之埋艸一播州佐用軍記云寄手惣勢其後秀吉卿ヨリ軍使來り急キ敗軍ノ兵ヲ集メ陣ヲ張リ番匠ヲ寄勢樓ヲ組立攻口ノ堀近押建是ニ取登リ城中へ鐵炮ヲ打入コト晝夜不怠

關八州古戰錄云太田三樂父子再入小田原城條以來天菴方ヨリ働ヲ懸ニスル時ハ眞壁大會根ニ告知シテ助援ヲ受ル相圖ノ爲トテ井樓ヲ揚ケ遠候ヲ居へ敵間ノ近キニハ早鐘ヲ撞キ遠キニハ狼煙ヲ舉ル約束ヲ定テ三樂齋ハ片野へ歸陣ナリ

別所長治記云三木城兵根攻條間城ト敵城ノ間僅ニ五六町ナリ堀ノ高サ一丈餘二重ニ付其間ニ石ヲ入播楯櫓ヲ高ク上前ニ逆茂木ヲ引柵ヲ結川ノ面ニ大綱ニ張亂杭打大石ヲ入橋ノ上ニ番ヲ居改三人ノ通ヲ一

藤葉榮衰記云此城平ナレハ二ヶ所ニ井樓ヲ上ケル處ニ城中ヨリ是ソ上サセシト大工人足ヲ鐵炮ニテ打矢ヲ射掛ケレハ夜ニ入暗ニ紛レ大方樓上城内ヨリ鐵炮ヲ打方へ不レ見様ニ遊ヲ張ケレハ其後ハ晝モ不危ニ階ニ臨ミ井樓ニ

高樓上ケテケ所ニ出來テ井樓ノ上ヨリ城内目下迄蟻ノ這モ見ユル如ク也

義殘後覺云宇留山ノ城漢南ハ宇留山へ押寄三方ヨリ取圍ケル此城ノ東南ハ向へ一町餘ノ大川アリ西乾ハ陸地也北ハ廣高タル深山也去レハ東南ノ川向ニ井樓ヲ透間モナク組上大筒ヲ打セテ天地モ崩計ニ責タリケル

清正記云明朝敵をうち取申事手のうちにありといきはひつ、下知を待し處に清正せいろうにあかり貝をふきたてさせか、れと下知せらる

水野勝成記云かの邊の堤川の様子言上仕候はくろうかふちのきはの堤にたかくせいろうをあげ申候由申候へはそれへ罷越川端にしまりを付其仕寄より大筒にて御うち崩か被レ成候旨御意被レ成候

大坂軍記云極月十二日大御所天滿へ御巡見將軍にも同御巡見あり有馬玄蕃寄口井樓へ將軍御上り候處に御馬印を見城より火矢を射かけ大筒打かけ事の外危候ニ付其段御近習諫候へとも將軍井樓より彌御下不レ被レ成候

築城記云セイロウヲアクルハ先スンハカリに柱ヲふんはらせツヨク立也一重あくるはさまを下にて切て面の方を先とく上へさき也一重の時も上へあけかざるやうに柱の

先とく上へさき也一重の時も上へあけかざるやうに柱の

武家名目抄稿第百二册

塙檢校保己一編

居處部 二十六

○塙

太平記云赤坂城彼ノ赤坂ノ城ト申ハ東一方ヨソ山田ノ畔重々ニ高ク少難所ノ様ナレハ三方ハ皆平地ニ續キタル堀一重ニ屏一重塗タレハ如何ナル鬼神カ籠リタリ共何程ノ事カ可レ有ト寄手皆是ヲ侮リ又寄ルト均ク堀ノ中切岸ノ下マテ攻付テ逆木ヲ引ノケテ打テ入ントシケレトモ城中ニハ音モセス

又云楠出張天楠カ勢共思ノ儘ニ城中ニ入スマシテ儀ノ中ヨリ物共取出シヒシヒシト堅メテ則時ノ聲ヲソ揚タリケル城ノ外ノ勢同時ニ木戸ヲ破リ塙ヲ越テ責入ケル間湯淺入道内外ノ敵ニ取籠ラレテ可レ戰様モ無リケレハ忽ニ道ヲ伸テ降人ニ出ツ云々

又云三宅野丹波へハ山名伊豆守時氏三千餘騎ニテ押寄せ高山寺ノ麓四方二三里ヲ屏ニヌリ籠テ食攻ニシケル間朝忠終ニ職屈シテ降人ニ成テ出ニケリ

又云三宅野丹波へハ山名伊豆守時氏三千餘騎ニテ押寄せ高山寺ノ麓四方二三里ヲ屏ニヌリ籠テ食攻ニシケル間朝忠終ニ職屈シテ降人ニ成テ出ニケリ

心をしてあくるなり又夜中にあくるかよき也敵へ近くあくる時如此盡は敵見すかし矢を射あけにくきなり面に矢をふせく用意をしてあくる也此時のたてこしらへやう可レ在之

○矢倉井樓

備前文明亂記云彼福岡ノ城ト申ハ東西ニ大川流廻ル川島小山アリ口口ヲ本城ニシテ其面ニ堀ヲホリ塙ヲ塗年束調置(中略)川瀬ニハ亂概逆茂木ヲ引柵井樓ヲ揚クレハ三方ハ大河也誠ニ異國ノ威陽宮ノ鐵築地ハ雁門開タレハ鳥通也ハ雁門ノ不開ハ飛鳥モ難レ翔見エタリケル

甲陽軍鑑云御大將其下侍大將足輕大將近寄の頭迄不レ存して不レ叶事(中略)矢藏せいろうに數のささの事口傳有

○鐘撞堂

大閤記云名護屋二之丸大手三階之鐘撞堂五間に羽柴五郎左衛門尉

又云六波羅城ノ構ヲ見渡セハ西ハ羅城門ノ礎ヨリ東ハ八條河原邊迄五六八九寸ノ琵琶ノ甲安郡ナントヲ鑄貫テシタ、カニ塙ヲ塗前ニハ亂杭逆木ヲ引懸テ廣サ三丈餘ニ堀ヲホリ流水ヲセキ入タリ

天文本太平記云五月七日播磨國住人妻鹿孫三郎長宗馬ヨリ飛下(中略)イテサラハ其塙引破テ捨ント云儘ニ岸ヨリ上ヘットハネアカリ塙柱ノ四五寸餘テ見ヘタルニ手ヲカケエイヤエイヤト引ニホリアケテ山ノ如クナルアタリノ土塙ト共ニ五六丈クツレテ堀は平地ニ成ニケリ

安土日記云三位中將殿御自身御道具ヲ被レ持先塙際へ被レ付柵ヲ引破リ塙ノ上へ上ラレ一旦ニ可レ乘入之旨御下知云々

別所長治記云天正六年四月三日早朝ヨリ長井四郎左衛門カ楯籠ル野口ノ城ニ押寄ス城ニモ兼テ待懸タル事ナレハ塙柵ノサマヲ開キ中國名譽ノ鐵炮ノ上手強弓ノ精兵ヲ汰ヘテ城際マテ敵ヲ引付ケ射ケル間先手ノ軍兵進ミカネ少シ必所ヲ城主四郎左衛門下知シテ大筒ヲツルヘテ一度ニ打立ケル

○三塙

矢島十二頭記云天正十五年三月中旬矢島殿より瀧澤殿を

攻三の塀まで攻入候處ふなの木もふち迄御出陣被_レ成候
のよし熊谷二郎兵衛より申遣し候故松ヶ台より直にふな
の木もふちまで御出候て散々に御戰被_レ成候處鮎川殿後
詰に御出陣に付矢島殿勢彌勝に乗て追懸首數廿斗り矢島
へ討取堂まで押寄せ矢島殿十死一生之御勳被_レ成候て八
幡堂より木の目坂まで討取首五十取五郎殿方先に手負被_レ
成候矢島勢は七人程手負有之

○外塀

矢島十二頭記云赤館の四方より責寄るその趣を見て竈地
家の森へ分遣候者とも赤館へ皆とち籠て四方の敵を防ぐ
俄城之事にて稻かやを以て塀を堅日本丸斗りを板塀に仕
候ゆへ外かわの分へ敵陣より火を付れば外塀の間は皆焼
て落鐵炮之上手と入替々々討て敵ヨトムトいへとも四方
より責寄て終日戰申候

○高塀

由良家傳記云那波落城の時那波殿家老三歳の幼子を懐に
入て高塀より下へ落申候
賀越園諺記云虎御前山 城放火條頓テ小屋ヲ懸ラル、カト思慮ニ虎御
前山ヨリ御子村宮部ノ田ノ中島ヲモ不_レ謂堀土居ヲ上其
上ニ高塀ヲ付ラレケル

播州佐用軍記云寄手惣城 城ハ高山ニテ一逼ノ雲ノコトク
見上詰々切岸出塀矢倉ノ前ニハ竹把ヲ構立タレハ假令件
勢樓ヨリ鐵砲ヲ打懸ルトモ近クトモ一町餘リヲ隔ヌレハ
彼竹把ヲ越テ城中ノ人ヲ破ラントハ見ス

○踏鞠塀

○出張塀

應仁私記云敵味方押分而牛角ニ角橋要害 櫓征樓左間城
戸窟垣鹿垣弓藏打亂概 杭逆木階楯大塀築地踏鞠壁櫓ニ耳
目一候爭輒兩方難_レ有ニ途之落居一覺候去間隨ニ分限一所々
拘陣口攻口詰口出張口籠口口木

築城記云大手ノ口にさし出候て半町ばかりに内に塀四五
間斗付そとにか、りを焼也是をタ、ラ塀と云也又は出は
りのへいとも云也此うちにか、り焼者居也

○釣塀

太平記云赤坂塚 軍條寄手イヨイヨ氣ニ乗テ四方ノ屏ニ手ヲ懸
同時ニ上リ越ントシケル處ヲ本ヨリ塀ヲ二重ニ塗テ外ノ
塀ヲハ切テ落ス様ニ拵タリケレハ城ノ中ヨリ四方ノ塀ノ
釣繩ヲ一度ニ切テ落シタリケル間塀ニ取付タル寄手千餘
人壓ニ被_レ打タル様ニテ目計ハタラク處ヲ大木大石ヲナ

○折塀
高忠聞書云おりへいのさまよきりやう口傳有外へよせて
切へし

水野勝成記云山瀬勘左衛門と申もの拙者同前にへいうち
につき申候へともおりへいのさまより鐵炮貳丁出しさし
つけうち申候

築城記云折塀は二間すくに付て一間一折之折目にサマ一
切て兩方ニサマニツ有ヘシ

○出塀

太平記云山見小見 山夜討條各塀ヲ上リ越夜廻リノ通リケル跡ニ付テ
先城ノ中ノ案内ヲ見タリケル追手ノ木戸西ノ坂口ハ伊
賀伊勢ノ兵千餘騎ニテ堅メタリ搦手ニ對スル東ノ出塀ノ
口ヲハ大和河内ノ勢五百餘騎ニテ堅タリ

又云山門 寄手已ニ塀ノ前マテカツキ寄セ埋草ヲ以テ塀ヲ
ウメ燒草ヲ積テ櫓ヲ落サントシケル時三百餘箇所ノ櫓上
サマ出塀ノ内ヨリ雨ノ降如射出シケル矢更ニ淨矢一ツモ
無リケレハ云々

又云隆資自八 櫓被寄條高武藏守師直五百餘騎被_レ射立ニテ引退ク敵
彌勝ニ乗テ持楯ヒシキ楯ヲ突寄々々カツキ入テ攻ケル程
ニ坤ノ角ナル出塀ノ上ノ高櫓一ツ念ナク被_レ攻破テ燒ケ

ケ懸々々打ケル間寄手又今日ノ軍ニモ七百餘人被_レ討ケ
リ
又云同切岸ノ高サ塀ノ深サ幾程モナケレハ走懸テ塀ニ著
ン事ハ最安ク覺ケルトモ是モ又釣塀ニテヤアランド危ミ
テ無_レ左右ニ塀ニハ不_レ著

見聞雜錄云北條方餘り小勢の城也大將はさのみ覺之者に
もなしと押寄ると等く堀際へ詰寄々々二千八人塀に手を懸
乗んとする去年冬中九ヶ所之城は、き捨られ此城之普請
被_レ成境城に被_レ仰故馬場美濃と御相談有城之塀に雨よけ
なから丸竹を以て一重の表に釣塀を被_レ成はり綱として竹
之皮を剥其張綱に而しめられしを駒井に委細に被_レ仰合
し故所々へはり綱不_レ殘切て落しかは輕き竹之雨除塀と
は乍_レ云北條方之兵共取付たる己れ己れか重みにて竹塀
かふつて二千八人皆堀の中へ落たる所を云々

○構塀

築城記云城の戸を内二間はかり塀付る事あり是を構の塀
と云也又は不入事歟

武家名目抄稿第百三册

塙檢校保己一編

居處部二十七

○狹間

長門本平家物語云妹尾太郎兼小太郎をきあかりて手をあはせて涙をなかし前にはしかきをさし矢間をあけうしろには大木をあて、木曾をましかけたり

又云一谷合北の山より南の海きわまでかいたてをかきて

吾妻鏡云建保元年五月二日壬寅申刻和田左衛門尉義盛率仲繁先園幕府南門并相州御亭上西北兩門相州雖被幕府留守壯士等有義勢各切夾板以其隙爲矢石之路攻戰云々

太平記云頼貞同孫六内へ入テ六波羅ヨリ打手ノ向テ候ケル此間ノ御謀叛早顯タリト覺候早面々大刀ノ目貫ノ堪エ

ン程ハ切合テ腹ヲ切レト呼テ腹巻取テ肩ニナケカケテ四差タル胡籙ト繁藤ノ弓トヲ提テ門ノ上ナル櫓ヘ走上リ

中差取テ打番ヒ狹間ノ板ハ文字ニ排テアラコトコトシノテ用心密ニ見タリケリ一色左京大夫小川西ニ堀ヲホリ堀ヲ塗所々矢間ヲアケ櫓ヲ舉給フ

初井日記云龜山城ヲ敵ニ奪ハレテ候上ハ弓矢ハ是マテト存スルニテ候數代舊交ノ好ミニ某カ今日ノ志ノ程兩御屋

形ヘモ龜山殿ヘモ達シテタヘヨ源家相傳ノ細野カ家ノ面陰ヲ只今振舞テ御目ニカクヘキッ矢倉ニテ見物アラレヨ

ト云ホトコソアレ百餘人ヲ三陣ニシテ大勢カ中ヘワツテ入前代未聞ニ備テ候中路石見ハ狹間ヲヒラキ候テ潔シ

潔シト譽テ見物シテ候高忠聞書云さまをきる寸法の事長さ一尺八寸よこは、四寸二分さまより下たいまでの間六寸山城は四寸也

築城記云矢クラノサマハ三尺はかり口六寸はかりサマノ下八寸はかりたるへし

又云山城の事堀ノ高さ五尺二寸はかりサマノ長サ三尺二寸はかりサマノ口ノ廣さぬりたて七寸はかりサマノカト

ヲ能をろして矢の出よき様に可レ拵也サマノ數ハ一町ノ面に卅ト申四町ニ百二十はかり可レ然と也然共數之事や

う體によるへし矢出て敵いるむへき所を見はからひて多も切へき也又身とをりのさまなと、云て昔はきらす候事

候然とも不レ入サマヲはさまふたをしてふさく事なれば

大勢ヤ云々

又云笠置寄手是ヲ見テ前マントスルモ不レ叶引トスルモ不レ協シテ心ナラスモ支タリ良暫有テ木戸ノ上ナル櫓ヨ

リ矢間ノ板ヲ排テ名乗ケルハ云々

又云赤坂合城近ク成ヌル所ニテ馬ヨリ下リ弓ヲ脇ニ挾テ城戸ヲ叩キ城中ノ人々ニ可レ申事アリト呼リケリ良暫ク

在テ兵二人櫓ノ小間ヨリ顔ヲ指出シテ誰人ニテ御渡候哉ト問ケレハ是ハ今朝此城ニ向テ打死シテ候ツル本間九郎

資貞カ嫡子源内兵衛資忠ト申者ニテ候也云々

又云吉野城義光ハ二ノ木戸ノ高櫓ニ上リ遙ニ見送り奉テ宮ノ御後影ノ幽ニ隔ラセ給ヌルヲ見テ今ハカウト思ヒケ

レハ櫓ノサマノ板ヲ切落シテ身ヲアラハニシテ大音聲ヲ揚テ名乗ケルハ云々

又云正月二十七先年三井寺ノ合戦ノ張本ニ被レ召テ越後國へ被レ流タリシ妙觀院高因幡全村ト云ハ我事也城中ノ人

人此矢一ツ進セ候ハ被レ遊テ御覽候ヘト云儘ニ上差一筋抽出テ櫓ノ小間ヲ手突ニ突タリケル此矢不レ誤矢間ノ

陰ニ立タリケル鎧武者ノセンタンノ板ヨリ後ノ總角着ノ金物迄裏表二重ヲ徹テ矢前二寸計出タリケル

應仁別記云山名一味ノ人々憤憤ヲ合屋形屋形ニ要害ヲシ

サマ多して不レ苦口傳多し

又云ヒラ城ノ堀は高さ六尺二寸サマのたけ三尺五寸はかりたるへし

按、矢倉堀等矢石の道を明たるをサマとはいふ小間狹間矢間など書てサマと讀り中頃より又ヤサマといひヤ

マともいふなり

○矢狹間

たかたち草紙云しけいへも矢一すちいて見せ申さんといふま、に十三そく三かけのなかさしぬいてあふらひき矢

さまひろひるとひかせいるにやおくかたのくんひやうとの龜井か兄す、木のしやうしとは我事なり云々

文正記云矢狹間排開矢把解活

北條五代記云氏直も關八州の鐵炮を兼て用意し籠をきたる事なれば敵にも劣るまし鐵炮くらへせんと矢狹間一ツ

に鐵炮三挺つ、其間に大鐵炮をかけをき滋手の衆は舟に向て海きはへ出暮るををすしと相待

翁物語云籠城ノ時具足兜一裝束シテ矢狹間ヨリ鐵炮ヲ放ツ時左右ノ開キ打レス討様可レ有ヤ但又狹間ノ切り様可レ有ヤト不審シアヘリ

ニ仕事ソト云翁答曰狹間ヲカサルト云事ハ吾ハ不レ知也
或者ノ云ケルヲ聞シニ當地ノ弓ノ射手共矢狹間ノ裏ヲ圍
ヒテ矢狹間ヨリ内ヲ見透サヌ様ニ塗ルヲカサルト云ト也
甲州家ニハ左様ニ埒ノ不レ明事軍理ニハ不レ云也埒裏ヲ圍
ヒ矢狹間ノ裏ヲ圍フナトニ云也

○箭間

播州佐用軍記云十二月十五日 櫓ニ居合タル人々ヲ催ケルニ
川島左太輔松尾山田瀬川片島高野猶原奈波權正高島小七
郎此人々弓ニ手矢計取添テ矢狹間ヤマヲ押開ケハ小寺隆
家はヲ手配シテ云々

○鐵砲狹間

甲陽軍鑑云矢狹間ひかへをいとふ口傳鐵砲さま土一俵を
もつてす口傳

○土狹間

太平記云三井寺三方ノ土矢間ヨリ鑓長刀ヲ差出テ散々ニ
突ケルヲ互理新左衛門十六迄春テッ捨タリケル
又云山門城中ノ大將ニハ義貞ノ舍弟藤屋右衛門佐義助ヲ
被レ置タリケレハ東國西國ノ強弓手足ヲ汰テ土矢間櫓ノ
上ニヲキ土居得能仁科春日都伯耆守以下ノ四國北國ノ懸
武者共ニ萬餘騎白鳥カ岳ニ懸ヘサセ云々

○足下狹間

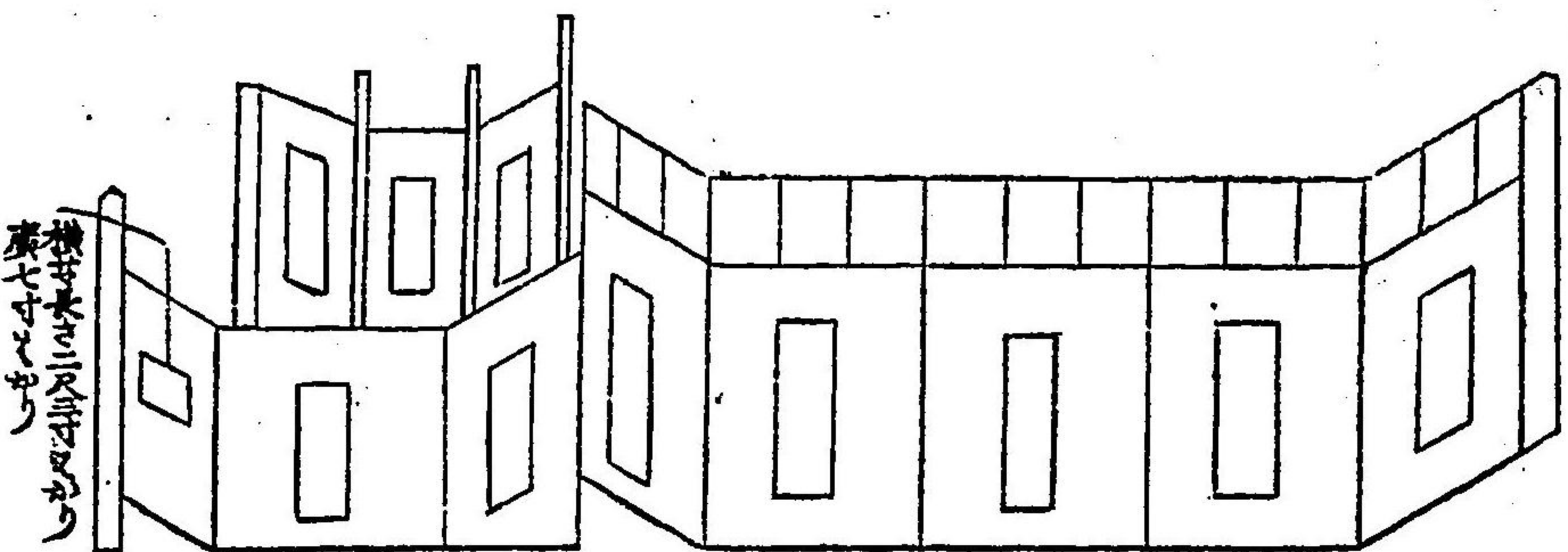
築城記云城戸ノ上ヲ武
者ノかけとをるやうに
橋を廣くツヨクかけて
面に板を打矢サマヲキ
リ又足タサマヲ切ヘシ
アシタサマトハ板にサ
マヲ切テ其サマヲタニ
とつてのやうにして足
にて開キイルヲ云也

○弓藏

太平記云龍泉寺 龍泉ノ
勢ヲハ皆呼下テサシモ
ナキ野伏共百人計見セ
勢ヒ殘シ置此ノ木ノ梢
彼ノ弓藏ノハツレニ旗
計ヲ結付尙モ大勢ノ籠
リタル體ヲ見セタリケ
ル

紀州發向記云土居上

○狹間圖



狹間圖

又云同三百餘箇所ノ櫓土サマ出埒ノ内ヨリ雨ノ降如射出
シケル矢更ニ浮矢一ツモ無リケレハ櫓ノハツレ旗下ニ射
臥ラレテ死生ノ境ヲ不レ知者三千人ニ餘レリ

賀越關諍記云口合戰 菅生口ヘハ河北ヘ郡ノ者小原上坂都
合其勢一萬三千餘騎打莅ンテ亂株逆茂木ヲ引破リ攻入ン
トスル程ニ城中是ニ騷テ森吉政原藤島走リ渡テ土矢間
矢倉ノ上ヨリ射ケル矢ニ敵少ヒルンテ見ケレハ玄蕃助景
連馬ヲ進テ下知シケル

又云平泉寺一殿 爰ニ寶珠坊大圓坊馬ノ鼻ヲ双ヘテ懸アカリ
柵ノキハマテ責寄燈フミ張立アカリテ申ケルハ我ハ大圓
坊ト云者也定テ汝等ハ見知リケン今日寺ヲ出シヨリ先懸
シテ屍ヲ戰場ニ埋ン事ヲ存テ相向ヘリ我ト思ハン者ハ出
合テ手ナミノ程ヲ見ヨト聲々ニ呼テ馬ヨリ飛テヨリ木戸
ヲ切落サントシケル間城中是ニ騷テ土サマ櫓ノ上ヨリ雨
ノ降カ如クニ射落スツフテニ二人トモニ射レテ空ク果ラ
レケリ

○橫狹間

築城記云城戸のわきに自然よこさまを切候は、内の左に
有へく候大事のサマにて候一二在レ之又よこサマを切所
によこ板をうちて其より鑓を出也

掛ニ小屋一塚之掩張ニ弓藏ニ明空ニ狹間ニ作ニ人形一合レ射レ之埒
下明ニ真狹間ニ從レ其打ニ鐵砲
築城記云弓かくしは三尺ばかり葎なと可レ然候

武家名目抄稿第四百冊

塙檢校保己一編

居處部二十八

○土居

宗長手記云大永二年五月北地の旅行越前國のまゝる人につきてかへる山をまらねとも宇津の山をこし小夜の中山にいたりて掛川泰能亭に逗留この頃普請最中外城のめぐり六七百間堀をほり土居をつきあけ凡本城とおなしこの地岩土といふものにて只鏡をつきあけたりともいふへし永祿記云永祿八年五月十九日清水參詣と號し早朝より人数を寄せ其時に當て公方様へ訴訟有よし申觸て三好訴狀を捧て條々御點を申請る其間に御構へ人数を入者也御母慶壽院殿御女儀たるによりて訴訟叶へ給ふにおゐては公方様御恙有へからすと思召て御點は如何様にも加へ給ふへきよし啼くとき御意見様々御申さりととの御心中の程察し奉りて見る人聞もの袖を濕す斗なり是非の御使の詞公退出に時刻を移し御土居四方に入渡り即ち鐵炮を放つ

ノ前築土居可打鐵炮被勢諸卒中矢故也

築城記云城の外に木を植ましき也土の内の方に木を植て可然也

按、城郭をキといふは所詮この土居を築きめくらしもしくは柵をふりて内外を限り堅固なるをさしていへる名なり土居を又土手ともいひ築地ともいふ芝をふせたるを芝手といふなり

○土手

高忠聞書云とのひろさ五尺なく候へは弓いられす候なり

室町殿物語云飛彈守このすきに土俵をつきあけよとしてお

もてに楯をつき出さして掘際近く土手をつきたてけり

播州佐用軍記云山脇合横山カ兵敵ノ三所ノ役所へ押入(中

略)秀吉ノ陣へ押行東門へ今三三三間計ニ寄テ見ルニ橋

アレトモ引返シ門ヲ閉堀ノ裏土手ノ上ニハ竹把或ハ楯楯

ヲ構タリ

○芝手

野田福島合戦記云一兩日ノ中ニ野田福島へ押寄惣責ヲスヘシト土手芝ヲツキヨセツキヨセ攻ラル、

北條五代記云北條家の軍に具一夜の陣にも堀をほり土手芝

見聞雜錄云横田甚五郎聲掛て助太刀は法度也手捕にして下人にすへし中々達者成奴也と横田と雨宮と飛掛るを見て河尻難叶逸足を出し逆たり大手口へ程近ければ欠入それ弓鐵炮を打出扱も扱も此河尻にあればと手向ひ太刀打せし者は常の士不可有と言を追掛し武田方開付扱も扱も只今の奴は河尻と聞いた残念なる事をまたり生取へき物をと齒嚙せしか弓鐵炮の者共大手土居の内より立并て打出せしかは横田甚五郎各を下知し引取畢

甲陽軍鑑云甲州に關口と申馬乘の上手にて曲乘は本の事にてなしと申せとも是は一入重寶なり一丈二丈あるかけを飛おろしよこ一尺五寸ある土居の上をも早道いつさん

をのり關の木通いた屋の上をはやみちにやり云々
太閤記云利家未練の寄手の軍兵瓢丸を乗とらんとす此丸元來土居なくして澤の上に塀を構へしのみ也故終に塀を曳落されぬ

清正記云北條一類小田原早速乘崩雖可刻北條首候御人数の内一人成とも手負死人有之者如何與被加御思惟即取卷塀堀堀土居等丈夫に被仰付并海上の警固舟數千艘浮置候

松原自休手録云五日召横田甚右衛門間宮權左衛門諸陣手をつけ逆茂木をゆひ云々

松原自休手録云從瀨口一村上へ通使節一揆停與國中一

難田島可發軍兵云々防州應之或追拂或伐捨航文陀川出五泉一揆付塀堀築芝手三百人伏萱野兩

人勵戰功得首百五十餘味方モ多以戰死ス

○長土手

大友與廢記云久留目去程に龍造寺の勢先の耻辱をきよめんため二たひ目にはあら手をいれかへ五段にそなへ長土手を前にあて陣をとる

○シトミノ土居

○カサシノ土居

甲陽軍鑑云信玄公御家中城取極意五ツは辻の馬出し二に

まとのくるわまとの土居三にかさしの土居四ツに重

重のくるわ塀に土居見せ云々

○カサシノ土手

○ナカシノ土手

大友與廢記云新立城吉日良辰をゑらんで城取あひはしまりぬ法印は田にのたまわくものよりのほりよこくなは

○武者走
○犬走

甲陽軍鑑云信玄公御家中城取極意五ツは云々五に武者はしり三色はかんさあいさか重る坂いづれも所によりて如く此なり

見聞雜録云角て謙信本庄繁長か布地天神に在て笑しを聞給大に岡上り給御事を乗放し城中へ入給中の丸の土居向に構たる武者走の塚へ上り給云々

三刀屋孝和記云玄旨遙ニ天守ノ武者走ニ登テ看給フニ大橋口既ニ破テ味方負軍ト見エタリケル

築城記云土居ノ塚ヨリ内ハ武者ハシリト云也外ハ犬ハシリト云塚ノ繩打ノ時犬ハシリ一尺五寸ヲキテ可ク然候武者ハシリハ三間斗可ク然也

○馬防築地

太閤記云池田勝入交 三好孫七郎殿其勢一万堀久太郎五千明日六日池田勝入三州に至て發向せしむるの條兩人も令ニ

出勢勝入指圖次第進退可ノ有の者増田仁右衛門尉を以被仰出けり其旨勝入同息池田紀伊守森武藏守方へも兩人助成として被差遣之條宜有相議となり因然秀吉卿も犬山より出張し樂田を本陣として二重堀より青塚に

にても塚にても透のなきやうに立る也

○石垣

信長記云安土城 四月朔日ヨリ本丸石垣ノ石ヲ引セラル、

ニ大石ヲセキ上ル事日ニ彌増月ニ累リケリ

安土日記云天正四年四月朔日ヨリ當山以ニ大石御構之四方石垣ヲ被築

清正記云はいれくといふところは日本にては八丈か島硫黄か島などのことくなる流罪人の居所也朝鮮國の内なり三里四方に野あり其なかに山あるを石垣をつき城のやうに家を作り都よりの流罪人をこめをきまはりの野をひらきあはひえを作り渡世を送り候

伊達日記云七月廿日頃赤國へ何モ御越候被城南ハ大川ニ

テ岸高三方ハ七間程ノ石垣ニ候吉川ハ河ノ南向ニ陣取候

竹束ヲ付仕寄被成候城内ヨリ日暮候ハハ明松ヲ三間計

ニ一ツ、トモシ候加藤主計龜ノ甲ヲ作人ヲノセ石垣ノ根

（押寄其内ヨリ鶴ノハシヲ以テ石垣ヲコチ候ヘトモ大石

ニテ不レ成處ニ城内ヨリ燒草ヲカケ被龜ノ甲ヲヤキヤフ

リ候カサネテ牛ノ皮ヲハキ毛ヲ下ヘナシ龜ノ甲ニ張付又

押寄候處ニ右ノ如ク燒草ヲカケ候内ニ居候者トモ有兼出

候而一二人ツルノハシニテ石ヲコネ返シ候故石垣クツレ

至て馬ふせきの築地を高くつかせ用心きひしかりけり

○石築地

竹崎五郎繪詞云人々おほしといへともきくちの二郎たけふさ文永の合戦になをあけしをもてたけふさのかためし役所の石ついで地のまへにうちむかし將軍の兵船はほばしらを白くきにぬりてまるとうけ給る

應仁別記云浦上カ小者一若ト云足輕賀茂ヨリ紫野ノ正傳寺ノ脇ヨリ纒五六十人ニテ舟岡山ノ後ヘマハリケリ此口ハ一色相拘タリ是マテ敵賣來事ハアルマシト思ケレハ大

略嵯峨ヘ行ケレハ甲斐甲斐數人モナシ一若ハ堀ヲ飛越石築地ヲ飛舉陣屋ノ片脇ニ火ヲカケ、レハ一色ハ諸勢引立テ金吾ノ陣ヘ馳加

○石倉

豐鑑云天正二年の春小谷山は北にさかひ雪いとふかくさしまさる寒のくるしみあり三里餘いぬ井にあたり今濱とて古き城所あり海にそひて雪淺く舟の往來も便ありて今

信長の御座安土山へも程遠からねはかふり仕るに煩なし此所にすむとて堀をふかくし石くらを打まはしとのつくりしてうつり給ひぬ今濱のなをあらためて長濱となん築地記云木戸は内へ入てカマへ候なり土居にても石くら

兩人石ニ被ニ打殺一人生候寄手コレヲ見取付責候間破候

テ城中ノモノ可ク勸ヤウナク大川ヘトヒ入候云々

玉露雲云慶長十九年三月廿一日ニ勅使繪旨ヲ持テ武府ニ

至ル諸國ノ牧伯江城ノ石垣ヲ築ク云々

○鹿垣

梅松論云細川の人々あみたか峯には目もかけず川原を下りに南へむかひしほとに淀竹田に充滿したる敵とも竹田繩手の小處を堀切竹を打切て鹿垣を結構をあげ城戸を立て御待處に云々

太平記云 昨日小笠原カ攻タリシ濱際ヨリ上リケル

寄ト均ク切岸ノ下ナル鹿垣一重引破テ懸テ出塚ノ下ニ着

ントシケル處ヘ又城ヨリ曇マレタル兵二百餘人拔連テ打

出タリケリ

又云 城ニハ鳴ヲ静メテ事ノ様ヲ見ヨトテ閑マリ却

テ有ケルカ己ニ鹿垣程近ク成ケル時畑六郎所ノ大夫坊快

舜惡八郎鶴澤源藏人長尾新左衛門兒玉五郎左衛門五人ノ

者共思々ノ物具ニ太刀長刀ノ鋒ヲ汰ヘ聲々ニ名乗テ喚テ

切テツ出タリケル

又云 官軍烟ニ咽テ防カントスルニ叶ハネハ皆八幡

ノ御山へ引上ル四方ノ寄手ニ萬餘騎則洞カ峠へ打上リテ

土岐佐々木山名赤松田飽庭宮ノ入道一勢一勢數十箇所ニ陣ヲ取鹿垣結ヲ八幡山ヲ五重六重ニソ取卷ケル頼印僧正繪詞云同十七日曉俄大將以下ノ諸軍心ヲ一ニシテ陣取ノ爲ニ責ノホル處ニ折節修理ノ料ニ鹿垣木戸以下トリ破タル處ニ御方ノ勢霧ニ迷ヒテ陣取ノ處ヲ返テ左右ナク越中ニ責入

應永記云細川ノ一門赤松ノ一族都合其勢五千餘騎南ノ方ヲ破ント屏鹿垣ニ付テ入替入替責戰フ

文正記云然間尾州守護代織田兵庫助敏廣拂遠州陣一少休汗馬甘氣在國仕委此難說雖有上洛之支度依諸

一族之會議待京都一注進處國中強人與同浪人一四方蜂起聞音螺鐘聲日夜無止震動六合近里近郷濫妨狼藉

拷訊僧俗叫喚大叫喚焚燒舍宅焦熱大焦熱刺欲襲下津然者大路小路城門櫓々於役人居於警固構於

亂杭逆木雉堞等日夜用心

又云迄于這邊那邊追手搦手婦女垣廊下中門大庭綠際鋪長刀鎌熊手鎧突立突旗竿引側引側小旗笠置閃并立

官地論云去來如形構城郭欲橋一日害洲崎泉入道慶

覺河合藤左衛門尉宣久爲大將久安土在所付屏獅子垣重縛同構要害

ヲ得シ兵ニテ居城ハ僅ノ要害ナレトモ堀深ク土境高ク矢羅井鹿垣迄丈夫ニ拵ヘタレハ容易モ不被敗弓鐵炮ハ降雨ノコトク打出ヌ田村勢モ攻アクンテ時ヲン移シケル

○查垣

應仁記云敵味方押分而牛角構要害一樓征樓左間城戸

查垣鹿垣弓藏打亂概杭逆木云々

○菜垣

太閤記云山中の城二之丸裏にてうちし鐵炮共からめ手を無心許や思ひ助行しやらん今は鐵炮をさのみは不打ちにより渡邊又真先にまをりの垣へのりこえ廿間計も追立す、みしかとも云々

○菜

○揚菜

太閤記云山中の城勳兵衛跡を見かへり候へは成合平左衛門尉高屋八郎坂井兵右衛門吉田武左衛門尉渡邊新右衛門赤井久左衛門なとまつ、いたり出丸のは、三十間計長さ三町餘有しを敵に追すかひ込しかさかなる敵共にて二三度歸し合せ戦んとせしを渡邊大聲を上すまををあらせず追立をつ立三の丸まをりきはまで追入しか其他の勢は一

信長記云磯野丹波守カ楯籠タル佐和山城ニ推寄幾重トモナク取圍ミシカトモ峻難ノ地ナレハ一旦ニハ攻ヘカラストテ鹿垣ヲ結廻シ百々カ屋布ヲ向城ニ拵ヘ丹羽五郎左衛門尉ヲ被入置

豊鑑云天正十三年の春秀吉軍を紀伊國に趣け給ふ(中略)土はしといふ所にうつり給ひ兵ともを大田村といふ所に

さしむけ城をからみ給ふ時の中にせめおとさは兵多く死うすへしとて例の水責にし給ふ城の高さをはからはせ堤

を築まはし敵の出さる様に外にま、かきをゆひまはせり次第にた、えければ浦々よりも舟とも取入てかいたてを

かき旗を立ならへ四方よりこきよせ鐵炮を打掛事おひた

たし

大友與慶記云宗麟公平生下野にて鹿多し牛馬のかすあり堀切と中のせはきとこに御鹿垣あり宗麟公これに御立

なさる、御鹿垣のうちは御小屋從衆そのほかまはり御近邊衆のま、かきその近前にうしろ射手あり鹿垣のたんだんかくのことくさため北よりせ子を入れて追馬もうしも鹿

にまはりて出る

奥羽永慶軍記云高倉ノ城主ハ二本松ノ一門ニテ清和源氏ノ末葉島山近江守ト云者ナリシカ元來武略ニ名

人も交へす中村かせいのみなり

續武家閑談云西の口より渡邊新左衛門赤井久左衛門か、りけるか兩人は手を負ける扱城兵きひしく防事もなく三

丸へ引取渡邊以下勝に乗て出丸より三町程の所をひたひたと附まはひ三丸まをり際まてす、みけれとも他家の兵

はいまた一人も來らず無勢にて然も三丸門かくしの上ダまをりより一度稠り稠り鐵炮を打ゆへ忽付入にはならぬ

ともまをり柱迄粗つきて則まをりを此方へ取て其口を押へ有之所に一氏内擧兵左衛門渡邊源七跡より續き兵左

衛門は鐵炮に當り手負引取まをりの兩脇へ一時餘り勘兵衛以下まをり跡の圍にたまり候

武家名目抄稿第百五册

塙檢校保己一編

居處部廿九

○堀

續日本紀云延曆五年四月庚午詔曰諸國所貢庸調支度等物每有未納交關國用積習稍久爲弊已深良由國宰郡司遞相怠慢遂使物漏民間用乏官庫(中略)所司宜詳沙汰明作條例奏聞於是太政官商量奏其條例一撫育有方戶口增益勸課農桑積實倉庫貢進雜物依限送納肅清所部盜賊不起制斷合理獄訟無冤在職公平立身清慎且守且耕軍糧有儲邊境清肅城隍修理若有國宰郡司鎮將邊要等官到任三年之內政治灼然當前一條已上者五位已上者量事進階六位已下者擢以不次二授以三五位

吾妻鏡云文治五年八月七日甲午泰衡日來聞二品發向給事於阿津賀志山築城壁一固要害一國見宿與彼山之中間俄構三口五丈堀堀入逢隈河流云々又云嘉祿二年六月十一日丙申將軍家御直令出門外西東

又云吉野城 吉野ノ大衆前後ノ敵ヲ防キ兼テ或ハ自腹搔切テ猛火ノ中ヘ走入テ死スルモ有或ハ向フ敵ニ引組テ指チカヘテトモニ死ルモアリ思々ニ討死ヲシケル程ニ大手ノ堀一重ハ死人ニ埋リテ平地ニナル

又云三井寺 栗生篠塚是ヲ聞テ馬ヨリ飛テ下リ木戸ヲ引破ラント走寄テ見レハ堀ノ前ニ深サニ丈餘リノ堀ヲホリテ兩方ノ岸屏風ヲ立タルカ如クナルニ橋ノ板ヲハ皆刎逆シテ橋桁計ソ立タリケル

總川親俊記云天文十一年四月六日丙戌公方様御堀貴殿より今日十間被_レ仰付_レ候白川郷東梅津深草人數也

○總堀

結城戰場物語云抑かの結城か城と申は西は大河をかまへ四方のそうほり廣くふかければ大船もうかふことくなり水の上の岸は廿四丈そひへたるにらんくい打てさかもさ引こたてをあまたつきたてければ異國のはんくわい張良も面をむくへきやうそなし

義光物語云長谷堂 春日左衛門先陣にて惣堀まで坂寄と云とも城中には少も不_レ慮四方のやくらより鐵炮を雨あられのことく放し懸ける

小島長憲家譜云敵大備と見は見せ人數を出し行懸不_レ來

堀邊給有_二御除服之儀_一

梅松論云義貞打負て落ける間山の勢多く討れけり雖_レ然ともあみたか峯の敵相支へし程に同廿四日の夜東寺にをいて合戦の評定まぢなり式儀云勢歩行立に成て楯をかつき堀鹿垣を引破て資落すへしと申ける

太平記云阿蘇 若ヤト思返シテ堀ヲ飛越ントシケルカ口ニ丈深サ一丈ニ餘リタル堀ナレハ越ヘキ様モ無リケリサラハ是ヲ橋ニシテ渡シヨト思テ堀ノ上ニ末靡キタル吳竹ノ梢ヘサラサラト登タレハ竹ノ末堀ノ向ヘナヒキ伏テヤスヤスト堀ヲハ越テケリ

又云赤坂合 本間跡ニ付テ今ハ互ニ先ヲ争ヒ申ニ及ニ一所ニテ戸ヲ隠シ冥途マテモ同道申サンスルソヨト云ケレハ人見申ニヤ及ント返事シテ跡ニナリ先ニナリ物語シテ打ケルカ赤坂ノ城近ク成ケレハ二人ノ者共馬ノ鼻ヲ双テ懸登リ堀ノ際マテ打寄テ燈踏張弓杖突テ大音聲ヲ揚テ名乗ケルハ武藏國住人ニ人見四郎入道思阿年積テ七十三相模國住人本間九郎資貞年三十七鎌倉ヲ出シヨリ軍ノ先陣ヲ懸テ戸ヲ戰場ニ躍事ヲ存シテ相向ヘリ我ト思ハン人々ハ出合テ手ナミノ程ヲ御覽セヨト聲々ニ呼テ城ヲ睨テ引ヘタリ

は仕掛敵大人數總返しせは後に古屋敷又は油掛總堀の能所を見定大鉞を以殺_二日夜息_一透之不_レ成様に可有_レ之候

○構堀

安土日記云尾濃江勢三五幾内若狹丹後丹波播磨十四ヶ國之衆在洛候テ二條古キ御構堀ヲヒロケサセラレ此時野村越中_レ被_レ出_二褒美_一不_レ斜候也

○外堀

○内堀

應仁記云我政長 二條京極ノ宅ヨリ屋形ノ前ナル佛陀寺ヘ上テ屋形ト一所ニ持續ケテ櫓昇櫓密ク舉外堀内堀ホリ廻

○二重堀

増補家忠日記云天正十二年三月廿七日秀吉犬山ノ城ニ至テ陣ス即日秀吉犬山ヲ發シ樂田羽黒邊ヲ巡見シテ小牧山ニ對シテ向城ヲ構ヘ兩陣ノ間ニ二重堀ヲ堀築地ヲ高シ柵ヲ結ヒ軍勢ヲ賦リ入テ云々

○大堀

源平盛衰記云八牧夜 矢藏ノ前ハ大堀ナリ橋ヲ引タレハ入ル事叶ス互ニ堀ヲヘタテ、遠矢ニ射レハ宵ヨリ今マテ勝負ナシ

應仁私記云敵味方押分而牛角^角構^二要害^一前征樓左間城
戸倉垣鹿垣弓藏打^二亂概^一杭逆木^二階橋大堀築地踏鞴壁^三
耳目^一候争輒兩方難^レ有^二一途之落居^一覺候

播州佐用軍記云^{政範}此城ト申ハ東向ニ大堀一重有テ橋
ヲ渡シ橋ノ南北ニ矢倉有(中略)大手堀ヨリ東河原マテハ
地下リ平福川マテハ五町餘有リ云々

○長堀

續武家閑談云二條殿の小池の御前は今の室町小池の町な
り信長の時二條殿を報恩寺を替地にして移し小池の御
所を取立てやかて美々敷送立して小池に反橋などをかけ
て鳥丸通りにも室町の東側の裏にも長堀をかけ門は南向
なりさて信長時々上洛して住し給ひけるか頓て此地を儲
君に獻したまふ

○タツ堀

築城記云山城ニハタツ堀可^レ然候

○水堀

續武家閑談云秀吉御下知を以て三月十九日巳の刻過より
先鋒の諸將箱根のこなたより仕寄道具を三島の陣所より
取寄ける午の刻秀吉公は近江中納言殿陣の先すてに箱根
山中城出丸へ八町斗有所まで馬上にて趣き二町ばかり西

○堀切

平家物語云^{大衆}武士には渡邊省播磨次郎授薩摩兵衛長七
唱競瀧口與馬允頼源太清敵を先として都合其勢一千五百
人三井寺をこそ打立けれ寺には宮入らせ給ひて後大關小
關堀きり搔掻かき逆も木引たりければ云々

太平記云^{山門}寄手三百人被討前陣敢テ懸ラテハ後陣
ハ彌不^レ得^レ進只水飲ノ木陰ニ陣ヲトリ堀切ヲ境テ搔掻ヲ
搔互ニ遠矢ヲ射違テ其日ハ徒ニ暮ニケリ

新田由良家傳記云盛繁公御代より使番に小大鼓を爲持
被^レ成候鞍の前に付申候て山坂又は堀切敵色是にて御注
進仕候様に被^レ仰付^一候是は能御考にて候と古老共申候

新田老談記云新田桐生ノ勢共餘リカツニ乘リ過テ伴田久
六岩下織部板橋戸一郎已上宗徒ノ侍十一人目前ニテ被^レ
討ケレハ藤生紀伊守金谷因幡守以テノ外驚施取直シ用明
ノ堀切迄人數ヲ引テ暫ク息ヲ休メケリ

會津陣物語云直江返報有其狀云景勝對^二天下^一逆心有之
ハ諸境目堀切塞防戰ノ支度コソ可^レ被^レ仕候ヘ云々

○落穴

平家物語云^{らうは}御さうしあれはいかにととひ給へは此
山のれうして候と申さてはあんないよくまりたるらんい

りたまひ立なから城中を御覽する次郎右衛門弟岡部治部
大剛の兵なれば信玄公の御舍弟同前に罷在て下々の武士
めいけはなきとことほり家より下へ飛下候へは花澤腰く
るわから堀へ飛いる其故岡部次郎右衛門衆猶以近取寄て
逍遙軒は其後御歸ある

甲陽軍鑑末書云逍遙軒諸手ヲ見廻リ岡部罷在家ノ上ヘア
カリ給立ナカラ城中ヲ御覽アル岡部一間戸ヲ取ヨセ逍遙
軒ノ前ニ立レハ運ノ矢ハ遁レヌト有テ脇へ推タホシ給フ
治部申ハ信玄公ノ御舍弟同前ニ罷在テハ下々ノ武士ニ似
合ストテ家ヨリ下ヘ飛リ候ヘハ腰クル輪ノカラ堀へ入
次郎右衛門衆是ヲ見テ猶近攻ヨスル也

奥羽永慶軍記云^{土時}南ノ寄手ハ大將豊島勘十郎重氏同
玄蕃(中略)重氏此勢ヲ合テ未明ニ寺内山ニ押ヨセ敵ノ要
害ヲミレハ岑炬霞立チ昇リ暫シ別ル、横雲ノ間ヨリ夜ハ
ホノホノト明ニケリコ、カシコニ櫓ヲ上ケ旗吹貫ヲ山風
ニヒルカヘシカラ堀深ク打ミヘタリ

○藥研堀

大友興廢記云^{妙林}妙林は鶴崎に在て俄に一城をかまゆ
る此尼みつから出て堀の繩張外かは二三の丸をみはから
ひまつ藥研堀にはらせひしをうへそくをふらせ云々

かてかそんちつかまつらては候へきそれ〜これより平家のまやうくはし一のたにのうしろひえとりこえおとさんと思ふはいかにとのたまへはゆめ〜かなはせ給候まし三十ちやうのたに十五ちやうの岩さきなど申所をは人のたやすくかよふへきやうも候はす其上まやうの内には待まいらせ候らんと申ければ云々

新田老談記云館林御城ニハ金谷因幡守ヲ大將トシテ宗徒ノ人々十三人近邊ノ郷人歩弓三百六十人餘リ籠城シタリケリ高根川俣加保志小會根ヲ取廻シ落穴杭逆茂木ヲ引並テ敵寄來ハ希戰シテ死セント待居タリ

大友與廢記云抄林一城持條さくの外には幾所にもおちあなをほりそのうへを平地にして城中よりうち出んとときの目まろしのくいあるひはさくなどをすて置

源平盛衰記云南郡合戰條廿六日藏人頭重衡朝臣大將軍トシテ五條大納言郡綱卿ノ山莊東山若松ノ亭ニシテ勢汰アリ着到アリ其勢三萬餘騎南都ヲ責ムヘシト披露アリ大衆是ヲキ、テ東大寺ノ大鐘鳴シ蜂起騒動シテ大和山城ノ惡黨吉野十津川ノ者共ヲ招集テ奈良坂般若路ノ道伐塞キコ、カシコニ落シヲ堀リ管ヲ植ヘ在々所々ニ城郭ヲ構テ云々

招寄詰寄堀之際者件車橋堀瀧々々從四方一一同切出追散八方以三其競一推寄在々所々一燒拂一々一切頭事不可回〆懸云

關八州古戦録云武州岩氣藩城條寄手疹ム事ナク頻ニ競ヒ進シママ敵方堪兼テ城中ヘ引入ル本多平八郎忠勝十六歳淺野左京大夫幸長十五歳先登シテ大手車橋ノ上ニ於テ勇戰セラ

長門本平家物語云一谷合戰條平山は攝津國生田森を二の城戸口としてほりをほりさかも木をひき東にはほりにひきはしをわたして口一あけたり

てこくま物語云おかへこのよしうけたまはりかひことのおさへましまさはたとへきまなかかためたるまろなりともなにかまいらてそうらうへきまよりそうといふまゝにむまよりもとつておりなきなたをつるにつきさかもきに

をかけみゑのほりをはひらり〜とはねこして七十五人までかけわたすひきはしをかるけやかにかけかけてうちはは、そた、まいれとてきつさをそへてきつているまろのうちつわものも四はうのやくらよりはら〜とおりたつていのちをすて、た、かいけり

又云尾三郎一谷案内者條此山ニハ鹿ハ無キカ彼惡所ヲハ鹿ハ通ラスヤト問給フ鹿コソ多ク候へ世間寒ク成リ候へハ雪ノ淺クニ喰マムトテ丹波ノ鹿カ一ノ谷へ渡リ日影暖ニ成ヌレハ草ノ蕃ニ臥サムトテ一ノ谷ヨリ丹波へ歸リ候也ト申サテ其下ニハ落シ堀リ築ナト植タリヤト問へハサル事ウケタマハラス御退迹候へカシ馬モ人モ可通所ナラネハ爭カ其用意侍ルヘキト答フ

別所長治記云丹生山夜討淡河軍條淡河彈正ハ一族郎等ヲ集申ケルハ近邊丹生ノ山ノ一揆ヲ秀吉賢キ謀ニテ追落ス此上ハ當城へ可押寄コト四五日ニ不可過去ハ天ノ時ハ不〆如地

利地ノ利ハ不〆如人和ト云トモ大敵ヲ請テ戰ニ得レ利專地ノ利肝要也誘打出テ敵ヲ防カン用意セメトテ一族郎等五六十人足輕人夫三百人普請道具ヲ持セ日々ニ城ヲ出敵ノ可寄來道ヲ堀切落ヲ拵或馬サクリ車菱ヲマカセ逆茂木大綱ヲ張ケル

○車橋 官地論云爰慶覺入道向河合私語潛傳聞城衆之會議若衆意見一陣破殘黨不〆全明日師懸額口弱手掛嘉程諸陣不可留手云亦老衆異見獅子云獸爲畜類王捕大象全其威捕小虫全其威不可侮額口之弱手敵目近

甲陽軍鑑云一條右衛門大夫殿衆にあさみ清太夫堀無手右衛門中根七右衛門是三人は三州窄人なるか走來て脇又市同前に一宮左大夫鎧脇に刀にてこたゆる駿河先方ひらのと云侍は是も土屋衆なるか其場六か敷と見えてはつすあ

とより甲州勢かさむを見てせん城ひきはしを城内へつほむ 甲陽軍鑑末書云甲州勢カサムヲ見テセンノ城引橋ヲ城内へツホム扱土屋衆ノ脇又市ヲ切一乘衆各城へ乘原隼人ト申侍大將ハ我備ニ而一番ニ乗ヨミ頭ニ刀疵深手負歸陣有

テヤカテ甲府ニ而死ス土屋惣藏大手ヲ乘込無類ノ走廻ユヘ土屋衆皆手柄ヲ仕ル云々 別所長治記云神吉城攻條二ノ丸ノ引橋ノ板ヲハネハツシ行桁

計殘シタル橋詰ニ六尺餘ノ男昔甲猪頭ニキ黒皮威ノ腹巻ニ三尺餘ノ大長刀ヲ提高聲ニ名乗ケルハ鎌倉權五郎景政カ末葉梶原十右衛門入道冬庵ト云者也

見聞雜錄云陸奥守の城兵共やれ三の廊へ打寄れとて千人斗とら〜と寄集る安部加賀守馬に乗ながら誰かある此引橋をはね返せ渡して乗込けかするなと下知すれば猪子才藏曲淵心得たりと云儘に十人斗にてもはね返し難き引橋を曳やいとはね返し其儘三の廊の外形へ入と等しく敵

方を招き立々々追込々々歩行立に成て切て廻る

○廊下橋

甲陽軍鑑云城取の事(中略)一廊下橋の事同引橋の事一橋左右廣狹の事

○造橋

謙信家記云輝虎公越中發向保類虎エツキニ思ヒ給ヒテイサ時分能ソ川ヲ渡サントソ仰ケル柴田此由ヲ承リ畏テ候トテツクリ橋ト云物ヲ俄ニカケテ人ヲトモナク其夜ノ寅ノ刻ニハ皆渡シスマシケリ

○捨橋

播州佐用軍記云寄手又住寄附城ヨリ足輕大勢走出捨橋ヲ打渡ケレハ鐵炮弓ノ士橋ヲ走渡矢ヲ放チ鐵炮ヲ打懸ケタリ

○結橋

太閤記云奥州九坪の城細尾茂助乘船加勢の者共唯無事の扱をかけよとて笠を出しけり味方是に氣を得てゆひはしなと急にいとなみつ、夜攻にせんと云まろひければ和睦のために出し使者彌見おとろきけり

○舟橋

吾妻鏡云建久六年二月八日甲子難色足立新三郎清經爲

御使上洛是近日依可_レ有_二御上洛_一海道驛家等雜事渡船橋用意等先爲_レ令_レ相_二觸_一之也

○浮橋

吾妻鏡云文治四年正月廿日丙辰二品立_二鎌倉_一令_レ參_二詣伊豆宮根_一三島社等_一給(中略)爲_二三浦義澄沙汰_一橋_二浮橋_一於相模國ニ云々

武家名目抄稿第百六册

塙檢校保己一編

居處部三十

○關

吾妻鏡云文永三年七月一日辛卯御家人等或破_レ關有_二奔_一參于鎌倉之輩_一或廻_レ路有_二密參之類_一皆帶_二兵具_一隱_二居邊土_一及_二酉刻_一俄騷動群集之輩加_二小具足_一帶_二弓箭_一然而無事而暮畢

太平記云頼貞同忠條時綱ハ能ト敵ヲ帶キ出シ透間モ有ハ生虜ント志テ打拂テハ退キ打流シテハ飛ノキ人交モセス戰テ後ヲ屹ト見タレハ後陣ノ大勢二千餘騎ニノ關ヨリコミ入テ同音ニ時ヲ作ル

又云大塔宮熊野俄ニ黒木ノ御所ヲ作テ宮ヲ守護シ奉リ四方ノ山々ニ關ヲ居路ヲ切塞テ用心密シクソ見エタリケル

又云赤松圓心圓心不_レ斜悅テ先當國佐用庄若繩ノ山ニ城ヲ構テ與力ノ輩ヲ相招ク其威漸ク近國ニ振ヒケレハ國中ノ兵共馳集テ無_レ程其勢一千餘騎ニ成ニケリ頓テ杉坂山ノ里ニ箇所ニ關ヲ居山陽山陰ノ兩道ヲ差塞ク是ヨリ西國

ノ道止テ國々ノ勢上洛スル事ヲ得サリケリ

又云山門山門ニハ敵是マテ可_レ寄トハ思モ寄ラサリケルニヤ道々ヲモ警固セス關逆木ノ構モセサリケレハ云々

又云松岡城小清水ノ軍ニ打負テ引退兵二萬餘騎四方四町ニ足ラス松岡ノ城ヘ我モ我モトコミ入ケル程ニ昏ノネヲ打タルカ如ニテ少モハタラクヘキ様モ無リケリ角テハ叶

マシ宗徒ノ人々ヨリ外ハ内ヘ不可_レ入トテ人ノ郎從若黨タル者ハ皆ソトヘ追出シテ四方ノ關下シタレハ元來落心地ノ付タル者共是ニ人名付テ無_レ憑甲斐_一執事ノ有様哉サテハ誰カ爲ニカ討死ヲモスヘキト面々ニツフヤキテ打連打連落行

○關所

太平記云關所夫四境七道ノ關所ハ國ノ大禁ヲ知シメ時ノ非常ヲ誠メンカ爲也然ニ今觀斷ノ利ニ依テ商賈往來ノ弊年貫運送ノ煩アリトテ大津葛葉ノ外ハ悉ク所々ノ新關ヲ止ラル

又云瓜生高越後守四方ノ口々ニ堅ク兵士ヲ居テ人ヲ不_レ通若ハ所用アリテ此道ヲ通ル人ハ師泰カ判形ヲ取テソ通リケル瓜生判官サラハ此關ヲ謀テ通ラント思テ越後守ノ許ニ行テ御馬ノ大豆ヲ召進セン爲ニ杣山ヘ人夫ヲ百五

十人可遣候關所ノ御札ヲ給リ候ヘト云ケレハ云々

三浦氏文書云宮根山別當關所事爲圓覺寺造營之要脚所
被差置三ヶ年也早可被汰沙付寺家雜掌之狀依仰
執達如件永和二年十月廿八日三浦介殿沙彌花押

○新關

新式目追加云新關事近年御免之分宜可有其沙汰其外
自由之新關者嚴密可停廢之由可被仰下一歎

○柵

倭名類聚抄云柵說文云音編堅木也

日本書紀云皇極天皇三年冬十一月蘇我大臣蝦夷兒入鹿臣
双起家於甘檜岡稱大臣家曰宮門入鹿家曰宮宮門
稱男女曰王子家外作城柵門傍作兵庫

吾妻鏡云文治五年八月八日乙未泰衡郎從信夫佐藤庄司
又湯庄司是相具叔父河邊太郎高經伊賀良目七郎高重
等陣于石那坂之上堀濕懸入逢隈河水於其中引柵
張石弓相待討手云々

織田家譜云勝頼大喜進兵二十餘町越瀧澤河而陣焉及
聞信長已來而勝頼家人諫之使返兵歸甲州勝頼不
聽信長與大權現相議張柵三重設備而待焉
甲陽軍鑑云勝頼公仰せらる、(中略)又まやくをゆひ土手

加勢とし入をかる四方より柵をつけ竹たはをもつて付ま
はし弓鐵炮をすまなく射させれば城を渡し申へき條
命を御たすけ下され候様にと彌八郎申上しかとも秀吉公
御承引なくた、責はすへき旨仰出されし

矢島十二頭記云彌以赤館をまつらぬ瀬目か峠難所なれば
柵を振りて大石を積置佐藤越前牧修理半田伊三郎大友周
防管若狹請取て待懸申候

大友記云藤州勢宗麟公被仰ハ吉州小早川大軍ニテ來リ柵
ヲ十重二十重ニユヒヒカヘ逗留仕ハイカ様長陣タルヘシ
ト見エタリ

慶長見聞記云宰相九月四日ノ辰ノ時分ニ大津ニ着家中ノ
者トモヲ呼寄軍ノ評定要害ノ支度ナト申付ラレ京町筋三
井寺口荆川筋ニ柵ヲ付諸口ノ手分ヲスル

賀越關諍記云宮田彌六退長俊使者ヲツカハシテ何トテ小林
殿ハ其ニ御入候ソ柵ヨリ内へ來候ヘト云小林聞テ左候此
所ニ有テ木戸ニ付敵ヲ横箭ニ射候ヘシト申程ニ尤トモト
云ヒ又下ノ木戸口ニハ小河黨其外衆合衆ナルカ故ニ無

覺束一思テ駒引返ス

水野勝成記云大須賀五郎左衛門大久保七郎右衛門境目の
柵を切抜通り申候

を築ては氏康の名もよこすと思はれて第一關東安房佐竹
の敵にはち下總上總の旗下にもはちて比與なる合戦は氏
政もいたさるましく候

安土日記云天正三年五月十七日野田原ニ野陣ヲ懸サセラ
レ十八日推詰志多羅之郷極樂寺山ニ御陣ヲ居サセラレ
(中略)家康公瀧川陣取ノ前ニテ馬塞ノ爲柵ヲ付

豊鑑云別所か一族悉亡秀吉三年心を操しあたを亡し播磨
國半過たなこゝろににきり勢西國に響けり(中略)其より
因幡國にうち越山名禪高のふまへし鳥取の城をかこまん
とし給ふ此處は山名の某知所にてありしを勢少て叶はし
とて毛利輝元のすさを加て守らせけり山名某は秀吉に心
さしありて城を抜出れと毛利がすさは猶のこれり城さ
かしくやすく破かたければ糧のつきんを待へしとて城の
廻りにさくを結塀をぬりて城より外へ出さる様に構へぬ
れは云々

柴田退治記云秀吉自身寄馬見敵之働以短兵引拂亂
杭逆茂木打破山下即其地結返柵重竹手把以材
木焚之止敵之返路云々

清正記云秀吉公富田の寺内に御陣をすへられて加賀野井
彌八郎か居城をとりまかせ給ふ信雄卿より二千の人数を

出陣聞書云柵つきやうの事敵陣へ向て四横五突初る也
按、柵にしへきともかきキとも讀たりしも中頃より
音のま、にサクといひ又シヤクともいひしと見えたり
是れもと矢來の類なるををれ以て造れる城廓をも亦柵
といひけりそは既に柵の條に委しく載たり

○一柵
○二柵
○三柵

松原自休手録云佐竹方亂入片原町城兵聞之如蜂起今
福ハ木村長門堀田圖書後藤又兵衛馳來ル佐竹奔一柵
抱三三於此雖挑戰不決勝負然處ニ木村カ兵士柳
名右衛門堤ノ北へ入小船横合打鐵炮依之佐竹勢引ニ入
三柵

初井日記云久下城兵池ノ上將軍本陣ノ大手先ノ寄口ハ三草
小野原酒井佐渡須知伊與景永澁谷隱岐秀恒小林民部等カ
陣々一千餘キハ城戸口三ノ柵前ト定ム云々

○二重柵
播州佐用軍記云寄手惣勢上月表此要害ヨリ南四五町隔山有
此山ノ尾崎東ニ雲頭タリ爰モ川ヨリ山涯マテ二重ノ柵有
テ雕貫セク川ヨリ南北遙成

○二重柵
播州佐用軍記云寄手惣勢上月表此要害ヨリ南四五町隔山有
此山ノ尾崎東ニ雲頭タリ爰モ川ヨリ山涯マテ二重ノ柵有
テ雕貫セク川ヨリ南北遙成

○二重柵
播州佐用軍記云寄手惣勢上月表此要害ヨリ南四五町隔山有
此山ノ尾崎東ニ雲頭タリ爰モ川ヨリ山涯マテ二重ノ柵有
テ雕貫セク川ヨリ南北遙成

○二重柵
播州佐用軍記云寄手惣勢上月表此要害ヨリ南四五町隔山有
此山ノ尾崎東ニ雲頭タリ爰モ川ヨリ山涯マテ二重ノ柵有
テ雕貫セク川ヨリ南北遙成

○三段柵

初井日記云池上赤井惡右衛門景遠内藤備中守顯勝ハ西ノ手ヨリ打敗リテ乘込テ勝負スヘントテ三段ノ柵ヲ打敗テ提筒火矢ニテ攻ケレトモ落サル故ニ燒草ヲ取出シテ矢倉下ニ入テ燒立ケレハ云々

○雕貫柵

播州佐用軍記云寄手惣勢上月表城兵打出川端ニテ防戰每度川エ追込ラレテ打負ヌ漸後ニハ佐用姫ノ前ヲ涉兼テ佐用姫ノ社ヲ形捕テ二町四方ニ鹿垣二重雕貫ノ柵ヲフリ此内ヲ向城ヘ構エ是ヨリ晝夜日暮ニ足輕ヲ出シ鐵炮ヲ打遠矢ヲ射カケ遠攻ニコソ攻タリケレ

○柵木

官地論云四方之諸勢堀堵必爾々々詰寄振鑿木縛廻廻獅子垣二十重廿重打圍是偏項王不異漢軍被圍雖不行々々虞姫々々如何有御嘆理角城中政親宣註今日之討死交名可擊閻魔之廳被註

甲陽軍鑑云今日は浮島に御陣をなされ跡を御覽し合られ尤と長坂長閑申上る勝頼公仰らる、は見合るに及はぬ事なり氏政の何として合戦を勝頼と仕らるへき縦一戦をとけらる、とも柵の木をゆひとるをつきなんといたしては

さくはなはゆひめ内にあるへし又山城の時はいひきく有へし

○柵網

吾妻鏡云承久三年六月十四日丁卯武州越河不相戰者難敗官軍由相計召芝田橋六兼義等可尋究河淺瀬之旨兼義伴南條七郎馳下真木島依昨日雨綠水流濁白浪浪落難窺淵底爲水練遂知其淺深頃之馳歸令渡之條不可有相違之由申畢及卯三冠兼義春日刑部三郎貞幸等更命爲渡宇治河伏見津瀬馳行(中略)信綱者雖有先登之號於中島經時尅之間令著岸事者與武藏太郎同時也柵網者信綱取太刀一切棄之

○矢羅井

奥羽永慶軍記云佐竹與伊達兩陣共ニ新手ヲ入替手負ヲ殘辰ノ刻ノ始ヨリ未ノ刻ノ終リ迄東風西風人馬ノ息ヲツク間モナク挑合双方ノ手負死人數モ不_レ知伊達勢ハ佐竹ノ矢羅井ノウチヘ二度マテ懸入シカ關東勢ハ伊達ノ芝居ヲハ不_レ動

○矢切

太閤記云山中の城本丸をこゝろかけ進み行見るに大杉あまた有ける所より鐵炮を少々うちかけ候へとも大杉之本へ

如何もあれた、平地の合戦はなるましく候云々

松隣夜話云謙信公ヨリ上方信長へ使札ヲ越玉フ(中略)參州於長篠柵ノ木ヲ結廻シ御勝候體ニハ被_レ成間敷候ナリト直江草案ニテ散々ニ書遣ス

賀起圖諍記云義長方大軍ヲ催テ寄來ラレ候ニ當方一向無勢ナル上ヤナカセ村ハ殊ニ大ニ山ヲアテ、前ハ何ニモ淺間ナル處ナリ然ルニ柵木ノ一重モ不_レ結處ニ野陣ヲ取り候ヘシ云々

由良家傳記云天正十年霜月中旬に北條殿厩橋の城へ出陣なされ茶屋を立られ候て由良殿長尾殿へ茶を進し可_レ申旨被_レ仰遣候(中略)新田足利の御兄弟數寄屋へ御入候とそま、大勢の人數に物頭を出し北條家よりひしくと柵木をふり申候云々

築城記云サクの木の長さ土より上六尺餘たるへし凡一間の内に五本はかり可_レ立但木の大小により心得あるへし人のく、らざる程に可_レ立横フチハ内にあつへしフチ四有へし下のフチひさのとをりにゆふへき也なはのゆひめはそとにあるやうにゆふへし又そとによこふちを結もあり但それはやかて埒を可_レ付心得也サクもついのことしとところ内へ折てゆふかツヨク能なり又へいにする

走り着矢切の上へ勘兵衛尉乗上り内を見こみ候へは大なる廣間有人多く入こそり狭くや有けん大庭へなたれ出し武士二百人餘居ながらへ面々得道具を以て此上はと思ひいりし形勢神妙にそ見えにける

關八州古戦録云小田原勢沼田新太郎氏邦ノ手ヨリ小前田越中守武主トシテ先達テ攻寄矢雖ニ火矢ヲ射カケシマニ城兵是ヲ消サントシ周章ク分野ヲ見テ云々

○キテ

承久軍物語云つく井の四郎とある小家にはしり入四方のかききてを立たててもつてさしつめ引つめさんさんに

なかをもちのさうし云よしたかこのよしきこしめしにくき物のことばざしはやくせめよといかり給ふうけたまはると申てそうちんはうつたちひたくときてにつく又云つは物ともはわれもわれもとせめのほるたいしやくまゆうのた、かいかくやとおもひまられたりきてころにもなりしかはかへにつけたるたうつきともはらりはらりとときりとすことうかうんのきはめにはきてにうてをとりこへむまやにはさらにあたらさり

按、キテは木手にや土手芝手なとかんかへ合はすへし

○亂杭
 平家物語云宇治川搦手の大將軍には九郎御曹司義經同伴
 に人々安田三郎大内太郎島山庄司次郎梶原源太佐々木四
 郎糟屋藤太澁谷右馬允平山の武者所を先として都合其勢
 一萬五千餘騎伊賀國を経て宇治橋のつめにそ押寄たる宇
 治も勢田も橋をひき水の底には亂杭打つて大綱はり逆木
 つないて流し懸たり

判官物語云山縣あちせんあちせんの國のちう人つるかの兵衛か
 かの國の住人いの上さるも二人うけたまはりてあらち
 山のせきをこしらへて夜三百人ひる三百人のせきもりを
 すゑて關屋のまへにらんくひをうちていろしらくむかは
 のそりたるものをはみちをもすくにやらす判官殿とてか
 らめおきてきうもんしてそひしめきける

太平記云將軍御供御ノ瀬セ、カ瀬二箇所ニ大木ヲ數千本
 流シ懸テ大綱ヲハリ亂クヒヲ打引懸々々ツナキタレハ何
 ナル河伯水神ナリ其上ヲモ游カタク下ヲモ潜リ難シ
 又云大館左馬對陣已ニ取卷セケレハ四方ヨリ攻寄セテ持柄
 ヲカツキ寄セ亂杭逆木ヲ引ノケテ夜盡三十日迄ソ責タリ
 ケル

大関記云四國國取附城の御普請は七月朔日より鐵初め有り

し加十日頃にははや堀櫓二階門堀等まで出來にけり角て
 杉原七郎左衛門尉を入置敵城二ヶ所の新城と鳥取との間
 を取切通路なかりしかは本城も新城も事外にそよはりけ
 るかくて湊川には舟橋を掛亂杭をふり四方に堀を堀り鹿
 垣を結廻し十町々々に三階の矢くらを立

野田福島合戦記云三好衆軍攝州中島天満森へ陣取り野田福
 島ニ堀ヲホリ廻シ堀ヲ付矢藏ヲ上ケ川ノ淺キ所ニハ亂杭
 逆木引テ橋籠ル

○逆木
 順集云ある所に男女かたわきておまへの庭の面に薄萩ら
 にまほに草のかう女郎花菫蕪子小萩など植させ給松虫
 鈴虫をはなたせ給ふ人々にやかて其物に付て歌を奉らせ
 給ふ(中略)學生ためのりして今日の事を書おかせ給ふ中
 にためのりなんおなしみなもと、いふなかにつかさもな
 く千種に匂ふ花のあたりにはもき、のやうにてましりに
 く、侍とやむことなくさふらふ

平家物語云ひくちかきこの一のたにといふ所は北は山みな
 みはうみ口せはくしておくひろしきしたかくしてひやう
 ふをたてたるかことし北の山きはよりみなみのうみのと
 をあさまで大木をきつてさかも木にひき

源平盛衰記云山門廿一日ニ前座主明僧正ヲハ大納言大
 夫藤原ノ松枝ト名ヲ改テ伊豆國へ流罪ト定ルカ、リケレ
 ハ山門ナヲ騒動シテ又神輿ヲ振リ奉ルヘシト聞ヘケレハ
 御輿ヲ下シ奉ラントテ西坂本ノ坂クテコ、カシコ松木ヲ
 切り持テ行テ逆木ニコソ引タリケレハイトヲカシクソミ
 エシ何ナル者ノ讀ミタリケルヤラム門ノ柱ニ御改名ヲソ
 ヘテマツ枝ハミナサカモキニキリハテ、山ニハサスニス
 ル物モナシト寺法師ノ所行トソ申ケル

承久軍物語云新五郎やかてさしかへりせふみをこそしお
 ほせて候へ但川のにしのきまたかふして馬をあつかはん
 事かたしむかひのわたりせ七八段かほとひしをうへな
 し河中にはらんくひをうちつなをはさかもきを引てな
 かしかけたりしを四五たんとひきぬきすて、なかしつ
 なをきりさかもきを切て馬のあけ所にはまるしを立てか
 へり参りぬそれをまもらせ給ひてわたさせ給へとまうし
 ける

百練抄云嘉禎元年七月廿五日丙戌山門閉レ樞道々引逆母
 木ニ云々
 ますか、み云村時爾すてに東武士とも雲かすみのいきは
 ひをたなひきのほるときこゆればかさきにもいみしうお

太平記云赤坂合是ハ今朝此城ニ向テ打死シテ候ツル本間
 九郎資貞カ嫡子源内兵衛資忠ト申者ニテ候也云々城ノ大
 將ニ此由ヲ被レ申候テ木戸ヲ被レ開候ヘ父カ打死ノ所ニテ
 同ク命ヲ止メテ其望ヲ達シ候ハント懇懃ニ事ヲ請ヒ泪ニ
 咽テ立タリケル一ノ木戸ヲ堅メタル兵五十餘人其志孝
 行ニシテ相向フ處ヤサシク哀ナルヲ感シテ則木戸ヲ開キ
 逆木ヲ引ノケシカハ資忠馬ニ打乗城中へ懸入テ五十餘人
 ノ敵ト火ヲ散テソ切合ケル

ほしさはかりもとよりいとけはしきやまのふかきつ、ら
 をりをえもいはす木戸さかもきいしゆみなといふ事とも
 また、めらる
 伯耆卷云基長義行を始として太刀を抜逆茂木を引のけ引
 のけ打出る是を見て田所申様是こそ得たる幸よ皆々うち
 とれ者共尋常なる太刀うちせんとして能もの共百餘人扱つ
 れて行向ふ
 異本伯耆卷云此ノ城ハ大山ニ繼キテ土地僻ニ白雲腰ヲ廻
 レリ俄ニ籠タル城ナレハ堀ヲモハカハカシクホリエス大
 木ヲ切倒シテ逆木ニヒキ僧房ヲ破テカヒ楯ニカケル計ナ
 リ

又云六波羅今マテ無貳者トミエツル兵ナレトモ加様ニ城

中ノ色メキタル様ヲ見テ叶ハシトヤ思ヒケン夜ニ入ケレハ木戸ヲ開キ逆木ヲ越テ我先ニト落行ケリ又云^{將軍御進發大渡}宇治へハ楠木判官正成ニ大和河内和泉紀伊ノ國ノ勢五千餘騎ヲ副テ向ラル橋板四五間ハ迦シテ河中ニ大石ヲ疊アケテ逆茂木ヲ繁クエリ立テ東ノ岸ヲ高ク屏風ノ如クニ切立タレハ河水ニニワカレテ白浪漲リ落タル事恰カモ龍門ニ級ノ如也

文正記云構ニ於亂株逆木雉堞等一日夜用心辟^{易厥威}官地論云凡高尾城有様弓手石岸高發無^{往復之路}妻手流水遠漲絶^{去來之船}加之外郭穿^{堀築}々地^{廻々}颯^颯矢倉^{所々}播^{垣橋}亂株逆門木筒木矢重々構

義光物語云城中さして逃登る此いさほひをのかさす付入に乗とれとて應を以て下知したまへははやりをの若者とも聞もあへす馬を乗ちらし乗ちらし逃る勢おつかけおつかけ透間もあらせす責入は己か拵たる木戸逆茂木にふせかれて城へは入えす

○虎落

信長記云^{長尾合}信忠卿ハ美濃國遠山城ニ秋山大島座光寺三人爲^{大將}其外甲斐信濃ニ於テ名有者共二千計楯籠リケルヲ攻ラルヘシトテ直ニ發向シタマヒテ彼城ヲ被^取

一ツものなるへきを枝ながらの木を引並たるをサカモキといひ竹を結ひわたしたるをサカモカリといふこ
とにはなりたり

○蜘蛛

長門平家物語云^{佐々木三郎盛}源氏の大しやうくんみかはの守もむろにつきたりけり船よりして備前備中兩國のさかひ西河智河志りふちとのわたりと云所におしよせてちんをとるかのかのわたりは海のおもて地よりちかくてくがへ五町はかりへた、りたるところにて平家の方より海のそこにはひしをうゑくもてゆひて云々

園ニ三重三重柵摸膺ヲ結廻シ隙透間モナク攻ケレハ云々大閣播州征伐記云被^寄付城ニ南八幡山西平田北長屋東大塚城近五六町築地高一丈餘上ニ重柵入^石摸雁昇橋高結重々築^{柵川}面伏^{蛇籠}打^{梁杭}播^橋上居^番築城記云モカリ竹は枝をソキてもくましき也又處々木の柱をたつる也

○大虎落

大友與廢記云^{高尾要}軸丸ならひに高尾といふところに俄によりかひをかまゆる大手くちに高橋をとをし脇を大もかり竹の垣をゆひ柵をふり惣とかはに手をあけ柵を付け云々

○内虎落

平塞録云諸手段々陣替シテ陣場定リケレハ肥後ノ勢入替テ大先手トナル肥後一手ノ諸取口ハ兩口ト名ク其場ニ内虎落ヲ設ク篠垣ニ舉城戸アリ云々

○逆虎落

築城記云土居にさかもかりをゆふくろをうち横木をゆひそれへ折かけゆふ也又陸地にゆふは竹のさきを腰のとはりにあるほとに本をひきくろをうちよこ木をゆふ也
按、サカモカリはサカモキのなまりて延ひたるなれと

武家名目抄稿第百七册

稿檢校保己一編

居處部 附録 一

○御所

滿濟准后記云正長二年九月十六日今日室町殿様日吉御參詣云々今日御逗留明日還御於^{坂本}ハ大宮彼岸所ヲ以爲^{御所}云々

室町殿年中行事正月朔日條云上様ニテ御禮之事朔日五日七日計ナリ但於^{御所}御目見過テ各參上ス御所様申次悉披^露之^但隔^{小路}者上様申次役^之御前ニテ御盃頂戴者當管領并日野殿計ナリ御酌ハ上臈衆勤^之於^華御所御同伴衆國持衆外様御供衆申次マテハ御末ノ東ノ脇戸ヨリ參上番頭以下ハ中ノ御末ヨリ懸筵ノ内へ伺公裏辻ノ外ニテ御盃頂戴御酌ハ裏辻ヨリ右ノ脇ニ出カ、リテ役^之公家衆并番頭等御所様御盃雖^{頂戴}無^{之上}様御盃ハ拜戴之方々上ノ御末中ノ御末ハ三間梁ニ九間ニテ間ハ遣戸高國ナリ真中ニ柱有其際ノ戸兩方へ一本充開此口ニ掛筵有^但二枚ノ筵四ニキリ朝夕御膳獻スルニモ此際ニテ中

薦ノ陪膳衆ニ渡ス此時寢掛筵ニ總テ上ノ御末ヘハ日野殿
三條殿自然伊勢守亦御供衆ノ内ニモ參上ノ仁少々有之
自餘ハ不伺公云々

○廣御所

吾妻鏡云弘長元年六月十八日戊申齋依廣御所修理於
此小庭被行土公祭爲親朝臣奉仕之太宰權少貳京頼
奉行之

○小御所

吾妻鏡云文治二年八月廿日甲午小御所東北程被加修
理今日有御移徙之儀

又云建仁元年十一月三日己卯中務入道經連參御所申
近日可歸洛之由能員爲申次參小御所相具子息高
重左金吾對面給

又云建仁三年九月三日戊辰被搜求能員餘黨等或流刑
或死罪多以被糺斷妻妾并二歲男子等者依有好召預
和田左衛門尉義盛配安房國今日於小御所跡大輔房
源性欲奉拾故一幡君遺骨之處所燒之死骸若干相
交而無所求云々

又云嘉禎三年正月六日戊午院飯以後出小御所有目勝
御勝負以女被出賄物

○東御所

吾妻鏡脫漏云嘉祿元年七月八日丁卯辰尅二品東御所令
渡御給是御遠例既危急之故也

○東小御所

吾妻鏡云建仁元年十二月三日己卯中務入道經連參御所
申近日可歸洛之由能員爲申次參東小御所相具
子息高重左金吾對面給

○上御所

滿濟准后記云永享五年四月十八日當寺神事終日早速可
罷出由自公方被仰下來廿一日勤進申樂爲稽古明
日十九於上御所申樂ノ御爲候云々

○常御所

滿濟准后記云應永卅五年正月廿日於室町殿御所御祈可
在云々於宸殿實相院不動護摩勤修供料二千匹念誦伴
僧兩三人各着淨衣候於常御所淨土寺僧衆修護摩尊
不動歎供料二千匹念誦伴僧衆事不分明此等供料悉自
政所沙汰之

○三條御所

滿濟准后記云慶永卅五年二月十五日於三條御所爲上
御方御祈如意寺准后進大法勤仕

○黒木御所

太平記云大塔宮熊宮木寺相模ニキト御目合有ケレハ相模此
兵衛カ側ニ居寄テ今ハ何ヲカ隱シ可申アノ先達ノ御房
コソ大塔宮ニテ御座アレト云ケレハ(中略)山伏ニテ御座
サリケリ賢ソ此事申出タリケルアナ淺猿此程ノ振舞サコ
ソ尾籠ニ思召候ツラント以外ニ驚テ首ヲ地ニ着手ヲ束ネ
疊ヨリ下テ蹲居セリ俄ニ黒木ノ御所ヲ作テ宮ヲ守護シ奉
リ四方ノ山々ニ關ヲ居路ヲ切塞テ用心密シクソ見ヘタリ
ケル

○濱御所

吾妻鏡云建久三年十月九日御臺所並新誕若公自名越濱
御所入御幕府

又云建久六年七月廿九日辛亥早旦渡御濱御所御遊興終
日有御笠懸等又聞食管絃妙曲北條殿經營云々

又云正治二年十月廿一日甲辰羽林入御濱御所遠州獻
盃酒義盛朝政義村以下御家人多以候其座

○二條御所

當代記云慶長十九年十月廿五日大地震然其家屋無顛倒
京都二條御所へ五山衆彼是出仕シテ被居廣間ケルニ
天水ノ桶落タリ其砌右ノ出家衆依地震庭へ被出ケル

折境件桶ノ水彼人々ノ首下ニカ、リケル間見苦カリケル
粧也

○御殿

安土日記云三位中將殿御普請丈夫ニ被仰付假之御殿美
美敷相構

○柳營幕下

紀州發向記云于時太平山院主古溪宗陳和尚以事至柳
營幕下

○殿中

室町殿物語云公方御覽して常阿彌圓阿彌一色なともめし
て今ははや自害すへし重代の寶物なとをとりいたして火
を付よさて母公きの御方わか君なとを自害す、むへしと
仰出されければをのゝ涙にむせんで御返事もさたかな
らすされとも敵四方より殿中へ亂れ入はいかに思ふとも
甲斐あらしと慶壽院に参りてかくと申せは兼て心得たり
我身はとし老ぬれば命をしからす公方北の方思ひもよら
ぬ死をし給はん事こそかなしけれと仰られてははらく御
泪にむせひ給ふ

○政所

新式目追加云伊勢國道前三郡政所者雖經七十年依申

狀子細本所蒙御成敗一畢

○御屋形

太平記云越前足利左馬頭直義朝臣ハ鎌倉ニ打歸テ合戦ノ様ヲ申サン爲ニ將軍ノ御屋形へ被參タレハ四門空ク閉テ人モナシ

又云安東入道鎌倉殿ノ御屋形モ燒テ入道殿東勝寺へ落サセ給メト申者有ケレハサテ御屋形ノ燒跡ニハ傍輩何様腹切討死シテミユルカト尋ケレハ一人モ不見候ト答ケル

又云今一度關東ノ有様ヲ見ハヤト思成テ高野山ヲ出ケルカ宿坊ノ柱ニ

故里ニ著テ歸ルコソ悲シケレ錦ニアラヌ墨ノ衣ヲト書付テ鎌倉ニ程ナク下著シ此彼燒跡共ヲ見廻ルニ御屋形舊跡ナリシカ春ノ草茫々タリ

○屋形

天正本太平記云橋井直常入洛義詮卿ハ宜ニ從フニシカストテ面々ニ屋形ニ火ヲカケ正月十五日早旦ニ西國ヲ差テ落給ヘハ同日午尅ニ桃井郡へ入替ル

嘉良喜隨筆云當方ヲ屋形ト云コト惣シテ大名ノ宿所ヲ屋形トアリ元弘建武ノ頃天下打ツ、キテ亂タル時濃州へ行幸アリケルニ當國小島ト云所ニ行宮ヲ立ラレケリ定林寺

又云まつたくわたくしの火事にあらず神火とて火をはなつかせたまち夷そくのかたへ吹おはひさたとうかたちくりや川のしやうやけぬ

吾妻鏡云治承四年九月七日丙辰義賢者久壽二年八月於武藏國大倉館爲鎌倉源太義平被討亡ニ云々

○御守殿

見聞雜錄云信長公美濃御歸陣後同州へ早速御使者佐々權左衛門此度勢州北八郡伐取申候祝儀として御樽肴殊に勢州よりの御土産と被仰干魚百箱進上木綿千反是は御屋形の下々へ可被下由此度之儀信玄公と御縁組口口光を以ケ様に勢州早速治り申事及長陣一候は定し甲州より御加勢可參と存候故か存外不日に降參仕候由申入信玄御滿足にて此節は太郎義信玄公御守殿の跡を御破被成築地を築き高門を立昆沙門堂御建立其頃珍らしき楡皮ふきに結構御立被成て義信公口口恨可被除御下心歎云々

惟任征伐記云秀吉其翌日至三井寺着陣一日成滯留及坂本行又從諸口討捕來首悉點檢之處其中有惟任首秀吉日頃本望不堪并悦者也寔是天哉命哉明知彌平次聞屈此由惟任一類其身眷屬悉差殺殿守懸火成自害敵味方共所相感也

殿貞拘御申アリ世治御入洛ノ時はヲ屋形ト號シテ居住アルヘキヨシ勅定ニテ御タマハリアケルト云然間土岐ハコトニ子細アルニ依テ其後彼行宮ヲ土岐郡ヘヒカレ屋形ト號セラル、ナリ皇居ノ時ノ一口丸柱ナリ大名ノ宿所ヲ屋形ト云事是ヨリ始テ諸家ニ申由申傳タリ當家ニオヒテハ子細アル間可申ト云々但他家へ對シテ主仁ヲ屋形ト申義ハ無禮ナリ三管領ノ内ノ者モ主仁ヲ屋形ト他家へ對シテ申事ハ斟酌ノコトナリ

○御館

增補家忠日記云天正十四年十月廿七日大神君大坂ノ城ニ渡御有リ(中略)饗應畢テ後大神君暇ヲ告テ還給フ時ニ秀吉太刀并ニ茶壺白雲ヲ以テ大神君ニ進ラル大神君ノ家臣等ニ各屋地ヲ賜ル且ツ大神君ノ宅地ヲ聚樂ノ郭内ニ進セラレ美濃守秀長ニ仰テ御館臺所并門ヲ造ル

○館

平家物語云鶴川鶴川と云は白山の末寺なり此事詠へんとす、む老僧たれくと智尺學明室臺坊正智學音土佐阿闍梨を進みける白山三社八院の大衆ことくをこりあひ都合その勢二千餘人同承安七月九日の暮方に目代師經か館ちかうこそ押寄たれ

○玄關

武陰叢話云黒田如水手立を廻し城井彌三郎か娘を長政妻女に迎へ取扱勇入に城井を長政自身打果す城井か供の侍共切て入を長政家人栗山備後守利安井上周防守後藤又兵衛已下祝儀の裝束長上下にて長柄を玄關に下し勝負する也後藤皆々に向て古より鍵をする者多けれ共長袴の鍵は今日初なりと云いそか敷最中に能言たりと沙汰也

○御對面所

室町殿年中行事云三月三日將軍家御裝束出ニ御子御對面所ニ御供衆申次拜賀之作法如毎管領御相伴衆國持衆准國主御供衆内持御札並御盃頂戴之規式同ニ一昨年ニ云々

○御座之間

季瓊日錄云文正元年五月十六日味早看經清衆百員參候也(中略)住持者仲言和尚維那壽菊藏主看經御座之間白藤紅躑躅花之御庭南而障子被開之衆皆爲快也

○廣間

駿府記云慶長十九年甲寅八月廿六日於御廣間御能觀世左近大夫千原經政佛原大佛供養程々勤之

○大廣間

播州佐用軍記云十二月十八日大政範ハ腹卷ヲ小袖ニ脱代太

刀脇狹大廣間へ出ラレ

○寢殿

源平盛衰記云東紫線ノ疊ヲ敷キ康定ヲ居フ良久フシテ兵衛佐ノ命ニ隨テ罷向フ簾ヲ揚テ寢殿ニ高麗線ノ疊一帖敷テ兵衛佐御坐タリ軒ニ紫線ノ疊一帖敷テ康定ヲ居フ兵衛佐ハ布衣ニ着袴ヲ着セリ

吾妻鏡云治承四年十一月十二日前武衛將軍新造御亭有御移徙之儀入御寢殿之後御共輩參侍所

又云仁治元年三月七日辛未未冠將軍家若君御五十日百日也於寢殿南面有其儀前武州衣著西侍北座給云々

吾妻鏡脫漏云嘉祿元年十二月廿日丙午今日若君有御移徙之儀申一點御出中略供奉前後皆步儀也自南門令入御給於南庭中央令下御給經御車寄戶并棟廊入御寢殿階門

鹿苑院殿御元服記云同五年十一月廿二日天時御判始御議十五

御裝束御立烏帽子白長絹御直垂於寢殿十二間面自政所御吉書進之

○御臺所
新田老談記云北條氏政ハ就中大名ナル故ニ則政公ヲ掠背動モスレハ出仕ヲ申絶シ少シ心ヲ訛リテモ違背ノ本ト

鳥山記云政長大ニ怒リ汝ハ不覺ノ申ヤウカナ死ヲ一時定ルハ却テ易シ若君ヲ落シ御代ニ付申サンハ大事ナルヘシトノ玉ヒハヤ、ト被仰ケレハ平三郎ナク、座敷ヲ立參リテ舞歌ナトシケル

國府臺戰記云しかるにかの馬のいはうこゑをきこしめし上下の女房達一度に座敷を立給ひ此馬を見給ふにかなたこなたにてをおひてきなるなみたをなかしつ、物いふさうに見けれども六根ふくの物なればた、いはふはかりなり

義殘後覺云其後侍從殿切テ廻ラセ給フ程ニ侍衆出合テ四方八方戸ヲ立詰テ座敷ニ取り籠扱是ハ如何スヘキント談合區々ナリ

當代記云慶長十六年七月八日美濃國高須住徳永石見入道法印死去三ヶ年以前ヨリ腰痛座敷中モ不行歩也

○客殿
太平記云師直一人唯六間之客殿ニオハシタリ云々

○渡殿
吾妻鏡云嘉祿元年正月廿日就御方違角事前漏刻博士宣旨有申旨仍御出以前出小御所東面直被召決之忠尙親職晴賢文元等候于渡殿透廊北縁

シテ數度野心ヲ起シテ終ニハ夜軍ヲ催シ深谷ノ御臺所ヲ追散シ奉リ御家人多ク討亡シ忍深谷又ハ松山マテ小田原ヨリ支配ノ地トナシタリ

○御懸ノ南
常徳院殿御乘馬始記云管領御參りありてのち若公様御出伊勢守御懸の南より參若公様をたつみのすみの松のもとすこし南東云々

○座敷
義經記云善寫山炎辨慶はすいさんしてなけしの上にくけなるふせいしてかくたうの座敷をしはらくにらみてゐたりけり

るほし折云其後きみのちやうはまちとりをめされいせんにふえ吹たるきやうとうたとやらんは思へはみるところの有にこなたへつれてまいれ承ると申てうしわかとのを具そくし申去間牛わか殿さしきに直らせ給ふ

吾妻鏡云寛元五年二月廿三日左親衛令參給被構御座敷等云々

常照愚草云三職之内の衆何も御對面於庭上なり一人にて於御座敷御對面の人は自昔代至子今無之甲斐一人に限り三間の御厩の板の上にて懸御目也

○御所廊
吾妻鏡云寛元元年八月廿四日於御所廊被行千度御被

○廻廊
吾妻鏡脫漏云嘉祿元年五月廿二日壬午於鶴岳八幡宮而千二百口僧供養有之寅刻衆會各著座於左右廻廊并假屋等

○廊切妻
吾妻鏡云建長四年四月一日甲寅寅一點親王自關本御出未一尅出御固瀬宿中略中下馬橋東行經小町口入御相州御亭子時申親王出南面兩國司被候廊切妻地下座敷相公羽林參進上御簾三個御座間云々

○湯殿
平家物語云ゆとの、しつらいなんとして御湯ひかせ奉る中將道すからのあせいふせかりければみをきよめてうしなはんするにとまらたもふ

源平盛衰記云蚊野介湯殿尋常ニコシラヘテ御湯ヒキ給ト申ス

○染殿
吾妻鏡云建久六年七月廿八日武藏國染殿別當事被仰付

安房上野局

○御筵ノ縁

武雜記云御筵の縁之事にしきを用候うらはす、しのうらひろさ不定武家にはうき織物御紋にはつうきり惣別へりに織物用候事本儀候

○大床

武蔭叢話云織田城之助信忠卿は仁科五郎信盛の籠り候高遠の城へ御取詰一時に攻給ふ云々大度間は七間に十二間の家也是へ取籠り働故寄手も攻あくむ(中略)扱廣間に二間の大床有五郎殿此床に上り御自害云々

○納殿

義經記云^{書寫山炎}人もゆるささりけるにいつあんないはしらね共おさめ殿につとはしり入

○御厩納殿

吾妻鏡云文治四年七月十日甲辰若公^{七歳}始令着御甲之給(中略)小笠原彌太郎千葉五郎比企四郎等候御馬左右二二度打廻南庭一下御今度足立右馬允遠元奉抱之甲已下解脫親家御物具御馬入御厩納殿等

○御亭

吾妻鏡云貞應二年七月廿六日二位家新造御亭^{御堂御移}

成氏年中行事云正月朔日管領被官武州守護代子或ハ孫或ハ兄弟等御車寄ノ立砂ノ前ニ御馬御鞍ヲオキテ引キ立云云

○車排

吾妻鏡云寶治元年六月五日丙戌秦村今更乍^{仰天}令家子郎從等防戦之處橋薩摩余一公員者自兼日懸意於先登^{潛入}車排之内^宿于秦村近邊荒屋^付時聲進寄云云秦村既及^{攻戦}之上無所^于被^有仰云々

○下車所

吾妻鏡云正嘉二年六月四日壬午今日勝長壽院供養也已尅將軍家渡御(中略)次於^{勝長壽院大門}稅^{御車}下御土御門中納言寄^{御簾}花山院宰相中將候^{御傍}中務權大輔家氏役^{御榻}左近大夫將監公時進^{御沓}黃門取^{御裾}越後守實時役^{御劔}去年大慈寺供養之時^{雲客}等參^會御下車所^雖先例^今度被^行其儀^{之間}兩卿之外不^參此所云々

○御厩

保元物語云去程にたいりよりた、いまうつてのむかふをは左大臣殿夢にもおほしめしよらせたまはすむしや所ちかひさをめしてたいりにはつわものを此方へむけらる、

徒也被^略水火^{陰陽}大允親職候^{反閉}云々

○八條亭

平家物語云^{西光被}同廿九日の小夜深かたに入道相國の西八條の亭に行向て行綱も申へき事有て是まで參て候はんと案内をいひ入たりければ入道常にも參らぬ者の參したるは何事そあれきけとて主馬判官盛國を出されたり全く人傳には申間敷事なりと云間さらはとて入道自中門の廊へそ出られたる

○里亭

吾妻鏡云仁治二年七月廿二日御臺所渡^{御石山局里亭}

○鎌倉御亭

吾妻鏡云治承四年十月十五日甲午武衛始入^{御鎌倉御亭}此間爲^{景義}奉行^所令^{修理}也

○御輿寄

吾妻鏡云弘長元年二月七日己亥將軍家御精進中參籠人可^{供奉}之由^{象日}雖^有其定^{人數}不足之間被^催加之云々^{供奉}人淨衣^{武藏前司朝直}共侍淨衣立局朝子同^{中問淨衣折鳥朝子}

○車寄

吾妻鏡云安貞二年二月三日將軍家御^參鶴岡八幡宮^令著^{御淨衣}給^先散位晴賢^參廊車寄戶

か又是よりの兵をまたる、かきつとうか、ふてさんせよとて御馬屋の馬を賜りけりちかひさ鞍おくにおよはすひたのつてまかり出ぬ

吾妻鏡云文治五年六月卅日戊午大庭平太景能者爲^{武家}古老^{兵法}存^{故實}之間故以被^召出之^被仰^合與州征伐事^曰此事^鏡天聽^{之處}于^今無^{勅許}怒召^聚御家人^爲之如何可^計申^者景能不^及思案^申云軍中聞^{將軍}之令^不聞^{天子}之詔^(中略)早可^令發向^給者申狀頗御威利賜^{御厩}御馬

又云建久元年四月七日庚寅被^遣御書於下河邊庄司行平^有其召^是依^可爲^若君御弓師^也若君漸御成人之間令^慣弓馬之藝^給外不^可有^他事^而可^奉加^扶持^之輩諸家雖^有其數^行平適爲^數代將軍後胤^也隨而弓箭達者也仍及^此御沙汰^早可^參上^之趣被^載之云々加^之稱^可親^之被^遣御厩馬云々

頼印僧正繪詞云同廿日武衛御陣ノ西ニ野田入道等忠陣中小屋ヨリ俄ニ出火シテ猛風黒烟ヲ延テ既御厩ニ及フ季瓊日錄云寬正六年九月廿八日味早共御相伴諸老赴^歸洛^之途也於^宇治旅店^喫手飯^一覽^平等院大鐘^釣殿宴所御厩三間御共衆厩屋九四十間黒木造之橋上望^{四面}

山秀川流萬又波瀾勢海也

岡本記云惣して北むきにむまやをつくる事なかれ馬は天
竺と唐土のさかひのふていに一はんにさるか馬をひきて
きたりまいらせしそのゆへなりしゆこ神の心に用なり
尺素往來云大路片伺之駒雖難立御用候此内多久佐
里之本故兩三匹候須彌足井邊并肢爪地拘尾持以下生得神
妙之馬候雖然依不_レ宜於渡水_ニ態不_レ下_レ之候身又相馬
羞_ニ於良樂_ニ欲備_ニ三長_ニ短之勢_ニ雖_レ非_レ八駿八匹之體_ニ
先暫即_ニ水草之養_ニ可_レ被_レ駢_ニ御厩之櫃_ニ候
會津陣物語云大御所様ニモ中々御威也玄關前ニ松葉菅ノ
御馬屋出來ル

松陰私語目錄云松陰翁利根河先陣之賞御厩御馬宿所へ拜
領之事

○馬立

武蔭叢話云諸大名へ將軍家御成是有に景勝館へ御成公方
御馬立杉垣にて假に建其前へ打取にしたる伊達家の看經
幕九曜星の幕打せられ候

○倉原倉原 校倉

倭名類聚抄云倉原唐韻云倉圓曰_レ因去困反渠殖反兼名苑
云園一云園力稔及_久流一名_久與奈一云_久伊奈倉也釋名云倉也

○新府

甲亂記云_{武田相模}守最後條既明日新府ヲ可_レ被_レ引退ニ儀定シケル
時勝頼相模守ヲ喚玉イテ宣ケルハ年來信州之儀ヲ信豐へ
可_レ令_ニ讓與_ニ云々

○評定所

吾妻鏡云寬喜三年十月廿七日相州武州參評定所給攝津
守師負殿駿河前司義村隠岐入道行西出羽前司家長民部大
夫入道行然加賀守康俊玄蕃允康連等出仕

○奉行所

北條五代記云_{兵法}諸人に見せんと放言し御奉行所へ此
儀を申上則大はしへ兩人出たり

室町殿物語云_{光範}手柄なるあるとき天王寺の邊に至り剛の
狼藉もの主従二人とりこもりてなに者にても剛強のさふ
らひあらはよつて仕留て高名にせよといひてたてこもり
ける(中略)さて高橋は兩こしとも人にたせわか身か
丸こしにて裏にまはりて戸をたきければ内よりもなに
ものそといふくるしからぬものなり奉行所よりもつかひ
にまかれり先あけたまへと心しつかにかにもをしつ
めていひけれ

○役所

釋名云倉七岡反甲倉古不 校倉 阿世 俗用之今按本文並未
詳載_{穀物}也

吾妻鏡云文治五年八月廿二日己酉申刻著_{御子}泰衡平泉
館主者已透電家者又化_烟數町之縁邊寂莫而無_人累跡
之郭内彌滅而有_地只颯々秋風雖_入幕之響_{蕭々}夜雨
不_聞打_窓之聲_{但當}于坤角_有一字倉廩_通餘燭之
難_遣葛西三郎清重小栗十郎重成等_令見_之給沈紫檀
以下唐木厨子數脚在_之

○寶藏

吾妻鏡云文治四年四月廿日丙戌酉刻親能飛脚自_{京都}參
著去十三日六條殿燒亡云々寶藏并御倉雖_遁災於_{長講}
堂_者災本尊奉_{取出}之云々

○額突

長門本平家物語云_{兼隆}内へせめ入てみれば額突の前に
火をこしたり
源平盛衰記云ヤカテ内へ責入テ寢殿ヲ指ノソイテミレハ
額突アリ燈火白クカキタテ、障子ヲ細目ニアケテ太刀ノ
帯取り五寸計引殘セリ見レハ兼隆紺ノ小袖ニ上腹卷着テ
太刀ヲ額ニ宛テ膝付居テ敵ツト入ラハハツタト切ラント
ヲホシクテ待懸タリ

○赤坂城

太平記云_{東國ノ}勢共案ニ相違シテイヤイヤ此城ノ
爲體一日二日ニハ落マシカリケルソ暫陣々ヲ取テ役所ヲ
構ヘ手分ヲシテ合戦ヲ致セトテ攻口少シ引退キ馬ノ鞍ヲ
下シ物具ヲ脱テ皆帷幕ノ中ニシ休居タリケル

成氏年中行事云御評定所ハ十五間管領之役所也

播州佐用軍記云_{山合}横山カ兵敵ノ三所ノ役所へ押入鎗
長刀ノ鋒ヲ双テ吶聲ヲ上テ撞懸ケルニ敵忽敗軍シテ崩出
シト揉合々々城兵撞蒐ケルニ大勢突ラレ半ハ共ニ押倒ス
云々

○記録所

吾妻鏡云建保四年十二月八日伊賀國壬生野庄者爲_{春日}
社領_而宇都宮彌二郎朝綱入道稱_{地頭}押領之由與福寺
住侶僧信實所_{參訴}也今日有_{其沙汰}不能_{關東}御成
敗_於記録所_被遂_{對決}可_宜之由被_{仰下}

百鍊抄云寬元三年四月十三日丁丑今日於_{殿下}被_行御
ト(中略)今日於_{記録所}被_勒定一年中公事用途錢貨
等事云々
太平記云訴訟ノ人出來ノ時若下情上ニ達セサランコトモ
ヤアラントテ記録所へ出御成テ直ニ訴ヲ聞召

○公文所

源平盛衰記云右ノ大臣兼實計申サセ給ケルハ官廳ハ凡人ニトラハ公文所也

○シラス

るほし折云しんてん俄にしんとうしてしろきをいかんとてるほしきんのしやくを御持あり忝も八幡はゆるさいてさせたまひてしらすにかしこまりいかなる御事候そわうは十膳かみは九せん九せんのかみの神事を十膳の御身としてつとめさせたまへはいよく五すいをもうなり候

○代官所

新田由良家傳記云百姓御仕置御法度之條毎年種もみむきなど無用は御城の御藏へ差上其時分に代官所へ斷可申請付云々
慶長見聞記云極月ノ初攝州茨木へ御鷹野ニ御出彼所ノ城御座候川尻肥前守代官所故肥州御馳走申上ル

○御厨

吾妻鏡云文治三年十月十三日庚辰依太神宮神人等訴被召放島山次郎重忠所領伊勢國沼田御厨被充行吉見次郎頼綱仍於重忠者雖召禁其身申不知子細之由頗有陳謝歎之間厚免已畢至當御厨者賜他人之旨被仰宮之上云々

○臺所

めか何事をか奏すへかんなるそとはや馬より取てひきおとしちうにくつて西八條殿へさけてまいる日の始より根元與力の者なりければ殊につよう驚て御坪の内にもひつすへたる
松隣夜話云中澤供ノモノ五十餘人御坪ノ内ニオイテ切害ス

○鞠御壺

吾妻鏡云寛元二年三月卅日若君御不例醫師以長參入事終於鞠御壺以長賜御劍御馬
又云正嘉二年三月十日庚申鶴岡三月會舞童等依召參御所於鞠御壺施舞曲

○石壺

吾妻鏡云元暦元年正月廿七日遠江守義定蒲冠者範頼源九郎義經一條次郎忠頼等飛脚參着鎌倉去廿日途合戰誅義仲並伴黨之由申之三人使者皆依召參北面石壺聞食巨細

○大庭

吾妻鏡云元暦元年八月廿八日新造公文所被立門安藝介大夫入道足立右馬允筑前三郎等參集大庭平太景能經營勸酒於此衆

吾妻鏡云寛元四年十二月廿八日癸丑今追入之者迹參幕府臺所敵人追付之内參入云々

○絲所

又云建長八年正月十四日奥州被參臺所徒然草云紙燭さしてくまをもとめし程に臺所の棚に小かはらけにみそのすこしつきたるを見出てこれをもとめ得てさふらふと申しかは事たりなんとてこ、ろよく敷獻に及て興にいられけり
早雲寺殿廿ヶ條云ゆふへには臺所中居の火の廻り我とみまはりかたく申付

○御坪

吾妻鏡云建久六年七月廿八日武藏國染殿別當事被仰付安房上野局糸所別當事近衛局奉之云々

○御坪

平家物語云西光被去程に近江中將入道蓮淨法勝寺執行俊寛僧都山城守基兼式部大夫正綱平判官康頼宗判官信房新平判官資行もとらはれてこそ出来たれ西光法師このよしを聞て我身の上とやおもひけん鞭を打て院の御所へまいる六波羅の兵とも道にて行相西八條殿よりめさる、そきつと參れといひければこれは奏すへき事有て院の御所へまいる態てこそ歸りまいらめといひければにつくひ入道

義經記云かたきの捨たる松明ウチフリ大にははしり出云々

武家名目抄稿第百八册

塙檢校保己一編

居處部附錄二

○奥ノ殿

初井日記云當家御使者ナトノ參候時モ元就ノ御代ニハ案内モナク直ニ奥ノ殿ニ通り萬端ヲ申入候逗留ノ内ハ晝夜トモニ御相伴ニツメ候テ上方ノ事當家旗下ノ國々マテノ事委細ニ聞カレ密談トモ候去ホトニ兩家ノ人ハ一體ニテ隔ハナク候

○御帳臺

吾妻鏡云承久元年二月十五日二品御帳帳内鳥飛入義經記云ふしたりけるちやうたいへつと入腹巻取てきもと、りときみたして太刀をぬき

○御くわんすのま

女房故實云わねの御所のはきことは御所さまのこしらふたち御れんたいそのほか御くわんすのまきやうのま御ゆとのうへまては御なかつちはきまいらせ候

○留守所

○外侍

義經記云へいせんしむさしういなくそのたちに入てとさふらひのえんのきはをとりてうちをさしのそき見ければくわんけんた、今さかりなり

○小侍

吾妻鏡云仁治二年十二月八日小侍所番帳更被改之每番塔諸事藝能之者一人必被加之

又云同十二月廿一日天晴將軍家若君御前御乘馬始也及晩於小侍小庭有之此

○遠侍

義經記云遠さふらひにきり入てみれとも人もなし中のみまに入て見れ共人もなし

成氏年中行事云殿中ノ朝ノ遠侍ニハ高盛物ニアリニハ波葉一ニハ塔也

○西侍

吾妻鏡云文治五年四月十八日北條殿三男十五於御所被加之首服乗燭之程於西侍有之此儀

又云建保三年八月廿一日戊申已冠鷲集御所西侍之上又云寛元二年四月廿一日將軍家若君御元服也織部正晴賢朝臣持參日時勅文前美濃守親美朝臣於西侍取之經

吾妻鏡云文治五年十月廿二日戊申可遂出羽國地檢之由被仰置留守所御進發之後地頭等悉申云地檢之間可頼間田之旨留守張行之由云々

○殿守

氏郷記云蒲田ノ城主日置大膳亮トテ大剛ノ人瀧川ヲ見次ン爲千金騎ニテ馳來ル(中略)殿守ヲハ瀧川被持シカハ門矢倉ヲハ日置被固ケリ

見聞雜錄云堀久太郎秀政は山崎表天王山堀尾茂助と陣取て山之手一番合戦に打勝十三日夕方明智か惣敗軍を見濟し秀吉本陣へ乗寄最早當表は氣遣なし某は安土へ走付て敵を追落し御丹情を被盡し殿守を不被燒様ニ可致と有し此節直に急きなは殿守をば燒間敷物を云々

○侍

長門本平家物語云本三位中將關むねもちもとの侍に歸てともしのものともにいひあはせて云々

吾妻鏡云建曆二年七月九日今日御所侍被破却之被寄附壽福寺即可被新造云々

○侍ノ縁

義經記云鬼一法御さうしきし入て見給へは侍のえんのきはに十七八斗なる童一人た、すみて有

廊根妻戸入寢殿西面妻戸置御座前將軍家覽之

○厩侍

吾妻鏡云寛元五年六月一日令郎從友野太郎内者也窺館内之處所積置子厩侍之鎧唐櫃假令百三三十合歟之由達子氏信云々

○御會所

滿濟准后記云正長二年三月九日今夜室町殿様御元服云々可參御加持之由大館中務少輔參申之間經宸殿南大床參御會所御東御用所也

又云同年九月十六日今日室町殿様日吉御參詣御加持ニ參畢云々於御會所御加持有之

○祈禱所

太平記云天龍寺將軍モ左兵衛督モ此儀尤トソ被甘心ケルサレハ頼テ夢想國師ヲ開山トシ一寺ヲ可被建立トテ龜山殿ノ舊跡ヲ點シ安藝周防ヲ料圖ニ被寄天龍寺ヲ被作ケル此寺五山第二ノ列ニ至リシカハ惣シテハ公家ノ勅願寺別シテハ武家ノ祈禱所トテ一千人ノ僧衆ヲ被置ケル

○新造御壇所

滿濟准后記云應永卅五年八月十日今日御所様渡御壇所

新造壇所初光儀之間旁爲_レ祝_ニ申萬歲_ニ嘉壽益一枚糴子一
端御料紙等進_レ之舉自_ニ御所様_一以_ニ色兵部少輔_ニ五千疋
御折紙拜_ニ領之_一新造壇所祝着儀候不_ニ存寄_ニ御沙汰_ニ次第
祝着過分此事也十四日月次北斗法始行伴僧六口供料二千
疋

○對屋

吾妻鏡云承久元年十二月十一日有_ニ對屋_一以下作事定_ニ

○御作事之間

吾妻鏡云文治四年七月十一日乙巳六條殿御作事_ニ品御知
行國役者爲_ニ親能奉行_一以_ニ大工國時_一欲_レ被_ニ造進_一遠江國
所役事被_レ下_ニ御教書_一今日到來則被_レ付_ニ彼國司義定_一云々
六條殿御作事之間六條面築垣一町門等可_レ被_ニ造進_一者依_ニ
院御氣色_一執達如_レ件六月廿七日遠江守殿權右中辨

○弓場

吾妻鏡云文治五年正月三日今日爲_ニ良辰_一之故可_レ有_ニ御弓
始_一之由被_レ仰出_ニ先召_一下河邊庄可行平_ニ取_ニ弓箭_一進_ニ寄弓
場_一無_ニ左右_一躰_ニ露于前方_一刷_ニ衣文_一

○庭の坐

梅松論云高時以上九代皆以將軍家の御後見として政務を
申行ひ天下を治め武藏相模兩國の守をもて職として一族
院飯ユタカニシテ云々

○萱葺屋

吾妻鏡云治承四年十月廿五日入_ニ御松田御亭_一此所中村庄
司奉_レ仰日來所_レ加_ニ修理_一也侍廿五箇萱葺屋也
庭訓往來云寢殿者厚萱葺板庇廊渡殿者裏板葺侍御厩會所
圍爐裏之間學問所公文處膳所臺所費殿局部屋四阿屋棧敷
健兒所ハ萱葺葺可_ニ支度_一也

○健兒所

庭訓往來云局部屋四阿屋棧敷健兒所は萱葺葺可_ニ支度_一也

○四阿

倭名類聚抄云四阿唐令云宮殿皆四阿和名阿豆萬夜

義經記云伊勢三郎義經のひき入てあつまや一つ有情あるす
みかとおほしくて竹のすいかきさまの板戸をたてた

道照愚草云東屋四阿とかきてあつまやとよむ也西下を書
てまやとよめる四阿は御所造りに四方に軒ありてあまた

れ四方へをつるなり催馬樂の歌に

あつまやのまやのあまりのあまり、き我立ぬれぬこの

とひらかせ

○平屋

○平屋

の中の器用を撰ひ著して御下文下知等を將軍の仰らる、
に依て申沙汰しける元三之院飯弓場始庭の坐買馬隨兵以
下の所役の輩諸侍ともに對しては傍輩の義を存す昇進に
をいては家督を德崇と號す

○馬場棧敷

吾妻鏡云建曆元年八月十六日相州令_ニ參宮_一給將軍家爲_ニ
御見物_一御_ニ出馬場棧敷_一

又云延應元年八月十六日癸丑將軍家爲_レ覽_ニ流鑪馬_一出_ニ御
馬場御棧敷_一

○馬サクリ

太平記云上杉山流時シモコソアレ雷交ニ降時雨面モ打カ
如クニテ僅ニ細キ田ノ面ノ道上ハ氷レル馬サクリ踏ハ深
泥膝ニアカル糞モナク笠モ著サレハ膚マテヌレ徹リ云々

○檜皮葺屋

吾妻鏡云正嘉二年五月八日丁巳尾張前司山庄被_レ新_ニ造檜
皮葺_一以下數字_ニ五月營作之例雖_レ無_レ之將軍家依_レ可_レ有_ニ入
御_ニ終_一其功_一

○萱屋

源平盛衰記云其日兵衛佐館へト向ハヌ五間ノ萱屋ヲ理テ
院飯ユタカニシテ云々

平家物語云き、わけし給へりとてわらひけるらくかきと
も多かりけるみやこの大將をはむねもりといひうつての
大將をこんのすけといふあひた平家をひらやによせて

ひらやなるむねもりいかにさはくらんはしらとたのむ
すけをおとして

○母屋

長門本平家物語云本三位中將_{東下向の條}兵衛佐は(中略)もやの間に
東のはしらのそとにさし出られたり

○弘庇

義經記云判官かねけさたてのうしろにあて、しゆてん
のたる木に取つきちぶつたうのひろひさしにとひ入

○簀子

吾妻鏡云仁治二年八月十五日鶴岡放生會也將軍家御出之
期兵庫頭取_ニ御劔_一欲_レ授_ニ役人上總式部丞時秀_一之處御劔
被_ニ落簀子之上_一是非_ニ兩人之失禮_一時之恠異也

○竹のすのこ

常徳院殿御乘馬始記云松の庭にてめすなり若公様御ちや
うけんを召て南の竹すのこのとをりの御わき戸より御出
ありて西の御ゑんのうへに御立あり其時へい中門より管
領右馬頭殿其外役者參云々

○竹のすのこ

○坊舎

平家物語云鶴川合戦條當國の在廳等一千餘人もよほしあつめて鶴川にをしよせて坊舎一字ものこさず皆焼はらふ鶴川と云は白山の末寺なり此事訴へんとす、む老僧たれたれを智尺學明室臺坊正智學音土佐阿闍梨を進みける白山三社八院の大衆ことくをこりあひ都合その勢二千餘人同七月九日の暮方に目代師經か館ちかうこそ押寄たれ

に候て河原者作之なり是こしよせの妻戸たるへき也
○切妻戸
吾妻鏡云康元二年二月廿六日奥州起待坐經廊西縁被候切妻戸庇

○くすや

大友與廢記云高森伊豫守志賀通押に加勢所望之事おなしく軍條伊豫守かねて用意の火矢たいまつなけ火矢を以て十二月廿九日のあかつき忍より同時にとつと焼たつる城中多分くすやなればおひたたく云々

○妻戸

武雜記云妻戸の間出入事御沙汰は不承候但つねに出入は有間敷候急度したる時は妻戸の間より御出入候間さやうの時御立砂をと立て平人出入斟酌可然候
奉公覺悟記云妻戸の出入も常に無之儀候此前にたてすなあるへし殿中は申に及はすわたくし御成にも其享妻戸在之者其沓ぬきより間半ほととせて雨おちのか、らぬ程に立すな可有之妻戸の柱の通也的の敷つかより少大

麗縁の疊一帖敷て簾をあけられたり廣窓に紫縁の疊を一帖敷て康定を居させ候ぬ
○居所
吾妻鏡云治承四年八月四日甲申散位平兼隆前延慶號者伊豆國流人也依父和泉守信兼之訴配于當國山木郷漸歷三年所之後假平相國禪門之權輝威於郡郷是本自依爲平家一流氏族也然間且爲國敵且令挿意趣給之故先試可被誅兼隆也而伴居所爲要害之地前途後路共以可令煩人馬之間令圖繪彼地形爲得其意兼日密々被遣邦道々々者洛陽放遊客也有因縁盛長依舉申候武衛而求事之次向兼隆之館酒宴郭曲之際兼隆入與數日逗留之間如思至山川村里悉以令圖繪訖今日歸參云々

○庄庫

吾妻鏡云文治四年六月十一日越後國大面御庄御年貢事右件御庄文治元二兩年分述上領家中納言入道之旨沙汰人所申上之由若有御不審者進雜掌於寺家可申散狀歟去年分早米者進納領家後米者或雖令積載未承着否或令納置庄庫

○道場
松陰私語目錄云五月十三日於藤澤道場天用御生涯之事

○木屋

吾妻鏡云文治元年三月十八日於南御堂番匠一人字歌誤能者而自木屋上落地然而其身無殊損

○第宅
臥雲日伴錄云享德四年正月五日晏芳端西堂來中略又云大友宅畔以茅茨敷以弁淳朴可喜也
又云寬正四年三月五日林光院主坐華來因話法苑寺殿雪溪久佐鹿苑相公一日聞人蒙罪而第宅被毀而歎息入府

○廣窓

長門本平家物語云賴朝將軍宣旨の條兵衛佐の命に隨て安貞寢殿へ高

○廣窓
長門本平家物語云賴朝將軍宣旨の條兵衛佐の命に隨て安貞寢殿へ高

○義經記

義經記云土佐房義經の討喜三太參れとめされければ南面のくつぬきに畏つて候ける

○義經記
義經記云土佐房義經の討喜三太參れとめされければ南面のくつぬきに畏つて候ける

與相公對按之次從客曰在古則遺罪人不_レ必毀其宅乎
○屋鋪

武林往昔日記云或人の語りけるは松平三河守源家康公遠
州濱松に御座有ける頃太平記評書をよませて御聞あるに
長崎新左衛門尉高資と云もの奉行職をしけるに賄賂にふ
けり不直にして人の屋鋪割知行分當の次第使の遠近普請
の割符公事以下音物を取おのれかよしみ有ものには是を
能しおのれに近付さるものには主君の御爲なりとなら
へて是を惡しあてかひ事をすますによつて人の恨み絶る
事なく云々

松原自休手録云戸田少弼ハ廣忠ノ舅ナレハ家康ニハ繼祖
父也從田原駿府へ送ラセ給ヘト被_レ頼ケレハ息ノ五郎
兵衛織田彈正忠へ密通シテ於鹽見坂奪取之乗舟至
熱田籠置加藤屋敷被_レ送_二幾春秋_一
續武家閑談云秀頼五歳の時伏見より行列にて参内あり太
閤は二三日前入浴し中立賣の最上義光の屋敷に住し参内
の日迎ながら出給ふ

當代記云慶長十六年正月三日江戸奥州會津浦生飛彈守屋
形燒亡齋冬月追_二將軍_一奉_レ入亭主正月二日會津被_レ下於
路次聞_二此事_一播磨國主池田三左衛門屋敷類火但門除_二火_一

可_レ爲_二早朝_一之間任_二先例_一於_二馬場借屋邊_一可_レ有_二大衆之
参向_一者也

關八州古戦録云_{武田勝頼}信長信州諏訪郡高木ヲ經テ甲州臺
ヶ原ニ着馬シ玉ヒケレハ瀧川一益俄ナル經營ナカラ新ニ
假屋ヲシツラヒ置テ信長ヲ請シ入近習伽ノ面々マテ休憩
ヲナサシメケリ

賀越園評記云_{於東庄大窪}此外伴ノ面々或ハ近所ノ大名見物
ノタメ又ハ禮儀ノタメニ群集スル者其數幾ソヤ義景ハ則
假屋へ入セ給ヒテソ裝束ナサレケル假屋ノ内ニハ磨キ付
ノ屏風一雙立ラレケリ

○御旅館

吾妻鏡云文治五年八月廿六日癸丑日出之程匹夫一人推
參御旅館邊_一投_二入一封狀_一逐電不_レ知_二行方_一諸人恠_レ之召
覽之_一處表書云進上鎌倉殿_侍泰衡敬白云々

○宿所

奥羽永慶軍記云_{最上義光}義光昨日山形ニ來リタマヘテ今
度ノ役人安食大和守ヲ召シ騎馬帳ヲ見タマヘハ都合三千
七百二十騎ノ有ケル義光此騎馬ハ皆々山形ニ相詰ケルカ
ト問タマフ安食承リ一騎モ不_レ殘相詰候ト申ス義光聞タ
マヒテヨシ々々天童ニ出テ汰ルニ不_レ及騎馬帳見テモ同

難_二屋敷何處相也_一

又云同年七月三日江戸井伊兵部少輔屋敷ヨリ火出榊原遠
江屋布及_二類火_一

○兵庫屋布

松隣夜話云先ツ近邊ナリトテ上原兵庫侍小路ニ押寄セ是
モ同ク火ヲ掛ケ兩方ヨリ亂レ入ル兵庫屋布ニハ近所ニ燒
亡アリ馳合ントヒシメク

○假屋

平家物語云_{坂落}大方人のしわざとはみえず只鬼神の所爲
と見えし落しもはてぬに関をとつとそ作りける三千餘
騎が聲なれとも山ひこに答へて十萬餘騎とそきこえける
村上判官代康國か手より火を出す平家の屋形假屋を皆燒
拂ふ

又云_{老馬}此山の手と申は一の谷の後越の麓也通盛卿は
能登殿の假屋へ北方迎へ給て最後の名殘惜まれけり
大友興廢記云_{宗廟上}直に美濃守殿へ参り候おりふし御普
請之假屋に御座候ことの外御とりもち被_レ成候御かけな
とすへん御す、め候とりのことくにまかり立候

日吉社室町殿參詣記云應永元年九月八日社頭三塔集會議
日可_レ早爲_二寺家沙汰_一被_レ相_二觸_一三塔事_一右御社參來十一日

前ナリ皆々歸スヘシト云レケレハ爰ヲ晴ト出立シ者共己
己カ宿所ニソ歸リケル所々ヨリ來ル見物衆モ皆々歸リケ
リ義光父子三人其外一門モ假屋夥ク幔幕ヲ打セケルカ空
クツヤミニケル

○小屋

武蔭叢話云天正六年五月三日の合戦にて長瀬小右衛門黒
母衣に銀の牛の舌のたしにて勝曼院にて鎧を合る後門跡
降參し大坂の城衆寄手こや見物に出長瀬か小屋印に銀の
牛の舌の黒母衣有を見付日本一の鎧合たる母衣爰に有と
て小屋前に多参りて見たると也

○荒屋小アカリノ坐

武田射禮日記云小アカリノ座_{トモ云付}ヘキ様布草ヲ四ノ
マ、布テセトヲリノ方ヲ廻リテ坐スヘシ逗留アレハ杵ヲ
ヌク也然ラスハヌクヘカラス杵ハクトキモ抜ニモ左ヲ先
ニスヘシ

佐竹宗三聞書云荒坐を敷事は始まる前に弓場の一方に
六人ながら敷皮四折のま、しかる、也其時奉行より相手
又立所を定むる也同雨ふる時は打板をき所を見合て置て
退也さて敷皮を打板に打かけて板の上にて敷塚の方と的
の方とを如_レ常見て少つ、引合てをき座すへし

○あらた

新田由良家傳記云貞氏公成年正月二日の夜御夢にあらたをかへすと御覽被成圓福寺和尚に御物語今夜如斯の夢を見申候もはや主をかへし本領安堵仕事も難叶候田夫に罷成候體の夢にて候間ちからなきと御咄有之は和尚被申候一段目出度御夢あら田と書て新田とよみ申候追付御本領安堵うたかひ間有敷と被申候それにより云々

○番所

吾妻鏡云正嘉元年五月廿二日丙子安房又太郎加小侍番帳一日來者爲非番所令著到也

毛利家記云秀元卿ハ先手ノ者甲州へ見廻玉ントテ御出有シニ加藤左典厩モ頓テ御跡ヨリ見ヘ玉シ甲州ハ未陣屋ヲカケ仕廻玉ハテ幕ニテマハリヲカコミ番處三間程引退テ有シ

信玄家法云近習之輩於子番所假雖爲留主世間之是非并高聲可令停止之

藤葉榮表記云城中夜討忍ノ者城内へ心ノ儘ニ忍ヒ入ル番所ヨリ夜討有ト告ケレハ城中ヲ守護シ殘留タル者トモ周章騒動シ定テ敵亂入シ暫ク防キ支度セヨ門ヲ堅閉續松ヲ出セト留リ廻ケレトモ暗ノ夜ナリケレハ何レヲ敵何レヲ御

武家名目抄稿第百九册

稿檢校保己一編

居處部附錄三

○移宅

○土木之事

○護摩堂

○懺法堂

○紫宸殿

○公卿問 天上問

○天鏡閣

○泉殿

○看雪亭

臥雲日件錄云文安五年八月十九日最一檢校來留而宿(中略)予又問鹿苑院殿於此移宅之事曰創基恐在於泉州合戰之前一兩年歟初命諸大名之士役于土木獨大内義弘曰吾士以言矢爲業而已不可役于土木即義弘深逆釣旨之濫賜也經營未畢時令考其費則二十八萬貫也然則至于畢功則殆百萬貫乎隆樓傑閣畫棟雕梁東西南

方トモ不レ知敵モ味方モ亂レ合處ニ續松ヲ數多指出ス云

○遠見番所

新田老談記云小金井四郎右衛門ハ敵ヲ思ノ儘ニ麓迄追下シ人馬ノ谷へ落テ木石ニ當テ死タルヲ見テ(中略)小金井采女ヲ坂井ニ殘シ置本城ニ歸テ御母公橫瀨殿鳥山淨山へ合戦ノ次第ヲ被申宣ケレハ何モ悦喜不レ斜夫ヨリ遠見番所へ登テ四方ノ實口ノ様體ヲ見物アル處ニ熊野ノ敵充滿シテ合戦最中ト見ルヤ横鎗ヲ入テ敵一人モ不レ逃可シ討留トテ新田口ノ人數引連寺ケ入ノ坂中陣備後陣備ヲ前ニ當テ時ノ聲ヲ上タリケリ

北基布星羅如自天降如從地涌故法雲寺殿雪溪居士咨鹿苑院殿曰此新第不可以換西方極樂也天下于今爲三口實焉今時西南有護摩堂東有懺法堂今爲等持紫寺宗鏡堂者是也懺法堂東有紫宸殿今爲南禪院者是也紫宸殿東有公卿問又謂之天上問今爲建仁方丈者是也舍利殿北有天鏡閣復道與舍利殿相通往來者似步虛閣北有泉殿々々今則廢矣閣曾爲南禪方丈閣而去歲回祿爲灰燼可惜又會處東北山有看雪亭內安七佛藥師像々々今在法水院耳亭則无焉云々

○本丸

鏡輪軍記云城の大將長野右近進業盛廓外を責破られ本丸に引籠猶も嚴しく防けり
秀頼事記云秀頼公御出馬可有ト云處ニ速水甲斐守御前ニ出テ味方敗軍ト見候御出陣有タレハトテ大軍ノ崩カカリ大敵ヲ受テ叶ヘシトモ不存只御馬ヲ入ラレ御本丸計ヲ御堅有テ時至テハ御腹ヲ可被召ト申シケレハ此儀尤ト一同シテ千疊敷へ入給ヒケリ
又云伏見在番本丸鳥井彦右衛門西丸内藤彌右衛門息小一郎大手門松平主殿

○西ノ丸

○二ノ丸
○三ノ丸

大友興廢記云生の松原林慶譽ある大かうの者なればとつて返し和泉守を一二町追立る雪可左の手先より横鎧を入れて林慶を中にとわかこみた、かへは終に和泉守か手にて林慶を討捕其威に乗て後陣詰寄追討付込にして高祖の城二三の丸までせめ入焼立勝ときをあけて生の松原に引取云云

播州佐用軍記云政範此城ト申スハ東向ニ大堀一重有テ橋ヲ渡シ橋ノ南北ニ矢倉有追手小山崎ト云ヒ南方二ノ丸谷口マテノ眞篋嶽ト云フ大雪櫃巖潤切岑ニテ城際エナタレタリ

初井日記云龜山ノ城ヲ乘返シ東方ヲ一面ニト、ノへ候コト肝要ニ候トテ遠江守殿ヲ大將トシテ初井越中守教業赤井悪右衛門尉同名次郎左衛門景光江田兵庫頭荒木山城守酒井佐渡等ノ宗徒ノ人々押寄候テ息ヲモ績セスモ立モミ立攻テ候(中略)明智モコラへ兼テ討テ出候處ヲ諭止候テ大方ニ討取テ候信長カ方へ注進ヲ急ニ致スニヨリテ帝都ヲコヘテ後詰ヲ申付テ候ヲコレヲモ夥敷討取テ候其後急ニ強攻ヲシテ三ノ丸ヲモ出丸ヲモ乗取テ候二ノ丸モ半

被申云々

當代記云慶長十八年三月五日駿府於三ノ丸常陸主能シ給五番常陸主翁脇ノ能末ノ祝言觀世太夫ハ慶長十五年庚戌蒙勅當ニ去年召直駿府ニ祗候

又云慶長十九年四月十四十五兩日駿府於三ノ丸能アリ今春八郎雖ニ相煩一日ニ二番ツ、仕其外少進法印本願寺衆也

○出丸

關八州古戦録云南方金山由良ノ出丸ニハ鳥山出雲入道同主膳正金谷因幡守築井伊織金井田傳吉大木内匠助片岡次郎兵衛守リ居ケルカ其中ニ金井田傳吉今日ノ軍ニ手ニ合スンハ後日ノ残念是ニ過シト家人共引連レ出丸ヲ出テ長手口エ押行ケル

初井日記云小野木城秀吉公ハコラヘヌ若大將ニテ候ヘハ縫殿メテ乗落シテ生取ニセヨ手延ヒニ致シ候ハ、羽柴カ後詰モアルヘキツ只急ケ々トアレハ採立テ強攻ニ致サテ候程ニ山名殿ノ手ヨリ一番ニ西ノ矢倉ヲ乗取テ候久下越後ハ出丸ヲ乗取テ候

○城

日本書紀垂仁天皇紀云命ニ上毛野君遠祖八綱田令擊狹

ハノリ取其勢ヒニ本丸マテ乗付ントスルニ信長勢コ、ウノ者カ火燭ヲフラシテ抱テ候

武蔭叢話云謙信逝去の時三郎景虎と景勝と兄弟家督相論し景虎は春日山の城二ノ丸に居られしか本城より景勝鐵炮打掛る故景虎たまらず一里半斗脇の御館へ取退く是を聞て前の管領上杉憲政も北條丹後守も館の城へ籠丹後守則坂戸の城へ人數を入れて春日山の城と並たる愛宕山を取んとす此上は春日山本城より高ければ是を取られては景勝叶はしとて姉榊上條の城主上杉彌五郎義春を愛宕山に置く云々

玉露叢云慶長十九年九月三日ニ三ノ丸ニ於テ御能五番仰セ付ラル

又云元和元年正月十二日大御所岡崎ニ御留滯幕下ヨリ御使トシテ佐久間河内守安藤治右衛門參上ス則チ御前へ召出サレ大坂ノ城割ノ儀御尋アリ申上テ云ク二ノ丸ノ堀存ノ外深ク幅廣ノ土手ヲ引落ストイヘトモ三ヶ一モ足ラス二ノ丸千貫櫓ヲ始メ有樂家屋其外西ノ丸并ニ修理大夫カ家何モ引崩シ右ノ堀ヲ埋ム

慶長見聞記云大坂西ノ丸へ御移被成候ヘト申増田右衛門長東大藏ナト取持ニテ西ノ丸ニ大廣間天守ヲ建テ進上

穗彥一時狹穗彥與師匠之忽積稻作城其堅不可破此謂稻城也

古事記伊久米伊理毗古伊佐知命記云天皇乃與軍擊沙本毗古王之時其王作稻城以待戰

續日本紀云神護景雲二年二月癸卯筑前國怡土城成

又云寶龜六年十月壬戌前右大臣正二位勳二等吉備朝臣眞備堯右衛門少尉下道朝臣國勝之子也(中略)勝實四年爲入唐副使翌日授正四位下一拜太宰大貳建議創作筑前國怡土城寶字七年功夫略畢遷造東大寺長官

又云寶龜六年十一月乙巳遣使於陸奥國宣詔夷俘等忽發逆心使桃生城鎮守將軍大伴宿禰駿河麻呂等奉承朝委不願身命討治叛賊懷柔歸服

平家物語云そのせい四萬よきしなの、國へはつかうすきそはよたのしやうにありけるかこれをきいてしやうをい

てそのせい三千よきにてよこたかはらにちんをとる

太平記云楠ハ元來勇氣智謀相兼タル者ナレハ城ヲ拵ヘケル始用水ノ便ヲミルニ五所ノ秘水トテ峯通ル山伏ノ秘テ

汲水此峯ニ有テ漏ル事一夜ニ五斛斗也此水イカナル早ニモヒル事ナケレハ如形人ノ口中ヲ濡サン事相違アルマシケレトモ合戦ノ最中ハ火矢ヲ消ン爲又喉ノ乾ク事繁ケ

レハ此水計ニテハ不足ナルヘシト大ナル木ヲ以テ水船ヲ
 二三百打セテ水ヲ湛置タリ云々
 又云 金崎城 佐々木鹽治判官高貞ハ出雲伯耆ノ勢三千餘騎
 ヲ率シテ兵船五百餘艘ニ取乗テ海上ヨリソノ向ケル其勢都
 合六萬餘騎山ニハ役所ヲ作雙ヘ海ニハ舟筏ヲ組テ城ノ四
 方ヲ圍タル事隙透間モ無リケリ

新田由良家傳記云成繁公御代に御威狀被下候者御譜代
 衆新參衆にも數多有之其身一代御威狀預り候て御城中
 の御藏に御入被成惣て寫しを被成被下候

毛利家記云元清其家ヲ相續有テ穂田ト名乗セ給ヒ備中國
 猿懸ノ城ニマシマシケルカ餘リ高山ニテ不自由也トテ天
 正十一年ニ同國ノ内中山ト云シ山ヲ城構サセ給ヒ居住サ
 セラレシ

甲陽軍鑑云勸助承て申上る我等城を取しく繩はりは委相
 傳し關東には太田道親か、りを專用とて批判いたし候へ
 とも過而ひさしき事にて候へは今は是とてもしかしと存
 知たる者無之とあひ見候

謙信家記云 輝虎公越中發 輝虎公越中加賀飛驒ヲ心カケ給ヒ
 テ一年前ヨリ心安侍テ三ヶ國ヘ二人宛蛙ノ商人ニ拵ヘ國
 ノ險難或ハ輝虎ニ志アラシ侍ノ方ヘ策略ノ爲ニ指越給フ

ラレヨト云ハ前田澤開テ二階堂ノ巻物御床ニアリイカニ
 シタマフト云々

見聞雜錄云大將ハ人形同斷之憲政なれば談合相手にも成
 難し籠城堅固之防云々

武蔭遺話云織田城之助信忠卿ハ二科五郎信盛の籠り候高
 遠の城へ御取詰一時に攻取給ふ(中略)大廣間は七間に十
 二間の家也是へ取籠り働故寄手も攻あくむ云々

又云扱秀吉公の御人數七重八重に殿主を取巻く左馬介に
 安土の城より取來る不動國行の太刀二字國俊の刀藥研藤
 四郎の脇差なら柴の肩衝乙御前の釜鉗ふこの水さし虚堂
 墨跡等を唐織の宿衣に包女の尺の紳にて結付殿主の武者
 走りへ持出大音にて申候は天下の重器を滅し候はん事無
 念に存目録をそへ渡し進候云々

松原自休手録云最上山形ノ城出羽守在城ス景勝老臣直江
 山城守在ニ米澤 會津山形廿里米澤山形隔十四里 直江爲ニ大將春日右門 五石
 上口主水 七石 大關彌七郎 原陸 爲ニ軍鑑 九月十三日山形
 カ攻ニ取旗屋 四里 城主江口五兵衛自害ス
 三河記云秀次關白殿御むほんのよし仰出されてまゆらく
 の城を出られかうや山へ送り奉りて御はらを被成けり
 松平記云信玄其後二股の城へ押寄らる、城に中根平左衛

所ニ六人ノ侍トモ三ヶ國ヲ廻リアラユル城ノ繪圖或ハ山
 川沼ヲチ川迄ノ甲乙道筋迄ヲ繪圖ニナシ來リ云々

箕輪軍記云 城繪 同如月十五日夜深に新堀の城中へ押寄
 けり則此城元より上杉の寶物品々被入置し藏也鯨波天
 地を動し駭不得止事城主兩家老に被申けるは此時當
 て大軍かけ合ふせき戰といへとも中々叶ふまじ然は主君
 上杉の寶物信玄にうは、れなは後々に未代の面目なり主
 君へも申分立兼云々

奥羽永慶軍記云 佐竹武 今ハ下野國宇都宮モ幕下ニソ屬シ
 ケル其故ハ過ニシ天文十九年七月十四日宇都宮前ノ尙綱
 行年二十八歲同國喜連川五月女坂ノ上ニシテ討死ス因
 茲敵壬生中務大輔宇都宮ヲ乘取居城セリ尙綱カ嫡男伊勢
 壽丸希有ニシテ遁死真岡ニ整居シイカニモシテ父ノ吊
 合戰ヲモシ壬生ヲ討テ宇都宮ヘ立歸ント天ニ憤リ日月ヲ
 送リケルカ一分ノ力ニハ不レ及常州ニ立越佐竹ヲ頼ム義
 昭是ヲ聞給ヒテ伊勢壽丸少年ノ身ニシテ父ノ敵ヲ討ント

徹骨隨ニ思フ事コソ哀ナレ
 又云 自須田美濃守方失部 須賀川落城時口口討殘サレタル兵三
 十騎ヲ率テ引退ケハ向ヨリ前田澤來ルニ行途タリ美濃是
 ヲ見テ御邊ハ何地ヘ歸ルソ城ニハ火懸リタリ急キ共ニ落

門大將家康はかりの加勢青木又四郎松平善兵衛籠る此人
 人小勢なれとも敵の大勢を事ともせず合戦す度々突て出
 てのせり合有之然間濱松より後詰の勢出張之時分二股
 の城の水の手をとられて籠城難叶城を渡しのく城には
 信玄衆信濃蘆田下野守を籠らる

○本城

初井日記云 宗高福於越 久基ハ代々攝州ノ守護職ナレトモ池
 田勝政ヲト代々國取合アリテ久基ノ旗本領ノ者トモ年
 年オモムキテ敵トナリ候ユヘ勢ヒ次第ニ弱クナリ候六能
 瀬ヲ本城トシテ國中ノ敵ヲ窺ハレ候

○根城

初井日記云 宗上宗貞八上 敵ハ是非ニ八上表ニ仕寄候テ屋形
 ノ根城ヲ取切候テ所々ヲ押ヘ西口ト揉合テ勝負スヘキ赴
 キニテ候

○府ノ城

船田記云四月十一日午後利綱率ニ村山村重與ニ兄利安ニ徒ニ
 陣於正法寺(中略)亦徒ニ正法寺、南北鴻溝分ニ一寺、如三西
 寺一人皆喚ニ吾軍ニ爲ニ北正法寺、喚ニ敵軍ニ爲ニ南正法寺ニ
 與ニ府城ニ隣築ニ射台ニ者南北併二十有二其中發然高者惟七
 云々

増補家忠日記云天正十年八月廿六日大神君松平主殿助家忠ニ命シテ新府ノ向城ヲ守ラシメ給フ

○附城

大友興廢記云^{安城口入}逆心の城に郷人あらかしめ親貫に一味せし逆心の志をわすれすよこしまなる分別出来て先のいきとほりをとけんために郷中の者同意にて安岐の切寄に付城を構へ居たり

續武家閑談内藤家傳云永祿十年三月十三日牛窪吉田長澤三ヶ所の城落居す(中略)同時吉田城に向て付城を拵へ宗徒の勇士を籠させ給ふ先口見寺の岩には内藤三左衛門信盛石川日向守宗盛鶴殿八郎等也柏塚の寨には大久保七郎右衛門忠世小栗仁右衛門戸田因幡守其外岡崎近習の輩替替に相詰て夜晝の境もなく持楯楯付寄々々攻戦ふ早平攻にすへし暫く敵の様體を見斗へとして石川内藤兩人に御馬廻り五百騎斗指副られ打出し給ふ云々

武隆叢話云天正十五年三月秀吉公筑紫へ御備置島津を御攻成され候搦手の大和納言秀長近江中納言秀次は八萬にて島津義弘同家久兄弟二萬餘にて豊後府内より日向の縣へ掛り薩摩へ引取ける跡を追て亂入高城財部の兩城を取奪攻給ふ附城五十一ヶ所其内耳川を越て根國といふ所

原田等カ田付ノ合戦ニ討負テ敵方ノ案内者彈正サへ長井へ落來ル由告タリケレハ政宗案ニ相違セラレ借ハ早會津方ニ隠謀ノ同志モ非ス是程迄思立タル事ノ本意ナサヨトテ徒ニ檜原時ニ滞留シ向城ヲ築テ晝夜隙ナカリケル云

○館城

武隆叢話云天正六年三月より翌年二月迄越後國中貳ツに成て騒動止事なし坂戸の城は上杉彌五郎陣所愛宕山の麓なれば長虎方よりも大事にして毎年館城より北條丹後守忍んで泊り番に來り夜明には館の城へ歸る(中略)彌五郎家老毛竈與十郎蓮池といふ所を乘廻す處に館の城の三味にて騒敷非禮有レ之火葬の煙みゆる皆々此を遠見する處へ玉たすき掛たる會下僧一人館城の方より來る館の三味にて葬禮有は何者か死候やと問禪僧承り北條丹後守殿昨朝手負申され今日死去にて其茶毗にて候我々も寺役にてそれへ參り只今仕廻本寺へ歸り候と語て打過ぬ

○子城

豊臣家譜云秀吉發大坂ニ赴ク大山ニ其兵十二萬五千餘也既到大山ニ率諸士到樂田羽黒邊ニ對小牧山ニ多構ニ子城ニ其二重堀若則日根野備中守弘就舍弟彌次右衛門其兵二千

に取出を構へ官部善祥坊繼綱木下平太夫貞基龜久新十郎廣政垣屋隱岐守光成福原右馬介直高一萬五千にて陣取島津出張の口を押へたり(中略)根白の岩は島津が軍兵雲霞のこくとく取圍み鐵炮矢叫の音関の聲相交て天地も響斗也

松平記云永祿元年三月尾州科野城ニ駿河より松平勘四郎大將にて三百にて籠又笠寺城に駿河桑島備中守三浦左馬助飯尾豊前守淺井小四郎四百餘人にて籠然處に尾州科野の城に付城を付日々夜々云々

當代記云慶長十九年十一月十八日兩御所天王寺茶磨山ニ御登大坂ノ城遠見シ給ヒ付城ヲ有ニ普請ニ被指ニ置軍兵ニ止ニ通路云々

水野勝成記云其後かりやのしき原と申所へ權現様御働被成つけ城を御取被成候

○向城

野田福島合戦記云信長ハ天王寺ヨリ中島天満森へ陣替有リ天神ノ拜殿モ會所モ今度燒ケレハ森ノ中ニ陣取先陣ハ野田ノ北海老江堤田中ニ陣屋ヲカケラレタリ八日ニ河口ニ向城ノ鐵初アリ

會津四家合考云^{政宗}政宗宣旨ヨリ引返サレテ後云々

○外城

宗長手記云大永二年五月北地の旅行越前國のしる人につきてかへる山をしらねとも小夜の中山にいたりて掛川秦能亭に逗留この頃普請最中外城のめぐり六七百間堀をはり土居をつきあけ凡本城とおなしこの地岩土といふものにて只館をつきあけたりともいふへし

○堀城

播州佐用軍記云^{政宗}秀吉卿ハ佐月上旬ヨリ兎角ノ返事無リケレハ不審ニ思召彼表へ物見ノ輕騎謀士ヲ遣テ見聞スヘシトテ手分シテコソ遣ケル件ノ物見翌月所々ヨリ馳歸テ申ケルハ上月ハ籠城ニ疑所不候先近郷之堀城共悉ク閑退大川筋ノ北方ニハ田面々ヲ刈揚タリ

○ツメノ城

志太雙紙云あら手を入かへせめければのみはいかてこらふへきそや二三の木戸をも打やふられつめの城にそこもりける

○斥候城

見聞雜錄云此時公方家御目代之大將之和田伊賀守信長へ向て被申者當城要害之山城と申佐々木も此城を居城觀

音寺の城の斥候城と被_レ存近江國中之強弓引大力之覺た
る者を込置申諸城たとへは落城して佐々木父子の籠たる
觀音寺の城を取り巻申時之後詰をせよと之備立にて候故
中々一時責には中々落兼可_レ申云々

○支配城

松原自休手録云信玄ト家康和睦ニシテ家康懸川の有制法
入_ニ置石川日向ヲ_ニ五百餘騎ニテ金屋近邊ヲ巡見ス山縣三
郎兵衛ハ三千餘騎ニテ遠州信玄支配ノ城々往來シテ行_ニ
逢家康卿和睦ノ上ハ山縣厚禮陪臣ナレハ家康卑禮恨_レ
之乎喧嘩ニシテ切_ニ入供奉ノ勢_一

○城郭

百鍊抄云寛喜二年七月十六日園城寺南院衆徒與_ニ中北院
住侶_ニ各構_ニ城郭_一爭_ニ雌雄_一
新式目追加云城郭事次岩門并宰府構_ニ城壕_一之條爲_ニ九州
官軍_一可_レ得_ニ其構_一云々早爲_ニ領主等_一之沙汰_ニ可_レ致_ニ其構_一
云々

吉野拾遺云刑部卿義助朝臣越前よりいましてものかたり
に越前のくにたかの巢の山はたかくそはたちて城郭にし
かるへきところなり云々
太平記云_{後基}彼俊基ハ累業ノ儒業ヲ繼テ才學優長成シ

ニ乘崩候處ニ三那八三左衛門好ミヲ以テ種々懇望候間自
命相助候事云々

玉露云慶長十九年十一月十一日板倉伊賀守ヨリシテ飛
脚到來ス注進シテ云ク大坂表ノ體彌籠城ノ支度ト相見ヘ
申候其趣ハ金銀ヲ澤山ニ取出シ大坂近邊ノ八木ヲ買コミ
武具馬具以下ヲ城内ヘ入置惣構ニ壁ヲ付番匠ヲ數百人招
キヨセ櫓井籠ノ支度晝夜怠ラスト云々

○マトハ曲輪

續武家閑談云大須賀五郎左衛門ハまとは曲輪へ着申候城
へのり込申事は中々不_ニ罷成_一候故引申候其以後城をとり
まさ城廻りにさく堀塀を付候へは城中兵糧につまり切て
出候へは塀さくのきはにて皆討れ申候

○外曲輪

奥羽永慶軍記云_{槍原花}遠藤カ日来ノ掟ニ目付ノ者敵寄ル
ヲ見ハ櫓番ニ告其後本丸ニ來_レ櫓ノ者聞ヤ否ヤ貝ヲ吹ヘ
シ其音ヲ聞傳ヘニ五箇所ノ櫓貝ヲ吹ヘシ槍原中貝ノ音ニ
テ裝束セヨ太鼓ノ音ニテ約束ノ持口ヲ固メヨト相定シ事
ナレハ夜中トハイヘトモ何カハ少シモ可_レ騒弓鐵炮長柄
ノ者敵ノ未_レ寄間ニ外曲輪ニ押出備ヲヒシト立テ待懸タ
リ

カハ顯職ニ召仕レテ官關ニ至リ職々事ヲ司レリ然ル間出
仕事繁シテ籌策ニ隙無リケレハ何ニモシテ暫籠居シテ謀
叛ノ計略ヲ回サント思ケル(中略)俊基大ニ恥タル氣色ニ
テ面ヲ赤メテ退出ス夫ヨリ恥辱ニ逢籠居スト披露シテ半
年計出仕ヲ止山臥ノ形ニ身ヲ易テ大和河内ニ行テ城郭ニ
成ヌヘキ處々ヲ見置東國西國ニ下テ國ノ風俗人ノ分限ヲ
ソ窺見ラレケル
太平記云_{西國}將軍方ニ無_レ志モ皆順ヒ不_レ靡云事ナシ
處々ノ城郭國々ノ蜂起震ク京都へ聞ケレハ先東國ヲ敵
ニ成テハ叶マシトテ北畠源中納言顯家卿ヲ鎮守府ノ將軍
ニナシテ與州ヘ下サル云々

賀越園諺記云_{公方}松永彈正ト云者有リ本ハ無
名者ナリシカ三好ニ隨逐ニシテ大和山城ノ守護職ニ成奈
良ノ多門山ヲ城壕ニカマエテ南都京都ノ成敗ヲ司リケリ
○惣構

天正事録云御花見ノ次第御催夥シキ様體也(中略)惣構ニ
構ヲ幾重モ結路次通ニ埒ヲ結群集ノ事ナル故惣構ヨリ町
へ御奉行人増田右衛門尉初トシテ被_レ仰付_一
増補家忠日記云慶長五年八月廿九日大神君羽柴美作守親
良ニ御書ヲ玉ハル態申候(中略)廿三日岐阜惣構ヲ破則時

家忠日記抄云天正六年三月九日駿州田中城へ働外曲輪ヲ
破リ手前へ敵二人討取云々

○町構

奥羽永慶軍記云_{秋田郡阿仁比}敵ハ年來ノ案内者ニテ大勢ナ
リ味方ハ不案内ニテ小勢タリ良モスレハ町構破ラルヘウ
ソ見ヘニケル

武家名目抄稿第百十册

稿檢校保己一編

居處部附錄四

○大手

長門本平家物語云 宮崎三郎保利 後は山ふかくして峻かりつ
れはからめてむかひぬへしともおほへさりつる物をいか
かせんする前は大手なればえす、ますうしろへもひさか
へさす

源平盛衰記云山門ノ大衆追手搦手ニ手ニワクル搦手ハ大
關小關四宮河原モ打過テ久々目路ヤ清閑寺歌ノ中山マテ
實寄セタリ追手ハ西坂本下松新道越テ打越打過テ清水坂
隋尾ノ觀音寺マテ責付タリ

吾妻鏡云文治五年七月十七日可有御ニ下向于奥州事終
日被經ニ沙汰ニ中略ニ品大手自ニ中略可有御下向ニ先
陣可爲ニ島山次郎重忠之由召仰之

太平記云 關東大勢 長崎裏四郎左衛門ハ別シテ侍大將ヲ承テ
大手ヘ向ヒケルカ態己カ勢ノ程ヲ人ニ被レ知トヤ思ケン
一日引サカリテソ向ヒケル

入付入ニセント仕ケル所ニ田中太郎左衛門城中ヘ早ク引
取大手ノ門ヲ立ケル故敵續コトアタハス還ル

水野勝成記云天野五郎左衛門輪の下に少こやかかけ仕候そ
れをやき二の丸につき申候其時大手の門をひらき須賀太
左衛門と申者名乗かけ出申候

○搦手

長門本平家物語云 宮崎四郎保利 平家は源氏のからめての
まはるを待て日をくらさんとするはかりあとはしらすし
て友にあしらひ日をくらしけるこそはかなけれ

源平盛衰記云平家ノ侍ニ上總守忠清此アリサマヲ見テ申
シケルハ橋ハヒキタレハ渡リカタシ河ハ水早シテ底ミエ
ス人種ハ盡トモ渡スヘシトモ覺ス追手ノ勢少々ヲコ、ニ
ヲキテ敵ニアヒシラヒ搦手ヲ淀路河内路ヘ廻テ敵ノ前ヲ
塞テ戰ハント云ケレハ云々

太平記云 六波羅 巳ノ尅ノ始ヨリ大手搦手同時ニ軍始テ馬
烟南北ニ靡キ時ノ聲天地ヲ響カス内野ヘハ陶山ト河野ト
ニ宗徒ノ勇士ニ萬餘騎ヲ副ヘテ被レ向タレハ官軍モ無ニ左
右ニ不懸入ニ敵モ輒ク不懸出一兩陣互ヒニ支テ只矢軍ニ
時ヲソ移シケル

甲亂記云 高遠之城 敵ハ早大手搦手一同ニ諸方ノ攻口ヨリ責

鴉槍物語云正素か合戦評定にいはいく敵は大勢なれ共二手
にならてはよすへからず大手は出雲路を過て道祖神のま
へをのためかたに中嶋へかゝるへし搦手は白川へ打出て
只洲のたつみ中島芝にひかふへし其邊南は川也東もたつ
みも足立わろし大略歩立野伏ともなるへし

大友興廢記云 高松伊豫守志賀道輝に加 十四日卯の刻に有相人
數一同によせかゝる城中も勇氣をあらはした、かへとも
かれは多勢これは無勢ことに城のこしらへも堅からすつ
ひに大手の門をやふられて二の丸までをしこむされとも
やう／＼ふせきのけつめの城に引こもりぬ

毛利家記云城攻ノ評定有ヘシトテ隆景ノ舟ヘコキヨセ給
フ三奉行衆宜シハ追手搦手ヲ安藝侍從殿ト圖取ニサセラ
レ可レ然候

奥羽永慶軍記云 柏山合 鳴澤ノ城ヨリ道忠白髪ニ甲ヲ頂キ
フトクタクマシキ馬ニ打ノリ應持ヲカケ出レハ同伊良子
家平黒皮ノヨロヒ着テ黒キ馬ノ五歳アマリナルニ打ノリ
鎧ヲツトリクツキヤウノ兵六十餘騎大手ノ門押開切テ出
レハ米澤方櫻田宮川五十嵐カ備タチマテ崩立テ見エニケ
リ

長見見聞記云味方無勢敵京町筋ヲ押破ラレ敵勝ニ乘テ責

上二三ノ曲輪迄亂入之由申ケレハナラハ最後ヲ急トテ本
城ノ櫓上玉ヘハ盡テ持參スト云々

初井日記云秀尙公ハ城ヲ敵ニ乗セ候テ大將ノ立退法ヤア
ル只討死ソト仰ノ候ヲ小野原殿カ口惜キ仰セカナ大將ノ
死ヲカロンヌル法ヤ候ヘキカ某等ニ打マカセラルヘシ隨
分討取リテ退ヘキニ候兎モ角モ弓矢ハ恥ヲ忍ヒ候テ始終
ノ功ヲコソ望ムヘケレ早トクトクト謀メ候ヘハ何モ此義
ニ同セラレ大手搦手城門ヲ押開キ討テ出テ候

又云 播州野 初井越中守手ヨリ一番ニ大手ノ西ノ方ノ櫓ヲ
ノリ火ヲカクルト間モナク搦手ノ門ノ脇櫓ヨリ火ノ手見
ヘ惣ノリトモミタツル

○大御門

義經記云 土佐坊義經の討 大みかとはくわんの木さ、れたり
と思ひて小門よりさし入御馬屋のうしろにて聞ければ大
にはに馬の足音をと六しゆしんとうのことし
又云 同 大みかとはつと上りて見れば判官喜三太斗御馬を
ひにてた、一きひかへ給へり

○中門

平家物語云中門の中には馬にくらおいてひつたつたりは
んくわんこれにうちのりてかとおけよとて門あけていま

やいまやと待給ふ

太平記云大森彦其後四五日ヲ經テ雨一通リ降過テ風冷吹

騒キ電時々シケレハ盛長今夜何様件ノ化物來ヌト覺ユ違

テ待ハヤト思フ也トテ中門ニ席敷テ宵一縮シニ所藤ノ

太弓ニ中指敷抜散シ鼻符引テ化物運シトシ待懸タル

たかたち草紙云すてに其夜も夜半斗の事なるに鈴木三

郎しけいへはゐたる處をつんと立て中門のらうにいてを

とうとかめ井をちか付いかに龜井今度しけいへ紀州ふち

しろを出しとき云々

聚樂第行幸記云今のまうけの御所は關白殿供奉の役なれ

ば風聲聚樂の中門にいらせ給ふ

○塀中門

挾物記云御的の事御近代には惠林院殿様御代始正月十六

日又御年頭十七日也尚清弓太郎十九其後は御挿物也はさ

み物を年頭殿中にて射候時ははしめは彼中に祝候まで御

出之時射手塀中門へ出そこにて扇疊紙をかひそひにわた

してゆかけをさして弓矢をもち出しやかて弓立によりて

紐をおさめてたちて射候射はあしを引長紐をむすひ御

えんへあかり縁を被下候時立よりてなして弓持ての事

なれはいた、かす拜領まで退出申塀重門の外にて弓矢縁

○棟門

源平盛衰記云三位ハイソカレス閑々ト歩テ此小路ハイカ

ニト云リソノ大道ハナニト云ソ此平門ハ誰カ許ソアノ棟

門ハ何者カ家ソナト問給ケレハ云々

○土門

承久記云はうくわんの宿所はたかつしよりはきた京こく

よりは西なり京こくおもてはむなもん平もんにて大門な

りたかつしおもては土門にてこもんなり云々京極おもて

の二のものをはさ、せてたかつしおもての土門はかりを

ひらきてあひまちける

○冠木門

齋藤親基記云寛正六年八月十六日寅刻大水出溢山城半國

放生川如大海御臺御棧敷門其高御車冠木□□□□善法

寺坊中水及鴨居之三寸云々

義輝將軍御成記云永祿四年木下古御殿御末迄御坐敷橋北

平張打一爲御末衛一被退築地一西向被立冠木門一云

又云御門役冠木門之左篠原左近丞右加地權助也

○小門

をも渡しゆかけを取渡して又御前へ出御盃なといた、く

也

○裏門

甲陽軍鑑云左馬介信以自面用不可裏御門出入事語云

父子不同席男女不同席

○塀重門

武蔭遺話云本能寺にて信長公を明智光秀討奉る時塀重門

より御座の間の大庭へ亂れ入云々天野源右衛門穗長の鍵

にて障子越に突たれば信長公右の脇へ當り深手なれば叶

はず御寢殿にて御自害なり

○四足門

滿濟准后記云正長二年正月十三日今日赤松左京大夫松は

やし令沙汰(中略)御所西向四足門山名誓固也云々

又云同年三月九日今夜對室町殿様御元服云々及其制限

成參申畢(中略)先於西向四足門前下車自西中門沓脱

登經西ノ縁着公卿坐一畢

又云室町殿日吉御參詣御加持ニ參畢(中略)自四脚門參

會入着公卿坐云々

○四足脇門

吾妻鏡云正嘉二年正月廿四日勝長壽院四足脇門造畢

細川亭御成記云長祿三年六月晦日任御成之例(從)小門一

御成有今度者大永四年三月六日午刻御成從小門一在之

御塗與御立鳥帽子御直垂御服は御織物薄こく是様も御直

垂小門の外に北向に御畏あり

播州佐用軍記云秀吉信長卿ノ御教書ニ秀吉ノ廻文

ヲ指添出シケレハ政範是ヲ押載披テ高讀上タリ政範暫思

案シテ申サレケルハ御教書ノ趣并秀吉卿ノ廻文謹テ承候

ヌ實ニ有難存候殊信長卿秀吉へ奉對恨可申條露計モ不

候雖然某等近年毛利ニ頼レ候テ無ニ因候又然レハ輝元

御味方ニ參候ハ、彼等カ先陣仕リ輕命勵ニ忠節ヲ可申

候輝元若御味方ニ不參候ハ、得コソハ御請申間敷ニテ

候此等趣宜御申上願入候ト禮義正ク申サレケレハ三使モ

當然ナレハ信服ノ體コソ兎角ノ言モ無リケル時ニ高島右

馬助正澄申ケルハ其存候ハ政範若ク候得ハ斯存詰候不禮

ハ御免候へ某老年ノ事ニ候ハ、能々申合候テ重テ是ヨリ

御請可申如何様共宜ク御申上奉願候ト申ケレハ三使ハ

是ニ與テ得テ會釋シテ退出ス範政直次ノ間マテ見送ケレ

ハ正澄正義祐其外一族郎從見送以中ニモ右馬之助ハ小

門ノ内マテ見送り式臺シテ歸ス

- 東門
- 南門
- 西ノ大門
- 東ノ大門

吾妻鏡云正嘉元年八月十八日庚子未刻滿定光成并晴茂爲親廣資已下陰陽師參評定各申也今朝未明先登西御門山一于時殘月在西日出東云々

天正本太平記云赤松京合戦條貞範則祐主從六騎ニテ六波羅ノ西ノ門ノ前ニ控テツ、夕御方ノアラハ眞ニ六波羅ノ館ヘ懸入ラント待云々

安土日記云天正九年正月朔日他國衆之御出仕被成御免安土在之御馬廻衆計西之門ヨリ東之御門ニ被成御通可有御覽之旨上意ニテ各其覺悟仕候處夜中ヨリ已之刻迄雨降御出仕無之

松隣夜話云長濃對馬ハ小田カ使ヲ今ヤト待處ニ丸山ノ當リニ鐵炮ノ音聞エ誰トハ不知其勢二千計リシクロウシテ小田カ下部ノ陸者トモヲ追來ルヌワヤト見ル所ニ又南ノ山ノ手ヨリ銀ノ吹流シ矢等ノ指物餘多指セタル一備馬烟ヲ舉テ相近ク長濃大ニ驚キ手別ヲシ各持口ニ馳合セントスレモ込合テ騒動シケルニ依テ下知不成就對馬守齒ヲ

咬テ口惜哉刀根川ノ腰拔タル味方ノ頼トシ不覺ノ死ヲ遂ル者哉ト云捨テ西ノ門ヲ破テ亂入ル太田勢ニ馳向ヒ與力同心十四五人伴ニ暫ク戰テ東ヲ願レハ北條柿崎兩手ノ馬印シ早本丸ノ城地ニ立ツ

島津家本太平記云御告文條天德二年四月一日ノ事ソカシ中原章房清水寺ニ詣セシニ下向アリ西ノ大門ニテ八幡ヲ伏拜ケル時折小雨打瀧ケルニ簀笠ニハ、キシタル者一人後ヲ過ルト見エ此旅人太刀ヲ拔誤ス章房カ頸ヲ打落シテ太刀ヲ小脇ニ挟ンテ坂ヲ下ニ逃ケレハ下人四五人有ケルカアレヤト云テ聲ヲアケテ主ノ落シタル太刀ヲ拔テ逐ケレトモイツチヘカ行ケン後影タニ見エサリケリ子息章兼章信等嫌疑シテ廣ク糾明シ仇敵ヲ遠ク搜索スルニイカナル子細ニカキニ出シケン東山雪居寺ノ南ノ門ノ東南ノ頼ノ岸上ニ一字ノ屋アリ瀬尾兵衛太郎并同郷房ト號スル者ナリ名譽ノ惡黨カクレナキトモカラナリ而ルニ彼等カ殺害實犯疑ナシトキニ定メケレハ章兼折節病床ニフシ行向ハス舍弟章信應下部十四五人郎從下人三十餘人ニハ具足セサセ引率ス白襖ニ衣籠ニ帶劔シテ小八葉ノ車ニテ未明ニ彼在所ヘソ寄タリケル是非ナク彼屋ヲ取卷テ應ノ下部共ニ心早キ手キ、共ヲ左右ナク放入テ家ノ内ヲサカシケル

ニカ、ル惡黨ノ習ニテ元々足弱ナントヲハ置サリケリ雜人一人モ見ヘスサリナカラ又本人他行ノ家トモ見ヘス其家内幾ナラサル程ナレハ塗籠マテ打破リ板敷ノ下マテ是ヲサカス會テ人一人モナカリケリ此上ハ力ナク返ントスル處ニ心トキ者走返テ薦天井構ヘタルヲミアケタルニ人ノ衣裳ノ妻スコシ見エケレハサレハコソト肝付テ先長刀ニテ薦天井ヲハネヤフルニ忽人コソ隠レイタリケレ

○軍門
松隣夜話云矢倉ニアリケル侍小田カ役所ニ來リ刀根川ノ方ヨリ馬烟夥ク見エトヨミテ次第ニ相近キ候氏康公與筋ヘ御手使候ヤト申ス小田無覺東ニテ長野ヲ伴ヒ矢倉ニ上リ見レ之兩將刀根川ニ坐ス軍門ノ前ヲ押通リ敵ノ可寄様ナシ云々

○樓門
太平記云六波羅攻條東寺ヘハ赤松入道圓心三千餘騎ニテ寄懸タリ樓門近ク成ケレハ信濃守範資登踏張左右ヲ願テ誰カアルアノ木戸逆木引破テ捨ヨト下知シケレハ云々

聚樂行幸記云本朝にては清和の爲に忠仁公執柄し給ふ符を合するかとし延暦の政にも又おほく譲らす爰において行幸有へしとして聚樂と號して里第をかまへ四方三千歩

の石のつかき山のことし樓門のかためは鐵のはしら鐵の扉瑠閣星を摘てたかく瓊殿天に連てそひえたり

○柵門
武蔭叢話云關ヶ原陣の時肥後の宇土城を攻らる(中略)宇土の城落去其砌小西家來大方殘らす清正抱らる杉本次郎助を呼先月廿一日夜討の時柵門にて其方と鎧を合たるといふ者有り覺えはなきかと尋らる杉本承り引口の時運は候得共一人付來り外張の簀戸口迄來り候故拙者立こたへ鎧を合十文字にて彼の者の左りの腕をかけ申候手こたへ仕り候扱木戸を打夜明見候へは十文字の鎌に血付是あり候云々

○籠門
錢輪軍記云抑此城をみのわと申事榛名山の尾崎切築たる城之南表は錢に似たる込みのわと名付たり名城なれば堅固にして飛鳥もかけりかたし況や籠城の面々上杉譜代の舊臣にて名惜む一騎當千の侍也甲軍多勢若干鐵炮にて打殺され近きは矢にかけ籠門へ近付者其は弩を放し追拂塚乗る者は鎧にて突落しけり

○惣門
慶長見聞記云眞田安房守籠リ候上田ヲ御攻有ルヘキカ直

ニ御押御通り有ヘキカトノ御相談アリシユヘニ御滞留アルヨシ中納言様御若年ノユヘ是非御攻ナサレ度思召ヨシ頻ニ御望ニヨリ同五日小諸ヨリ御立ナサレソメヤト申所ニ御座ナサレサテ上田領御願見被成御馬廻衆若キ人々ニ仰セ付ラレ在々菊田仕ント少々出ラル所ニ上田城ヨリモ菊田ヲ防カンカタメ歩兵七八十計モ出テ路次ニテ行合ヒ互ニセリ合申ニ依テ敵出テ防クヲ開テ御方ヨリ數多續クヲ見テ敵引入申候御味方追掛城ノ惣門ノ木戸口マテセリ詰ケハシキ働アリ

増補家忠日記云慶長五年八月廿二日今日午ノ刻北方搦手ノ首將池田輝政川ヲ涉シ新加納ニシテ大ニ戰テ敵數百人ヲ討取ノ由其日ノ黄昏ニ及テ告來ル福島是ヲ開テ當手ハ大手ノ先隊トシテ搦手ノ勢ニ先ヲ越レ未タ此陣ノ戰功ナキ事無念也ト首將福島ヲ始メ諸士皆怒ヲ合テ其夜ノ戌刻ニ至テ軍勢ヲ發シテ岐阜ノ城下桑木原ニ攻寄セ寅ノ刻ニ及ヒ進テ町口ノ惣門ニ押詰ル

○四方ノ門

太平記云^{東勢軍南}宰相中將殿若識人ノ旨ニ付テ細川島山ニ御内通ノ事有ナハ外様ノ兵何様貳口ヲ仕ルヘク覺レハ中將殿ヲ取籠メ奉リテ近習ノモノ共アタリ近ク不可寄ト

又云堂衆八人シコロヲ傾テ大納言岡へ打上リ城戸口近ク賣付タリ

吾妻鏡云文治五年八月九日七騎終夜越峯嶺遂馳著木戸口一各名調之處泰衡郎從^下伴藤八已下強兵攻戰

太平記云^{六波羅}今マテ無^武武者トミヘツル兵ナレ共加樣ニ城中ノ色メケル様ヲ見テ叶ハシトヤ思ヒケン夜ニ入ケレハ木戸ヲ開逆木ヲ越テ我先ニト落行ケリ

又云^{大塔宮}宮ツク々々ト聞召テ我輩ノ詞迄モ不^レ捨ト云ハ是也ゲニモ樵夫カ申處サモト覺ルソトテ片岡八郎矢田彦七二人ヲ玉置庄司カ許へ被^レ遣テ此道ヲ御通り有ヘシ道整固ニ木戸ヲ開キ逆茂木ヲ引ノケサセヨトソ被^レ仰ケル

太平記云^{頓宮心}頓宮四郎左衛門俄ニ心替リシテ擧^レ旌城戸ヲ打テ寄手ノ勢ヲ後ヨリ城へ引入ケル間相模守ニ相順フ兵トモ可^レ戰力盡ハテ、右往左往ニ落テ行

又云^{赤坂合}死タル者ハ再ヒ歸ル事ナシ去來ヤトモ死ナンスル命ヲ各力ノ未墜ヌ先ニ打出テ敵ト指違ヘ思樣ニ討死セント城ノ木戸ヲ開テ同時ニ打出ントシケルヲ城ノ本人平野將監入道高橋ヨリ走下リ袖ヲヒカヘテ云ケルハ暫ク楚忽ノ事ナ仕給フソ云々

テ中務少輔ヲ召具シ夜ニ入レハ義長二百餘騎ニテ中將殿御屋形へ參シ四方ノ門ヲ警固シテ曾テ御内外様ノ人ヲ不^レ近付ニ每事己カ所存ノ儘ニ申行ヒケレハ天王寺下向ノ軍勢其ハ忽ニ朝敵ノ名ヲ蒙テ追討ノ繪旨御教書ヲ成レ義長ハ武家執事ノ職ニ居テ天下ノ權ヲ司ル

○櫻ノ門

増補家忠日記云元和元年五月八日水野準人正青山伯耆守内藤若狹守松平越中守四人共ニ命シテ櫻ノ門極樂橋ヲ守ラシメ玉フ

○門ノ扉

太平記云^{頼貞}寄手雲霞ノ如シト云ヘトモ思ヒ切タル者トモカ死狂ヲセント引籠タルカコハサニ内へ切テ入ントスル者モ無リケル處ニ伊藤彦次郎父子兄弟四人門ノ扉ノ少シ破レタル處ヨリ云々

○木戸

○城戸口

平家物語云七日のうのこく一の谷のとうさいの木戸口にテ源平矢あはせとそなためらる

源平盛衰記云一手ハ清水清閑寺ノ境ヒ堀切リテ逆木引テ瀧ノ尾ノ不動堂ヨリ木戸口マテ五百餘騎ニテ固メタリ

梅松論云明日十日午刻以前に山崎の京方を打破て烟を上へし同時に御合戦あるへしと申定て天の明ををそしと待かけて定禪圓心國人同城戸口に押寄て攻戦けるか案のこくと十日の午の刻斗に山崎を打破て久我鳥羽に攻入

賀越關詳記云^{江沼郡三}朝倉義景カ内ニ福岡五郎右衛門尉吉澄トハ我事也今日軍ノ先驅シテ名ヲ後代ニ留メント思ヒ先陳ニ進ムナリ但シ賀州一揆ノ大凡下ノ奴原カ手ニ懸ン事所存ノ外ニ思ヘトモヨシ々々ソレハ不^レ及カ我ト思ハン者ハ城ノサカモキヲノシ木戸ヲ開出合手柄ノ程ヲ見ヨヤトテ城ヲニランテ引ヘタリ

播州佐用軍記云^{城中へ後詰ノ勢入}神宮寺太郎左衛門尉別所與五郎彼是三百計ニテ來ヌ是ヨリ宇喜多モ出來ケレハ城ノ三人出向對面シテ夫ヨリ一番ニ廣維本間小馬神宮寺段々城へ入りヌ木戸ノ内外ニテ早瀬横山川島林父子衣笠出向對面シ頓テ同道ニテ本丸へ入込ヌ

初井日記云龜山ノ城ニテハ大將秀尙公モ後詰ノ武略ヲ調へ候初井越中守カ寄手モ位ヲ取テ内外ノ相圖ヲ立テ居候所ニ信長勢ハ四方ノ手分ヲシテ揉立揉合候程コソアレ城ニ籠居候船井佐右衛門桑田主稅助口西五郎兵衛川勝左近同名左門等ノ比與者トモ四方數ケ所ノ己等カ役所々々ニ

火ヲ掛城戸ヲ開テ敵ヲ引入候

築城記云平城木戸の柱の口の廣さ九尺はかり長は土の上
一丈はかり一方に一本兩方に二本也柱は面を廣四角に作
りて可立地へはいかほとも深く入てよき也クニリ木戸
は右の方に有へし

○ヌキノ木戸

築城記云木戸凡如此一かいある木を十斗にケツリ候
貫の木をして内よりさす横に木を渡すなりシヲリ故明る
なり片開キハ左へ開なり

○東ノ木戸

○西ノ木戸

太平記云カ、ル處ニ東ノ木戸ヲ荒ラカニタ、ク人アリ驚
テ誰ソト問ヘハ夜都落タリト沙汰セシ鑿場命鶴九カ聲云
云

賀越關詳記云初倉兵庫大將井本覺寺其外大坊主一授等引率
シテ兵庫助カ城へ押寄(中略)三千餘騎ノ兵楯ヲ叩テ時ヲ
作事ニケ度也相近付テ上ントスル所ニ城中ノ東西ノ木戸
口ニ大鼓ヲ打テ時ノ聲ヲ合セタリケル

○一ノ木戸

○二ノ木戸

○鼠戸

太平記云田嶋山門西塔院釋迦堂ノ長講所用有テ下リケル
道ニ山伏一人ニ行合テ只今四條河原ニ希代ノ見物ノ候御
覽シ候(中略)山伏ノ跡ニツキテ三足許歩ムト思タレハ
不覺四條河原ニ行至リヌ早中門ノ口打程ニ成ヌレハ鼠
戸ノ口モ塞リテ可入方モナシ云々

○唐居敷

源平盛衰記云本ヨリ思切テ出タレハ栖ヲ定ムルコトナシ
コ、ノ唐居敷カシコノ築地ノ腹木ノ根萱ノ根イツクニモ
傾キ臥テ悲ミケル

○築地

義經記云鬼一法是程の處ははねこし入はやと思召口一丈
の堀八尺のついちにとひあかり給ふ

官地論云凡高尾城有様弓手石岸高登無往復之路妻手流
水遠漲絶去來之船加之外郭穿堀築々地追々履矢
倉所々搔垣橋亂株逆門木筒木矢石重々構

康富記云嘉吉二年五月十九日清外史被語云去八日所語
申主水本司御社界内可開島之由事先可問之由存候處
兼日談合之百姓早少々聞之請料既致沙汰之間然者可
開也仍芝築地四壁令築廻於祭場者可殘其分之由

太平記云金崎城由良長濱二人新田越後守ノ前ニ參シテ申
ケルハ城中ノ兵共數日ノ波レニ依テ今ハ矢一ヲモ墓々敷
仕得候ハヌ間敵既ニ一二ノ木戸ヲ破テ攻近付テ候也如何
ニ思食共叶ヘカラス云々

又云山門鑿護正院僧都猷全ハ御門徒ノ中大名ニテ八王子
ノ一ノ木戸ヲ堅タリシカハ角テハ叶ハシトヤ思ヒケン同
宿手ノ者引ツレテ六波羅へ降參ス

又云村上彦四郎義光ニ立處ノ矢十六筋枯野ニ殘ル冬艸ノ
風ニ臥タル如クニ折懸テ宮ノ御前ニ參テ申ケルハ大手ノ
一ノ木戸云甲斐ナク責破ラレル間二ノ木戸ニ支テ數刻
相戰ヒ候ツル處ニ御所中ノ御酒宴ノ聲冷聞エ候ツルニ付
テ參テ候

○上ノ木戸

賀越關詳記云富田關六退桂田播磨守カ出立時ニ取テ珍敷ッ
見ニケル朝顔ノ花色綴ノ鏡ノ巳ノ刻計耀ヲ着如露如
ノ電ノ甲ニ兎角鐵形打泡影夢幻ノ双ノ籠手天火稻妻ノ景
ノ如クナル三尺三寸ノ太刀佩テ紅炉燵中ノ氷ノ如クナル
二尺五寸ノ腰刀ニ九寸五分ノ鏡トヲシ雪炭之如クナル脇
指ヲサスマ、ニ蟻蟻ノ馬太退ニ打乘テ上ノ木戸口ノ幻城
表へ懸出云々

申付之云々
北條五代記云秀吉公關東東北は泥田堀をほり築地をつき
安土日記云天正九年六月廿五日羽柴筑前守秀吉中國へ出
勢打立人數二万餘有備前美作打越但馬口ヨリ因幡國中へ
亂入吉川式部少輔備前守取鳥之城四方離レテ險シキ山
城也(中略)取鳥ノ東ニ七八町程隔並テ程之高山有羽柴筑
前守彼山へ取上リ是ヨリ見下墨則北山ヲ大將軍之居城ニ
拵即時ニ取鳥ヲ取卷セ頓テ又ニケ所繫之出城之間ヲモ取
切是又鹿垣キ結マハシ取籠五六町七八町宛ニ諸陣近々ト
取詰サセ堀ヲホリテハ柵ヲ付又堀ヲホリテハ堀ヲ付築地
高々トツカセ無透間ニ三重之矢倉ヲ上サセ人數持面
面等之居陣ニ矢倉ヲ丈夫ニ構サセ後卷之用心ニ後陣之方
ニモ堀ヲホリ堀尺ヲ付馬ヲ乘廻シケレトモ射コシノ矢ニ
アタラス如クニテイレハ二里カ間前後ニ築地高々トツカ
セ其内ニ陣屋ヲ町屋作ニ作ラセ夜々ハ手前々々ニ篝火タ
カセ白中之如クニシテ廻番丈夫ニ申付海上ニハ警固船ヲ
置浦々燒拂但馬ヨリ海上ヲ自由ニ船ニテ届サセ此表一宿
之間ハ幾年モ可ニ在陣用意生便敷次第也

○築地

義經記云辨慶落中にて人ついちのおほひにをしめて、ふみ
の太刀を取の條

ゆかめてそなげかけ給ふ

○芝居

紀伊國物語云川中島合戦條此合戦の批判を後に或者云芝居を踏へ給程に信玄の勝と云信玄は左様に不宣自國にて我持居城を出て戦時は芝居を踏へすしては不叶義也是程にせては云々

○釘貫

異本應仁記云宮小路ノ釘貫ハ富樫鶴童丸カ衆持堅メテ北島黃門鳥帽子直垂ニテ是ハ三條内府病氣ニテ東山ニテハスルヲ今出川殿ニ御尋可有事アリテ被參也明ケ玉ヘト宣ヘトモ富樫不審ヲ立テ不開鎗ナシト答ヘケレハ教親卿兼テ用意シテ相鎗ヲ以テ被開テ早々御通り有云々

武家名目抄稿第百十一册

埴檢校保己一編

居處部附錄五

○天守 天主

大友與廢記云宗麟上洛條種々御雜談御され事おほせ出され候非三面顔ハ難述事多しその、ち天主御見物いたすへきよしおほせ出され候間御座敷退出仕候

勢州四家記云瀧川下總守伊賀より來り松ヶ島請取籠城せり日置大膳亮加勢して天守は瀧川守護し門矢倉は日置守護するとなり

伊達日記云慶長元年大閣様伏見ノ向島ト申處ニ御城御構候御普請過半出來候處ニ閏七月十二日夜半時分大地震ニテ御城ノ天守御殿共ニ破損シ云々

聚樂物語云木村承て其儀候は、三日のいとまをくたされ候へ大坂の御城へ忍ひ入何にても御てんまゆに御座候御道具を一まゆ取て參り候へし是をせうこに御覽して御心をさためられ候へとて御前をまかりたつ

松原自休手録云秀頼母堂句引シテ上ニ給天守一可有自

害一處ニ速水甲斐守カ日里口貫先陣敗シテモ後陣有利多先可有遠慮

大坂軍記云慶長十九年十一月廿六日後藤又兵衛元次は御城天守へ鐵炮の來るをかこわせんために山田外記を召れ天守へ上り鳴野今福の様子を目の下に見下し則宿へ歸具足を持せかけ付る

○矢倉 樓櫓

長門本平家物語云衣笠軍條大介いひけるはわかとうをはしめてむまやくわん玄やはらにいたるまでつよ弓のともから矢くらをかまへてさむさむにいへし又うち手かしこからんものともは手々に長刀をもてふり向に追はめてうつへし

又云被攻三井寺條高倉宮ふちし奉りし事によて三の寺せめらるへしとさた有ければ大衆發て大津の南北の浦にかひたてかき矢くらかきてふせくへきよしけつかうす

吾妻鏡云建仁元年五月十四日佐々木三郎兵衛尉盛綱入道使者參著捧一報狀義盛其狀云資盛之姨母殊施兵略如童形令上髪著腹卷居矢倉上射襲攻之輩中者莫不不

陸奥話記云十五日酉剋到着園厨川堰戸二柵相去七八町

許也結陣張翼終夜守之件柵西北大澤二面阻河河岸三丈有餘壁立無途其内築柵自固柵上構樓櫓銳卒居之河與柵間亦堀墮墮底倒立及地上蒔鐵及遠者發弩射之近者投石打之適到柵下者建沸湯汰之振利及殺之

異本義經記云奥州を出られ忍びて京都へ御登條其頃洛中に隠なき鬼一法眼とて陰陽師の法師有天下の御祈禱仕一條堀川に有けるかかれは一つの御寶物十六卷の兵書なり然に彼法眼文武兩道の達者としてたし置せ給ければ秘藏してこそ持たりけり

義經此事聞召一目見んと思召山科を出給法眼か許に行安やかしこにた、すみて内の體を見給ふに其家作美々敷して四方に堀を掘て水をた、へ八ツの櫓を上置様は橋を引體に見えて有

太平記云千帆破城軍條城ノ中ヨリ切岸上ニ積テ置タル大木十計切テ落シ懸タリケル是ニチカツカントシトロニ成テ騒ク處ヲ十方ノ櫓ヨリ指落シ思様ニ射ケル間五千餘人ノ兵トモ殘スクナニ討レテ其日ノ軍ハ果ニケリ

官地論云大和甲賀健弓精兵究竟手聞五百餘人同意惣而與力輩一万餘人矢倉矢倉碾膝置居構々連群集矢倉之下鞍置馬十重二十重引立

文正記云大路小路城門々々櫓々旋於役人居於警固一
豐臣家譜云同正八年正月秀吉秀長攻三木城(中略)賀相
欲登櫓而燒城云々

野田福島合戦記云九月十二日夜半計ニ寺内ノ約束ノ早鐘
ヲツキ玉エハ則諸糧那集リ一揆トモ駆催シ同十三日夜樓
岸河口ニケ所ノ取出ヘ勢ヲ出シ鐵炮ヲ放カケ、リ三好衆
ノ運命ヤイマタ盡サリケン十三日ノ朝ヨリ西風頻リニ吹
西海ヨリ高鹽吹上淀川逆ニ湛ヘケリ三好方ヨリ川端ノ堤
ヲ切りケレハ水内ヘ入信長衆ノ陣屋ヘ水入難義ニ及フ依
之同十四日信長方樓ヲ田ノ中ニアマタ上ラル、云々

○城樓

安土日記云天正五年三月朔日瀧川維住永岡峰屋筒井若狹
衆被仰付鈴木孫市構取詰竹タハラ以攻寄城樓ヲ上日夜
被攻候

○二重矢倉

長門本平家物語云熊谷平山城には矢くらを二重にかまへて
上には平家の侍下には郎等國々の兵ともなみむたりきし
にそへて屋形をうちて大將くんられたり口一開たりけ
れはいつくよりかけ入へしともみえさりけり
源平盛衰記云熊谷向城ノ構ヘソヲヒタ、シキ山ノ岸ヨリ

ケタリ

○高櫓

○出櫓

太平記云將軍御遊發大渡 山崎ヘハ脇屋右衛門佐ヲ大將トシ
テ洞院ノ按察大納言文觀僧正大友千代松丸宇都宮美濃將
監泰藤海老名五郎左衛門尉長九郎左衛門以下七千餘騎ノ
勢ヲ向ラル寶寺ヨリ川端マテ塀ヲ塗リ堀ヲホリテ高櫓出
櫓三百餘ヶ所ニカキ雙タリ

○月見ノ櫓

増補家忠日記云元和元年五月七日秀頼及ヒ母堂月見ノ櫓
ニ迫ル井伊掃部頭直孝ヲ撃手トシテ安藤對馬守重信ヲ監
使トシテ大坂ノ城中ニ遣シメ給フ

○矢狹間

太平記云山門城中ノ勢六万餘騎矢間ノ板ヲ鳴シ舷ヲタ、
イテ関ヲ合ス
又云平石城 射手ハ元來櫓ニアレハ矢間ヲ引テ差攻々々散
散ニ射ル

○櫓塀ノ狹間

奥羽永慶軍記云八瀨落 城中ニ引入人數ハ大將美作守小關
嘉左衛門ヲ始トシテ以上百三十人ノ外ハナシソノ外女童

海ノ遠淺マテ大ナル岩ヲ取積テ岩上ニ大木ヲ切臥セ其上
ニ矢籠ヲ二重ニカイテサマヲアケタリ

○七間櫓

増補家忠日記云慶長五年八月廿三日下川瀬左馬助瑞龍寺ノ岩ヲ專ラ岐
阜ノ城本丸ニ敗レ入テ黃門秀信上所ニ加ル大手七曲口ニ
シテ木造左衛門佐津田藤兵衛其子藤三郎百々越前守等踏
留リ坂中ニ於テ奮戰ス(中略)武藤砦ニシテ暫ク支テ敵味
方互ニ苦戰シテ城兵遂ニ利ヲ失テ引退ク斯シテ七間櫓ニ
楯籠ル

○奥ノ矢倉

文祿政談云如急難櫓門瀧 昔俊寛僧都康頼入道其外ノ人々後
白河院ヘ勸メ奉リテ平相國清盛公ヲ亡スヘキ結構アリシ
山庄也ト云扱彼城郭ノ盛ナリシイニシヘ不思議ノ化物ア
リト云奥ノ矢倉ノ下ニ勉メ守ル侍共雨天物開敷折柄碁双
六ナト戯ヒ戲シケル折節ハアリサウシノ穴ヨリ面ノ廣サ
二尺計ニシテ三目兩口ノ鬼形ノ物内ヲ見入ケレハ頓テ人
人興ヲ醒シ身ノ毛モ立テヲソロシトナン

○外櫓

太平記云外櫓ノ上サマノカケニハ射手ト覺シキモノ共弓
ノ弦ヲク矢シメ矢束解テ押クツロケ中差ニ鼻油引テ待カ

部ノ類相交テ櫓塀ノ狹間ヨリ弓鐵炮ヲ打出シ暫ク防クト
云ヘトモ山形勢事トモセス攻近付ケハ今ハ早城中ノ者共
叶ハシトテ大將ヲ始トシテ甲ヲヌキ弓弦ハツシ降人ニ出
ケル

○垣

扶桑略記裏書云承平四年五月廿七日丙寅午剋大地震二度
京中所々築垣轉側
○三間垣

見聞雜錄云花澤落城に付藤枝の城も小原肥前與力の者共
番手差置候所悉明退信玄公御馬を被レ爲寄城取の様子今
川了俊の繩張にて中々堅固の地也乍去當城の馬出し古
風にて角馬出し也不直と在て馬場美濃守を召仰らるは
此方此馬出しを差圖仕取直し候へ尤丸馬出しの義心得た
るか御意なり馬場美濃守申上は山本勘介悉相傳申候に
付丸馬出し并三間の垣の極意まで乍憚相心得申候

○菱垣

武蔭叢話云伏見にて大閼秀吉御他界の後世上静ならず其
後伏見忍劇にて諸大名一ツになり家康公御屋敷へ取かけ
候と申ならし京伏見騒動斜ならず家康公も御門前に大竹
にて菱垣を結虎口を御もち成され候御長柄御鐵炮も御門

を開き玄關にて拵へ候

○獅子垣

官地論云四方之諸勢堀嚙必爾々々諸寄振ニ鑿木ニ縛廻獅子垣二十重二十重打圍是偏項王不異漢軍被圍雖不行々々庶姫々々如何有御嘆理角城中政親宣註今日之討死交名可擊閻魔之廳被註

安土日記云國司父子被楯籠候大河内之城取詰信長懸マハシ御覽シ東ノ山々御陣ヲ居ラレ其夜先町ヲ破ラセ燒拂二十八日ニ四方ヲ掛マハシ御覽シ南ノ山ニ織田上野介西ニハ木下藤吉郎北ニハ齋藤新五東ニハ柴田修理亮名陣トラセ其上四方シ、垣二重三重結サセラレ諸口之通路ヲ止

○鹿垣

梅松論云頼尙の勢は三條河原に馳集りて何方にても將軍の命を受けてむかふべきよし兼て約束の間彼河原に二千騎打立て頼尙申けるは東寺に勇士多く屬し奉る間縦敵堀鹿垣に付ても何事かあらん御合力の爲なりとも御馬の鼻を東寺へ向れば北にむかふ師直の河原の合戦難義たるへく是非に付て今日は御馬をも一足も動せらるへからず先頼尙東寺へ參るへしとして三條を西へむかふ云々

取テ築地ヲ築矢倉ヲ上資具ヲ備汀ノ方ニハ牛馬ノ尾髪ヲ取テ大綱ニ打セ亂杭ニ流レ懸テ夜晝此港ヲ守ラセケル

當代記云慶長十六年八月廿一日奥州會津邊大地震石垣悉崩崩櫓以下悉落殿守破傾瓦以下落人馬多死云々

○堀
太平記云主上自合修金剛法給御六波羅ニハ敵ヲ西ニ待ケル故ニ三條ヨリ九條マテ大宮面ニ堀ヲ塗リ櫓ヲ擡テ射手ヲ上テ小路小路ニ兵千騎二千騎扣ヘサセテ魚鱗ニ進ミ鶴翼ニ圍マン様ヲ謀ケル

又云赤坂合戦去程ニ阿曾彈正少弼八万餘騎ノ勢ヲ率シテ赤坂ヘ押寄セ城ノ四方二十餘町雪霞ノ如クニ取巻テ先時ノ聲ヲ揚タリケル此城三方ハ岸高シテ屏風ヲ立タルカ如シ南ノ方計コソ平地ニソヒテ堀ヲ廣深ク堀切テ岸ノ額ニ堀ヲ塗其上ニ櫓ヲ擡雙ヘタルハ如何ナル大力早態ナリトモ輒ク可責様ソナキ

大関記云利家末孫の城後攻録奥村妻女房二三人あひともなひ長刀をよこたへよるひるの堺をわがす城を打廻りやかて金澤より後卷なざるへきとの事にておはしますなとも云慰め或時は粥を大器に入持せつ、所勞の程を感し或時は夜寒の

太平記云新田義貞城ノ堀ノ際マテ責上テ夜晝少モノ引退十四日マテソ責タリケル此時ニソ堀ノ際ナル鹿垣逆茂木皆被引破テ城モ少防兼タル體ニソ見エタリケル播州佐用軍記云改録大手搦手橋ノ外ニハ鹿垣逆茂木結廻タリ

○堀橋
頼井日記云頼井矢續越中存分ノコレハ捨城ノ用イタルヘシ武略ノ便リモ有ニテ候ヘハト申サレ外カハニ鹿垣堀切大夫ニ付テ寄合衆ヲ籠候テ居申候

源平盛衰記云平三景生田森ヲ一ノ木戸ト定テ三方ニハ堀ヲ堀リ東ノ方ニ引キ橋渡シテ重々ニ逆木ヲ引キ北ノ山本ヨリ南ノ海ノ際マテ垣橋カキ矢間ヲアケテ一口コソ開ヒタル

又云高瀬渡字義經河ハタニ押寄セ見給ヘハ橋板ヲ境トリテ向ノ岸ニ垣橋ニカキ櫓ニ構ヘタリ水ハカサマサリテ底ミヘス其上ヘ亂株逆木ヒマナク打テ大繩小繩引張テ流シ懸タレハ鸛鴨ナトノ水鳥モ輒ク括通ヘシトモ見ヘサリケリ
○石垣
義殘後覺云高瀬可亡國相帝ヲ初トシテ左右ノ大臣左アラハ先笠山浦ニ要害ヲコシラフヘシトテ大石ヲ寄テ石垣ヲ丈夫ニ

袖の露をはらはんかため紅葉を焼酒を煖め堀うらの眠を覺しければ悦あへり

○出堀

太平記云赤坂合戦馬ヨリ飛下テ堀ノ上ナル細橋サラト走り渡リ二人ノ者共出シ堀ノ脇ニ引傍テ木戸ヲ切落サントシケル

○城壁

増補家忠日記云天正十八年四月八日秀吉暫ク湯本ノ眞覺寺ニ屯シ軍勢ヲシテ笠掛山ニ登ラシメ松柏生ヒ茂レルノ間ニ陣營ヲ修シ櫓ヲ高シ白紙ヲ以テ城壁ヲ包ムノ間小田原ノ城中ヨリ遠ク見レハ白壁ニ遠ス

○柵

續日本紀云天平九年正月丙申先是陸奥按察使大野朝臣東人等言從陸奥國ニ達ニ出羽柵ニ道經ニ男勝ニ行程迂遠扶桑略記云天喜五年九月二日鎮守府將軍源頼義與伴因阿倍頼時合戦之間頼時流矢所中還ニ鳥海柵ニ死丁但餘黨未服仍重進ニ國解ニ請賜ニ官符ニ徵ニ發諸國兵士ニ兼納ニ兵糧ニ悉誅ニ餘黨ニ
大友與廢記云合志之九月五ケ日津守の城を攻らる、津守思慮をめぐらし降参すへき分別ありといへとも津守一門

家に一風流の血氣の勇士ありて諫むる程は今大友殿威勢にまかせ知行押領せん事はまことには無心の所望なりとれかし申儀は一向其儀有間敷候一戰の御用意には今宵中にとかわに柵をふり方々物よりのくちをかためて敵か、つて柵をやふらはおそれすためなく打は鐵炮一挺にては三人も五人もかさねてとをすへし云々

初井日記云信長公勢從西口亂入愛ニ小野木谷等カ固中へ一揆ヲ追シメテ根備ニトテ福知ノ燒捨タル古城ヲ指南シテ取立サスル所ニ惡黨メラカ俄カニ此城ニ柵鹿垣付テ楯籠レハ兩人一族ノ小野木左兵衛ト谷民部トヲ入レテ宗徒ノ者トモヲ加へ一揆ノ大將ト名乗セテ所々ニ下知シ唱へテ西口ヲ騷動セシム

安土日記云國司父子被ニ楯籠ニ候大河内之城取詰信長懸マハシ御覽シ東ノ山々御陣ヲ居ラレ其夜先町ヲ破ラセ燒拂廿八日ニ四方ヲ掛マハシ御覽シ(中略)柵キヲ廻番衆菅屋九右衛門塙九郎左衛門下廿六

○柵ノ木戸
松原夜話云信長者トモハ何レモ陣所へ柵ノ木戸結ト閉ナルト密ニ被ニ仰付

もを集め一夜の内に取手を出て吊ひ合戦仕候然とも成繁公早速御出馬被ニ成御退治被ニ遊其後那波合戦無ニ御座候

奥羽永慶軍記云秋田山北秋田ノ境進藤一人ニ守ラセンコトヲホツカナク戸次カ良黨茂木因幡黒羽根彌兵衛鈴木佐々木遊藤野隱明寺傳督ナト云兵ニ足輕百人ヲ指添取手ヲ構へ進藤ニ加勢シテソヲカレケル

又云石畑初森田村ニ四本松境ヲ大事ニ思ヒ惡心怠リテハ惡カリナント思ハレケレハ同境初森ト云處ニ取手ヲ構ヘント初森式部少輔ニ與力二十餘騎足輕二百人ヲ預ケ取出ノ普請企ケル

野田福島合戦記云野田福島近日落城アラハ此一城計ニテ何ト云トモ叶フヘカラス落城ナキ中ニ其用意可レ有トテ九月十二日夜半計ニ寺内ノ約束ノ早鐘ヲツキ玉ヘハ則諸梟那集リ一揆トモ驅催シ樓岸河口ニケ所ノ取出ヘ勢ヲ出シ鐵炮ヲ放カケ、リ

蜂須賀家文書云夏中可レ令ニ進發ニ候條其以前尾州境取出之儀申付人致差遣候然而其表之事彌馳走可レ爲ニ祝著ニ候尙朝比奈備中守可レ申候恐々謹言四月十二日水野十郎左衛門殿義元

續日本紀云寶龜元年八月己亥蝦夷宇漢迷公宇屈波宇等忽率ニ徒族ニ逃ニ還賊地ニ差レ使喚レ之不ニ肯來歸ニ言曰率ニ一二同族ニ必侵ニ城柵ニ於レ是差ニ正四位上近衛中將兼相模守勳二等道島宿禰島足等ニ檢ニ問虛實

○塙柵

賀越園諍記云一揆等攻落天正二年四月十四日ニ大野南袋北袋七山家ノ一揆等集云ケルハ村岡山ヲ持門ヨリ取テ城ニ拵ヘ持ナラハ此山中ノ田島悉ク刈田トナルヘシ左様ナラハ山中ノ難義ナリイサヤ各打立テ今夜ノ中ニ村岡山ニ塙柵ヲ付城ニ構ヘ持ヘシト云リ各此義尤ナリト同心シテ七山家ノ者トモ夜中ニ塙柵ノ木亂杭逆茂木ヲ結少堀ヲホリテソ楯籠リケル

○矢羅井

奥羽永慶軍記云正宗大内米澤ノ先手ハ小築川泥鑿齋白石若狹守濱田伊豆守原田左馬助五百餘騎北ノ方ニテ戰シカ城ノ矢羅井ノ中迄攻入討取首數二百餘リ是拔群ノ高名トソ聞ヘケル

○取手

新田由良傳記云那波殿普代の侍とも今の幼子は主の子にて御座候間大將となして方々にみたれ居たる普代の侍と安土日記云御取手之所之事員野ノ郷道ヨリ南山手ニ要害候テ蜂屋維住惟任蒲生若州居陣候也

松原自休手録云佐崎軍并一揆蒙ニ赦免ニ家康卿佐崎ノ寺内ヲ攻ン爲ニ取出ノ普請ヲサセラル、處へ水野下野從ニ刈屋見舞ニ來レリ云々

又云牛久保ハ内通ノ子細アレハ吉田へ押向構ニ取手ニ喜見寺ニハ鶴殿八郎三郎精塚ニハ小笠原新九郎二連木口ノ取手ニハ被ニ置ニ戸田主殿

又云彈正忠五千餘騎ニテ八月四日清須ヲ出テ衣笠寺鳴海ニ陣ス翌日安祥ニ著陣矢矯川下ノ瀬ヲ渡リ上和田ノ取出ニ移リ同日馬頭ノ原へ押出陣ノ取ラント上和田ヲ未明ニ出張ス

松平記云永祿五年六月岡崎衆牛久保牧野新次郎同出羽守をせめらる、吉田城主石原肥前守をせめらる、佐脇の八幡の取手を取りて板倉彈正同主水三浦左馬助を駿河方より籠置

豐臣家譜云永祿九年信長謂ニ家臣曰吾屢侵ニ掠美濃ニ而敵人猶未ニ畏服ニ我構ニ岩於川畔ニ運ニ奇計ニ以欲ニ平ニ誦美濃ニ云々

家忠日記抄云天正六年七月三日横須賀取出の場迄罷出普

請仕候

又云天正八年三月十三日來十六日に御出陣の由吉田より申來高天神取出の由

○岩城 取手城

初井日記云三草五ヶ所之取出城ニハ前々ヨリ在番衆ハ二千餘騎ノ着到ニテ候小野原右京三草左京等萬事ノ相談ニテ今度ハ小野原龜山ノ在番ニテ留守ニテ候

末森記云夜々北ノ屋倉ニテ家老四五人召集評定シテ取出ヲコシラヒ所ナト相談キハマリ候處ニ越中方ヨリ付城ヲスル人アリ利家卿聞給ヒ此儀僞ト思ナカラ加様ノ事聞油斷シテ末代ノ耻辱ニナル事モアルヘキト思召村井又兵衛岡島喜三郎片山内膳不破彦三ヲ召出サレ御相談アリテサラバ加賀越中ノ境目朝日山ヲ取手ノ城ニコシラヘ候ヘキ由ニテ云々

家忠日記抄云天正六年三月十三日敵の取出今城へ御旗本國衆大將計働

○岩陣

初井日記云池上夜先ツハ明智日向守瀧川左近(中路)等ヲ始トシテ將軍ノ本備大將物司并ニ旗頭トモノ陣ニイクラト云コトナク段々ニ岩陣ノ四方ニ備ヲ調テ待候

土數合戦

○本陣

松原自休手録云家康ハ被_レ抱_レ四百騎依_レ之國人屬_レ之一條ヤシキヲ被_レ定_レ本陣

○陣屋

將門純友東西軍記云將門敵ヲ思フ圖ニ遣リスコシテ軍士ヲ遣シ敵ノ陣屋ヲ放_レリ忠ノ者アリテ放火スルカトアヤシミ思フ處ニ左ノ森ノ中ヨリ將門軍ヲ備ヘ_レ□□□□□□ツカニ掛ル云々

奥羽永慶軍記云天正十六年六月十八日ノ早旦ニ會津ノ住人尾熊因幡守手ノ者三百人我陣屋ヲ出テ爰彼ヲ馳廻伊達方ノ用水山ノ根ノ堀ヲ埋ミ流ヲ關留ントス

義光物語云_{會津勢}義光公も聊の休息もまたまはず會津勢の陣取たる戸上山の方を御心に懸て馳入たまふ處に陣屋を焼立る火の色ほのめき見也ければすは敵こそ退け早螺をたてよや者共として御身をまふていらて給けるに諸卒も兼て期したる事なれば馬引寄ひたくと打乗てもみにもんて馳著切伏突伏進ける

○七陣

扶桑略記云康平五年八月十六日定_レ七陣押領使_ニ武則赴_ニ

○岩塚

初井日記云_{攝州青野合戦條}又今度ノ合戦ハ一時攻ノ用意ト云將軍ノ仰セモ怨敵ノ色ヲ立候弓矢ノ禮ハカリニトノ事モトヨリ當家大將衆覺悟ニモ候ノ處思ノ外攝州ノ旗頭トモノ軍立剛敵ノ振合ニテ必死ノ覺悟ヲキハマ候ユヘ是非ナク大合戦ニ及ヒテ青野ノ城モトヨリノ岩塚コノ岩三ヶ所ヲ乗ヲトシテ候

○岩ノ番所

關八州古戦録云_{柿崎和泉守景家村左衛門佐并ニ與力ノ侍二人踏留テ相戦金井ハ立腹切テ死シ二人ノ士ハ切拔テ岩ノ番所ヘ走り歸リ事次第ヲ語モ敢ス云々}

○征狄所

續日本紀云和銅二年七月丁卯令_ニ越前越中越後佐渡四國船一百艘送_ニ于征狄所

○御本所

勢州軍記云伊勢國司北畠具教卿永祿末爲_レ防_ニ信長_ニ先建_ニ居館於飯高郡細頸後亦營_ニ城廓於同郡大河内_ニ讓_ニ嫡子信意_ニ號_ニ大河内御本所_ニ也具教者隱居薙髮_ニ其後大河内宮邊_ニ多氣郡大淀_ニ然_ニ工藤依_レ叛逆_ニ今德與山方小森上野藤方家與_ニ織田掃部助信昌_ニ挑_ニ合戦_ニ國司家與_ニ勢州北方諸

○三ノ陣

松山_ニ道次_ニ盤井郡中山大風澤_ニ翌日到_ニ同郡萩馬場_ニ彼此合戦射_ニ斃賊徒六十餘人_ニ被_レ疵逆者不_レ知_ニ其數_ニ賊衆捨_レ城逆走則放_レ火燒_ニ其柵_ニ了

○三ノ陣

鴉鷲物語云中囑のひつしるのそり橋をひつすちかへて神宮寺の大木の通一町あまり是も鹿垣をゆふ三の陣をのの用害をまわけて大廻をはひとつにまこめたり城にかかりては合戦をすへては平城の分には正に日本一なり

○御野陣

伊達日記云大内其夜ハ小濱へ歸被_レ申候味方モ五里程引上御野陣被_レ成候(中路)明日ハ南ノ竹屋敷へ陣ノ通路ヲ切可_レ申候間總體ヲ被_レ相詰_ニ可_レ然申上候ヘハ左候ハ、助勢打下サマタゲヘク候城中ヨリモ可_レ出候間兩口ノ合戦如何可_レ在由御意ニ候云々

○小路軍

太閤秀吉出生記云豊前娘幼名キサ朝比奈駿河守ニ嫁ス予カ祖母也常ニ是ヲ語ルヲ聞豊前女房キサカ母ハ名譽ノ強力也豊前ハ氏真ニ謀ニテ討ル後駿河江尻ノ屋敷ニ籠ル豊前カ侍共ニ三十騎籠ルニヨリテ三浦右衛門ト云者二百騎計リ差添雜兵千四百ニテ江尻ノ屋敷へ押寄討_レ之近代

ノ小路軍ト云々

○關

太平記云山門山門ニハ敵是迄可寄トハ思モ寄サリケル
ニヤ道々ヲモ警固セヌ關逆木ヲ構モセサリケレハ云々
島津家本太平記云關城西國ノ敵辨津國摩耶城ニ執上テ
兵庫湊川ニ關ヲ居タリト聞シカハ兩六波羅大ニ駐テ佐々
木判官時信常陸前司時朝四十八箇所ノ篝火在京ノ人七十
三人并ニ國城寺衆徒五百餘人彼此都合セ千八百餘騎ヲ摩
耶城へ差下サル

○堀切

梅松論云細川の人々あみたか峯には目もかけず川原を下
りに南へむかひしほとに淀竹田に充滿したる敵とも竹田
繩手の小家を堀切竹を打切て鹿垣を結び櫓をあげ城戸を
相待所に大勢掛りける

武蔭叢話云小田原陣の初蒲生氏郷の攻るは井細口にて岩
槻の城主大田十郎氏房持口なり(中略)蒲生先手の兵共氏
郷に先達て追行所に廣津兵庫健追取なれたか、る味方の
人數をた、き返し其身具先掛て堀切の内へ片足其向へ片
足踏出し一健參んと呼りける氏郷は廣澤を能敵と見て是
を討んと飛込々々戦ひけれとも堀切の内に敵二人有之

氏郷の突出したまふ鎧を取はつし、七八度ほど仕ゆへ
廣澤を討取事叶はず廣澤利に乗て氏郷を討ち取らんと進
み戦ける

○堤

豊臣家譜云秀吉進兵攻竹鼻城、城主不破源六拒之秀吉
察ニ城形謂不可急屠之即築長堤、決木曾川、而灌
之堤、水浸城云々

○土手

清正記云所々出城數十ヶ所退散候條付入に小田原へ押寄
五町十町取巻候一方は海手警固舟を寄詰候三方以多人
數取廻則堀土手堀堀已下被仰付半に北條首可刎事不
可有、幾程候様子不可氣道、候次葦山の義も付城堀堀
堀出來候

○土井 土居

賀越園諍記云一發等攻淺江二月十九日ニ親父宗天上願ヲ引
寄テイサ、セ玉ヘト宣テ指殺シヤカテ腹ヲ切ラレケレハ
(中略)則雜人下女四方ノ土居ヲ乗越へ堀へ飛入落行ヲ刎
取打殺ス有様目モアテラレヌ哀也

播州佐用軍記云山崎合戰附淺野モ南峯へ加勢スル處ニ横山
途中ニ出合ス追ッ捲ッ相戦シカトモ終ニ横山自害シテ合

戰忽止ヌ淺野モ軍勢餘多討レ其身モ疲レ果テ今ハ進退度

ヲ失ヒイタリ此田宮部竹中カ聞テ其身モ重手ヲ負陣屋ノ
中ニ在ケルカ不易コトニ思ケレハ兩人秀吉卿ノ前ニ出
テ今日ノ合戦ノ折先日ヨリ打續敵晝夜ヲ不_レ分打出トイ
ヘトモ引歸敵一人モ候ハネハ毎度味方勝コトヲ得タルニ
テ候(中略)出張ノ者トモヲ一端此要害ノ中へ引セラレ敵
ノ謀ヲモ折候ヘカシ恐ク此要害へ引籠シテ防候ハ、上月
カ城ニハ劣リ候マシ四方ノ塚深土井高クシテ攻ムルニ利
ヲ失フヘシ

○橋

源平盛衰記云東國兵近江國ニハ勢多ノ橋山城ノ國ニハ宇
治ノ橋ニノ難所アリ定テ橋ハ引ヌラム河ハ底深クシテ流
レ荒レナヘテノ馬ノ渡スヘキ河ニ非ス其上ヘ河中ニ亂杭
逆木打チ水ノ底ニ繩張流シカケヌラム

承久記云宇治橋をひき橋いたはつして川中にらんくひを
うち大つなを引わたしさかもきをゆひ北のきはたにや
くらあけさら旗たて、くん兵あまたちんるとる

太平記云六波羅武部七郎妻鹿カ鐵ノ上帶ヲ蹈テ肩ニ乗揚
リ一刎ハネテ向ノ岸ニソ著ケル妻鹿カラノト笑テ御邊
ハ我ヲ橋ニシテ渡タルヤイテ其堀引破テ捨ント云儘ニ岸

ヨリ上ヘツト刎揚リ云々

又云三井寺額田堀口江田大館七百餘騎ニテ逃ル敵ニ追ヌ
カフテ城ノ中へ入ントシケル處ヲ三井寺ノ衆徒五百餘人
木戸之口ニ下リ塞テ命ヲ捨關ケル間寄手ノ勢百餘人堀ノ
際ニテ被_レ討ケレハ後陣ヲ待テ不_レ進得_レ其間ニ城中ヨリ
木戸ヲ下シテ堀ノ橋ヲ引ケリ

大友興廢記云宗義公日志賀親教のむかはる、口に橋岸とい
ふかこひあり親成の侍奈津田彈左衛門是をもつて最初に
これをせめらる、(中略)日向國沙見日知也門川此三城ま
て宗麟公の御領分になりぬさるほとに右の橋岸のかこひ
にて戦死したる奈津田彈左衛門大かうの兵なり云々

義光物語云庄内越後守見之源右衛門をうたせながら此
城を攻落さすと云事や有へき其上遍々せは猶々鐵炮に可
_レ中に透間をあらせず攻入とて眞先に進み堀の上成細橋
を打渡り堀下へ付ければ逸物をの若者とも堀へ飛入々々
堀逆茂木を引破り攻入ける

○虎口

粗井日記云信長公時粗井本目波多賀須而取切能勢野 爰ニ能勢
口ノエセ老トモ不義ヲ構ヘ天王虎杖兩城ヲ敵ニノラセテ
候後敵虎口ヲ開キテ次第ニハシ入粗井本目波多賀須等ノ

城々ヲ押へ寄リ候テ所々ノ要害ニ付城構トモシテ能勢青野トハ八田矢織ノ八上御本城ト三所ノ中ヲ取切テ能勢口京口ヲ取敷カント工夫シテ候

又云池上夜燒草ヲ取出シテ矢倉下ニ入テ燒立ケレハ敵是ニアクミ大勢落合テ防キテ候カ手ヒトク乗込ホトニ敵方ハ裏ノ南ノ虎口ノ平林大内藤秀誠ノ攻口ニ討敗テ拔出トス

○要害 用書

太平記云後守仲時精谷ハ一陣ノ軍ニハ討勝ツ合ハヨモ手ニ礙ル者非シト心安ク思テ朝霧ノ晴行儘ニ可レ越末ノ山路ヲ遙ニ見渡シケレハ錦ノ旗一流岸ノ嵐ニ翻シテ兵五六千人カ程要害ヲ前ニ當テ待懸タリ

又云正成下向曾氏卿直義朝臣大勢ヲ率テ上洛ノ間要害ノ地ニ於テ防キ戰ハシ爲ニ兵庫引退ヌル由義貞朝臣早馬ヲ進テ内理ニ奏聞アリケレハ主上大ニ御駭キ有テ楠判官正成ヲ被レ召テ急兵庫へ罷下義貞ニ力ヲ合テ合戰ヲ可レ致ト被レ仰ケレハ云々

會津四家合考云氏郷由來并氏郷一攻攻テハ叶フマシト強ニ進マレケルニ中略戸田三四郎楨村兵部大輔二人ヲ御前へ被レ召彼岩酌リ要害ヲ能見テ參レトテ遣サレケル

舍ノ莖ヲ破テカヒ楯ニカケル計也云々

奥羽永慶軍記云八沼勢忽チ崩レテ八方ヘニケ散タリ山形勢ハナヲモ稠クヲヘカ、ル敵城中ヘ我先ニトヨミ入シカ手前ヨリコシテハタル亂杭逆茂木ニフセカレテ城中ヘ入エヌ右往左往ニ逆行或ハ敵陣ニ行アタリセンカタ無討死スルモ有リ或ハ難所ニ行ツマリ自害スルモ多カリケリ

別所長治記云丹生山夜討淡河彈正ハ一族郎等ヲ集申ケルハ近邊丹生ノ山ノ一揆ヲ秀吉賢キ謀ニテ追落ス此上ハ當城ヘ押寄ヘキコト四五日ニ不可レ過サレハ天ノ時ハ不可レ如ニ地利ノ利ハ不可レ如ニ人ノ和トイヘトモ大敵ヲ請テ戰ニ得レ利專地ノ利肝要也誘打出テ敵ヲ防カン用意ヲナシテ一族郎等五六十人足輕人夫三百普請道具ヲモタセ日々ニ城ヲ出敵ノ可シ寄來道ヲ堀切落ヲ拵或馬サクリ車菱ヲマカセ逆茂木大綱ヲ張ケル

播州佐用軍記云城見川上下有根苜屋マテノ川筋ノ渡船迷奪取碎テコソハ捨タリキ加之敵ノ渡ラント思フ瀬毎ニハ亂杭打テ水底ニハ藤綱多ク張置タリ

○式ノ座

射禮私記云式の座につくへき次第敷皮をは前弓も後弓も

鴉鷲物語云中鴨にらん杭うつて逆木ひき用害かため敵を待かけたる氣色也使者木戸口ちかくさしよせて高聲に案内いふ

新撰信長記云朝倉式部大夫三千餘騎ニテ小谷ヘソ上セラレケル頓テ江州口クラヘ刈安ニ要害ヲ構ヘ越前勢ヲ籠置ラル

頼井日記云信長公勢頼井本目波多賀須而取切能勢青野東口ハ一面ニ敵ニテ候ヘハ何事ニモ思フマ、ナラス武略ノ手足モ開ケ申サス候敵ハ日々ニツノリ四方ニ鹿垣付要害付シテ採付ントハスルニテ候

松原自休手録云豊後木付ノ城賜ニ羽柴越中守一使ニ老臣松井佐渡有吉四郎右衛門守ニ被城于レ此大友宰相統依爲ニ舊主國人等催ニ軍勢ニ石垣原立石ニ構ニ要害ニ古來從ニ東國一初テ至當州一時卜居吉例ナレハ也

○逆木 逆茂木

○亂杭

源平盛衰記云兼康ハ中略福輪寺ナツ掘リ切テ管垣ヘ逆木引キナトシテ馬モ人モ通カタク構タリ云々

又云船合俄ニ拵ヘタル城ナレハ堀ノ一所ヲモ不レ掘堀ノ一重ヲモ不レ塗唯所々ニ大木少々切倒シテ逆木ニヒキ房

白毛を的の方へ向てまきてかくしかみをまはり著座して懸て杵をぬくへし扱た、うを取出して扇をぬきてた、う紙の上に少すちかへてをくへし前も後も右の方に敷皮の下へをし入て少みゆる様にをくへし

○アツチ

常照愚草云大的の物草鹿笠掛などのをもあつちといふへしまとはと云事は有間敷なり但大的などはかりの時のははといふ事をれもあつちと云事猶可レ然なり

百手聞書云あつちなくて瀆なとにてかけすかして射る事も有へし

○敷塚

佐竹宗三聞書云御所の時引はなす矢弓場中過てある時はすつる矢也弓場中すきは肌を入れて行て矢を右になしと畏いたつきを取て持敷塚へ直にかへりて畏よて前のこくとちちて射へきなり又うちあけて引おろしさまに矢あし本へおちたりともすへる矢にて矢取にとらすへし

○疏近

八廻の日記云弓手々々をしもちりをしもちり馬手切々々々の矢沙汰したる時も繩近の矢を繩ちかよと問て可レ入繩内近きならば疏近の矢を是よと問て可レ入

○マルヒシヤクリ

○ツキシヤクリ

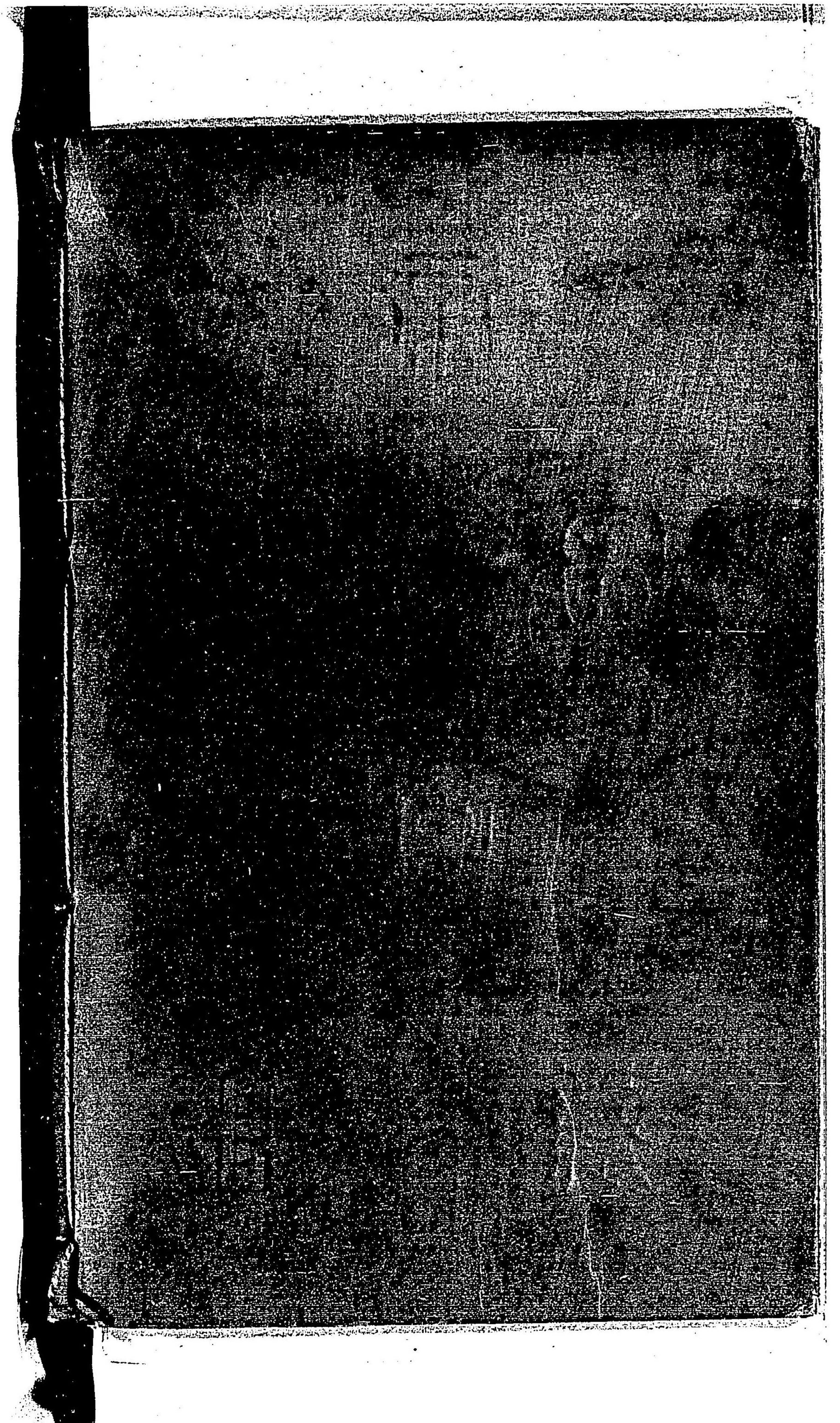
射御拾遺抄云つさまやくりの事まるひまやくりにも又羽引にもあるへしけつりやうまるひまやくりのあひとをき時よこてんにかうかいを又さして矢とをりまでよこをつきて打なりこれをつさまやくりといふなり

192
53

192
55

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or name, with decorative flourishes and small floral motifs interspersed.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or name, with decorative flourishes and small floral motifs interspersed.



55

武家名目
六